今宿遺跡2

（いまじゅく）

―― 第3次調査の概要 ――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第738集

2003

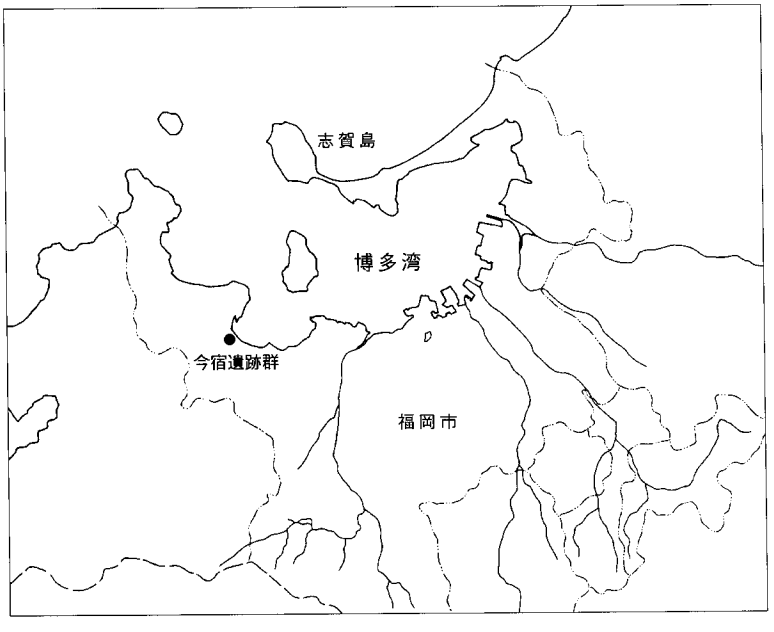
福岡市教育委員会

今宿遺跡2

（いまじゅく）

―― 第３次調査の概要 ――

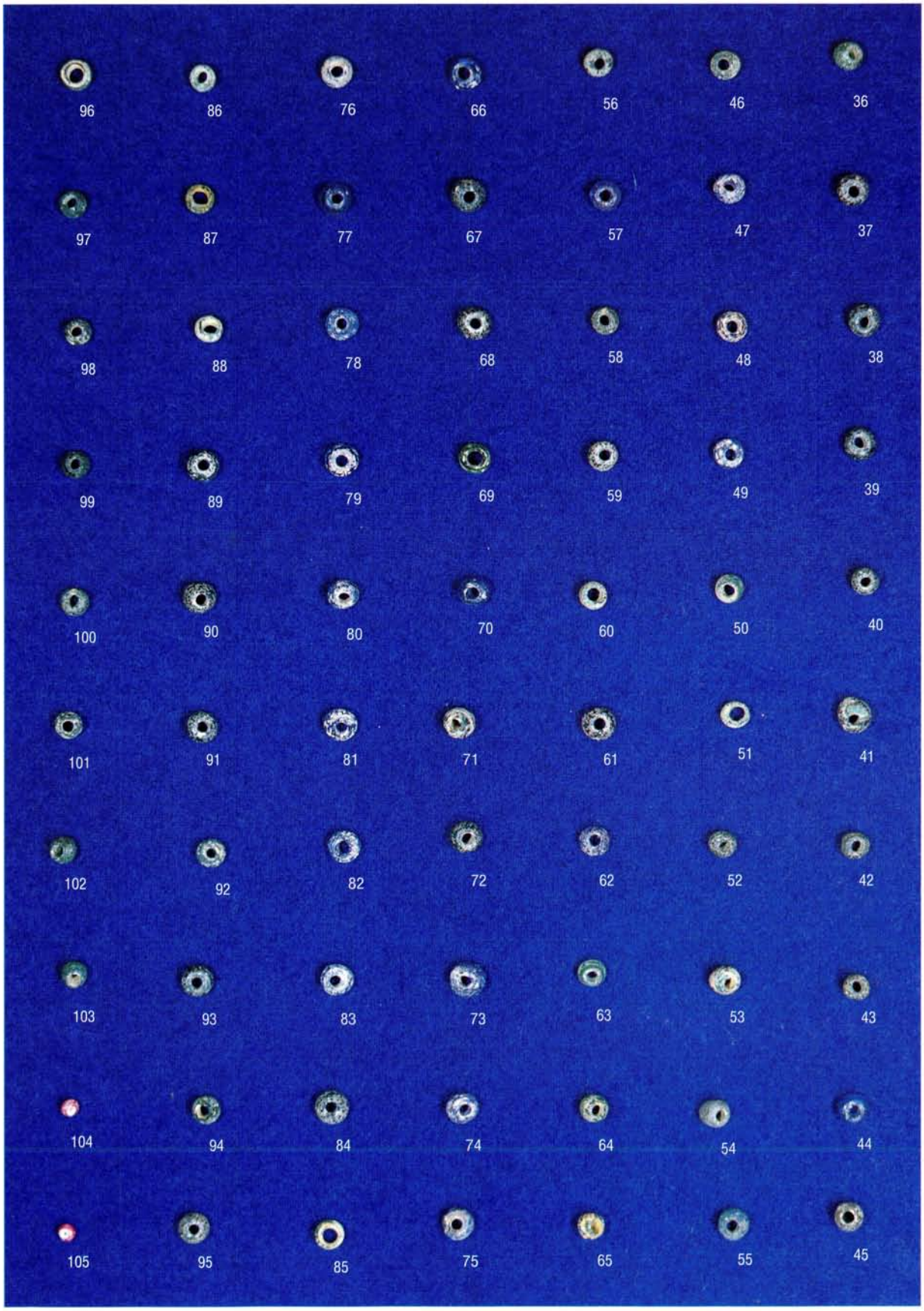
福岡市埋蔵文化財調査報告書第738集



調査番号　８８２６
遺跡記号　ＩＭＪ－３

２００３

福岡市教育委員会


96 86 76 66 56 46 36
97 87 77 67 57 47 37
98 88 78 68 58 48 38
99 89 79 69 59 49 39
100 90 80 70 60 50 40
101 91 81 71 61 51 41
102 92 82 72 62 52 42
103 93 83 73 63 53 43
104 94 84 74 64 54 44
105 95 85 75 65 55 45

6号土壙出土ガラス玉

巻頭図版 2

(1) 1号炉跡・6号土壙遺物出土状況(西より)

(2) 3号土壙遺物出土状況(西より)

序

いにしえの昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、21世紀の更なる発展を目指してさかんに都市開発が押し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、民間住宅の建築に先立って実施した今宿遺跡第3次調査の発掘調査報告書です。今回の発掘調査では、弥生時代終わりの甕棺墓と古墳時代初めから古代・中世の土壙群を発見することができました。このうち古墳時代初めの土壙からは韓半島系の陶質土器が出土しました。これはこの時代の対外交流に占める今宿の地の重要性を示す貴重な資料です。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　生田　征生

れいげん

1．本書は、福岡市教育委員会が民間住宅の建設に先立って、昭和63(1988)年7月25日～9月10日までに福岡市西区今宿で緊急発掘調査した今宿遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
2．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3．遺構は、甕棺墓をST、土壙をSK、焼土壙をSH、溝遺構をSDと呼称して記号化し、その後に遺構ごとに通番して01からナンバーを付した。
4．本書に掲載した遺構の実測には小林義彦があたった。遺物の実測は小林と今村ひろ子、平川敬治が作成した。
5．本書に掲載した遺構と遺物の製図は、小林と今村が作成した。
6．本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。また、巻末には6号土壙から出土したガラス小玉の科学的分析を比佐陽一郎(福岡市埋蔵文化財センター)氏に依頼し、比佐氏の分析原稿を付論として掲載した。
7．本書の執筆・編集は小林が行った。
8．本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：8826	遺跡略号：IMJ-3	分布地図番号：111-0621
調査地籍：福岡市西区今宿字池田尻1095・1097番地		
工事面積：862㎡	調査対象面積：862㎡	調査実施面積：660㎡
調査期間：1988年7月25日～9月10日		

本　文　目　次

序

Ⅰ．はじめに……1

1．発掘調査にいたるまで……1

2．発掘調査の組織……1

3．立地と歴史的環境……3

Ⅱ．調査の記録……7

1．調査の概要……7

2．甕棺墓……9

3．土壙……9

4．焼土壙……23

5．溝遺構……25

6．その他の遺構と包含層出土の遺物……26

Ⅲ．おわりに……38

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図(1／25,000)……2

Fig. 2　今宿遺跡周辺旧地形図(1／25,000)……4

Fig. 3　今宿遺跡第3次調査区位置図(1／1,000)……5

Fig. 4　今宿遺跡第3次調査区周辺現況図(1／400)……6

Fig. 5　今宿遺跡第3次調査区遺構配置図(1／150)……8

Fig. 6　1号甕棺墓実測図(1／30)……9

Fig. 7　1号甕棺実測図(1／12)……9

Fig. 8　1号土壙実測図(1／30)……10

Fig. 9　2号土壙実測図(1／30)……10

Fig.10　2号土壙出土遺物実測図(1／3)……11

Fig.11　2・26号土壙出土土錘実測図(1／3)……11

Fig.12　3号土壙実測図(1／30)……11

Fig.13　3号土壙出土遺物実測図1(1／3)……12

Fig.14　3号土壙出土遺物実測図2(1／3)……13

Fig.15　4号土壙実測図(1／30)……14

Fig.16　4号土壙出土遺物実測図(1／3)……15

Fig.17　5号土壙実測図(1／30)……16

Fig.18　5号土壙出土遺物実測図(1／3)……16

Fig.19　6号土壙実測図(1／10)……17

Fig.20　6号土壙出土鉄器実測図・銅銭拓影(1／2)……17

Fig.21　7～11号土壙実測図(1／30)……20

Fig.22　7・26号土壙出土遺物実測図(1／3)……21

Fig.23　12～15号土壙実測図(1／30)……21

Fig.24　1～3・5・6号炉跡実測図(1／30)……22

Fig.25　1・4号炉跡出土遺物実測図(1／3)……23

Fig.26　5号炉跡出土土錘実測図(1／3)……23

Fig.27　1号溝土層断面図(1／40)……24

Fig.28　1号溝出土遺物実測図(1／3)……25

Fig.29　1号溝出土土錘実測図(1／3) ……25
Fig.30　18・53号ピット出土遺物実測図(1／3) ……26
Fig.31　24・27号ピット出土土錘実測図(1／3) ……26
Fig.32　包含層出土土錘位置図(1／150)……27
Fig.33　包含層出土遺物実測図1(1／3) ……28
Fig.34　包含層出土遺物実測図2(1／3) ……29
Fig.35　包含層出土遺物実測図3(1／3) ……30
Fig.36　包含層出土遺物実測図4(1／3) ……31
Fig.37　包含層出土遺物実測図5(1／3) ……32
Fig.38　包含層出土土錘実測図1(1／3) ……33
Fig.39　包含層出土土錘実測図2(1／3) ……34
Fig.40　包含層出土土錘実測図3(1／3) ……35
Fig.41　包含層出土石器・鉄器実測図(1／3)……37
Fig.42　包含層出土銅銭拓影(1／2)……38

表　目　次

Tab. 1　今宿遺跡調査地一覧表……7
Tab. 2　6号土壙出土ガラス玉計測表1 ……18
Tab. 3　6号土壙出土ガラス玉計測表2 ……19
Tab. 4　土錘計測表1 ……39
Tab. 5　土錘計測表2 ……40

図　版　目　次

巻頭図版1　6号土壙出土ガラス玉
巻頭図版2　(1) 1号炉跡・6号土壙遺物出土状況(西より)
　　(2) 3号土壙遺物出土状況(西より)
PL. 1　(1) 調査区全景(西より)
　　(2) 調査区全景(北より)
PL. 2　(1) 1号甕棺墓全景(北より)
　　(2) 1号甕棺墓全景(東より)
　　(3) 調査区北半部全景(北より)
PL. 3　(1) 1号土壙全景(北より)
　　(2) 2号土壙全景(南東より)
　　(3) 3・4号土壙全景(北より)
PL. 4　(1) 3・4号土壙遺物出土状況(北より)
　　(2) 3号土壙遺物出土状況(北より)
　　(3) 3号土壙遺物出土状況近景(西より)
PL. 5　(1) 5号土壙遺物出土状況(北より)
　　(2) 6号土壙遺物出土状況(西より)
　　(3) 7号土壙遺物出土状況(南より)
PL. 6　(1) 1号炉跡・6号土壙遺物出土状況(西より)
　　(2) 1号炉跡遺物出土状況(西より)
　　(3) 2・3号炉跡遺物出土状況(東より)
PL. 7　(1) 2号炉跡遺物出土状況(南より)
　　(2) 2号炉跡土層断面(北より)
　　(3) 3号炉跡全景(東より)
PL. 8　(1) 4号炉跡全景(南より)
　　(2) 5号炉跡全景(西より)
　　(3) 5号炉跡土層断面(東より)
PL. 9　(1) 1号溝全景(北より)
　　(2) 1号溝土層断面(北より)
　　(3) Ⅶ区出土土器群(北より)
PL.10　出土遺物1(縮尺不同)
PL.11　出土遺物2(縮尺不同)
PL.12　出土遺物3(縮尺不同)
PL.13　6号土壙出土ガラス玉(縮尺不同)
PL.14　出土土錘1(縮尺不同)
PL.15　出土土錘2(縮尺不同)
PL.16　出土土錘3(縮尺不同)
PL.17　出土土錘4(縮尺不同)
PL.18　出土土錘5(縮尺不同)

Ⅰ. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

今宿遺跡は、博多湾西奥の今津湾に面した糸島半島基部の砂丘上にある。福岡市の西郊に拡がる今宿平野は、西の糸島平野に至るまでは東西にのびる狭長な平野で、1970年代までは高祖山麓を通る唐津街道と海沿いを北へのびる県道志摩前原線に沿って町並みが拡がる都市近郊の農村地帯であった。ところが、80年代になると国道202号線バイパスや市営地下鉄の開通によって市街化が進み、開発に伴って農耕地は次第に住宅地へと変貌し、二十一世紀を迎えた今日では昔日の姿を求めることは難しくなりつつある。80年代後半から90年代前半は、まさにこの変貌期で幹線道路を中心に集合住宅や新興の住宅団地が次々に建ち、古い町並みから新しい町並みへと移り変わる時期であった。

昭和61(1986)年秋、今宿在住の松本政人氏より今宿町字池田尻の地に集合住宅を建設する旨の照会が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は、弧状にのびる古砂丘上に立地する今宿遺跡の北部に位置し、周辺地からは甕棺墓や細型銅剣などが出土している。また、北には玄界灘沿岸一円に蛤刃石斧を供給した今山があり、申請地内には弥生時代を中心とする遺構が存在する可能性が予測された。そこで昭和61(1986)年10月8日に、遺構の存否を確認するため申請地の地形に沿って東西に2本のトレンチを設定して試掘調査を実施した。その結果、申請地には古墳時代はじめの土壙などのほか、その上層には厚い遺物包含層があることが判明した。

埋蔵文化財課では、これらの遺構や遺物包含層を現状で保存すべく地権者と協議を重ねたが、計画の変更には至らず、発掘調査によって記録保存を図ることとなった。発掘調査は、建物の建設によって破壊される最小限に止め、現状保存を図る面積の確保に努めた。調査は、昭和63(1988)年7月25日よりはじめ、韓半島との交流を物語る陶質土器やガラス小玉や鉄鋏を埋納した土壙などを検出し、改めて海浜性遺跡の重要性を示す結果を得て9月10日に無事終了した。

2. 発掘調査の組織

調査主体	福岡市教育委員会		
調査総括	文化財部埋蔵文化財課第2係		
	埋蔵文化財課長	山崎純男(現任)	柳田純孝(調査時)
	埋蔵文化財課第2係長	田中寿夫(現任)	飛高憲雄(調査時)
調査庶務	文化財整備課	御手洗清(現任)	松延好文(調査時)
調査担当	埋蔵文化財課第2係	小林義彦	

調査・整理補助　梶村嘉長

調査・整理作業　尾園　晃(九州大学、現桂川町教育委員会)　青柳聖子　荒巻ヤチ代　有富溢子　石橋陽子　今村ひろ子　上原チヨ子　緒方マサヲ　木村良子　後藤ミサヲ　坂田美佐子　柴田勝子　柴田タツ子　下川奈津代　庄野崎ヒデ子　津田和子　堤　滝代　土斐崎孝子　土斐崎千枝　土斐崎初栄　鳥巣良子　西島タミエ　西島初子　野坂三重子　原　陽子　馬場イツ子　平井和子　松本藤子　三栗野明美　三栗野雅子　宮原邦江　山田サヨ子　吉岡アヤコ　吉岡員代　吉岡竹子　吉岡田鶴子　吉岡蓮枝　吉積ミエ子　脇坂初子　脇坂ミサヲ

なお、発掘調査ならびに整理報告にあたっては、山崎純男、平川敬二氏よりご指導と助言を受けた。さらに、真夏の炎天下で発掘調査に従事された作業員の方々をはじめ、地権者の松本政人氏や施工社の新栄住宅の関係者諸氏に物心両面に亘って便宜を図っていただいた。記して謝意を表したい。

Fig.1　周辺遺跡分布図(1／25,000)

3. 立地と歴史的環境

福岡市の西部には、長垂山を東境とする狭長な平野が糸島平野の西に拡がっている。この今宿平野の北東には、長垂山と今山に囲まれた小さな今津湾があり、その海岸線に沿って古砂丘が弧状に形成されている。今宿遺跡は、この古砂丘上に立地する砂丘遺跡の総称で、砂丘の長さはおよそ1,500m、最大幅は200m、標高は5mほどである。また、その汀線に沿って国史跡の元寇防塁が、北は瑞梅寺川の河口を越えて今津へ、東は長垂山を越えて生の松原から西新へ累々と続いている。

この古砂丘上の今宿遺跡は、高祖山系から派生し、長垂山の西縁に沿って流れる七寺川に東を限られ、北は太型蛤刃石斧の原材を産する今山によって境をなしている。この今山遺跡の石斧製作址で製作された石斧は、福岡県南部から佐賀県や熊本県北部までの広範囲にわたって供給されている。

今宿遺跡では、これまでに5次にわたる発掘調査のほかに試掘調査や立会調査が行われており、次第に遺跡の様相が明らかになりつつある。この古砂丘上における人跡の初現は、縄文時代の晩期に遡る。古砂丘の東端を北流する七寺川の河口左岸に位置する第5次調査区では、弥生時代初頭から中期の甕棺墓や土壙墓群が造営され、その遺構下から縄文時代晩期の遺物が出土している。古砂丘の北部では、第3次調査区(本調査)の南東方に位置する第1・2次調査区で、弥生時代前期後半の甕棺墓や細型銅剣とヒスイの勾玉を包蔵する土壙をはじめ古墳時代前期の土壙等が検出され、隣接する市営住宅地内では、甕棺墓や箱式石棺墓の発見が報告されている。また、古砂丘の北端に立地する今山の東縁に拡がる海岸部に面して古墳時代前期の製塩土器が出土しており、砂丘上で塩の生産が行われていたことを示唆している。このように今津湾に面して拡がる古砂丘上の今宿遺跡とそれに連なる今山周辺域では、今山での石斧生産に符合するように遺跡が拡大し、引き続いて古墳時代に製塩活動が盛んに行われる様が看取される。

一方、平野を俯瞰すれば、今宿の砂丘上と同様に縄文時代に遡る遺跡は少なく、今山の北に開口する瑞梅寺川の対岸地帯に桑原飛櫛貝塚等が知られるに過ぎない。弥生時代になると砂丘後背の台地上や山麓部に集落域が展開する。今宿青木遺跡や大塚遺跡、今宿五郎江遺跡では中～後期の竪穴住居跡や貯蔵穴、甕棺墓等が検出されている。なかでも今宿五郎江遺跡では、台地上に後期の環壕が、微高地からは掘建柱建物跡や土壙、井戸が検出されている。これらの遺構からは、小銅鐸や鋳造鉄斧が出土したほか溝内には多量の土器や石器、木器などが投棄されていた。また、山麓裾の微高地上に立地する鋤崎遺跡でも中期の竪穴住居跡が確認されており、中期以降には平野内の広い範囲にわたって集落が営まれていたことが明らかになっている。

次の古墳時代になると、鋤崎古墳や丸隈山古墳をはじめとする13基の前方後円墳が狭い平野内に割拠し、それを頂点として6世紀中葉以降の後期になると長垂山西麓から高祖山北麓にかけて300基を超える小円墳が幾つものグループを形成して群集している。これらの群集墳が造営される6世紀から7世紀の集落域は、谷に入り込んだ丘陵の緩斜面上に営まれる。女原遺跡や大塚遺跡などでは、竪穴住居跡や掘建柱建物跡等からなる集落が検出されている。一方で高祖山北麓には、第Ⅰ型式の須恵器を生産する新開古窯跡がある。また、長垂山から叶ヶ嶽西麓、高祖山の東から北の麓には鉄滓の散布地があり、砂鉄を素材とする鉄生産集団の存在を示唆する。このことは山麓で須恵器や鉄を、海浜部では塩の生産を生業とする集団の活発な生産活動を暗示するものである。

つづいて奈良時代から平安時代には、越州窯系青磁を多量に出土する徳永遺跡等があり、周船寺の起源をなすような律令下の施設の存在が想起される。今宿遺跡第3次調査(本調査)でも瓦片等が出土しており、連綿とした平野での営みが窺われる。

Fig.2　今宿遺跡周辺旧地形図(1／25,000)

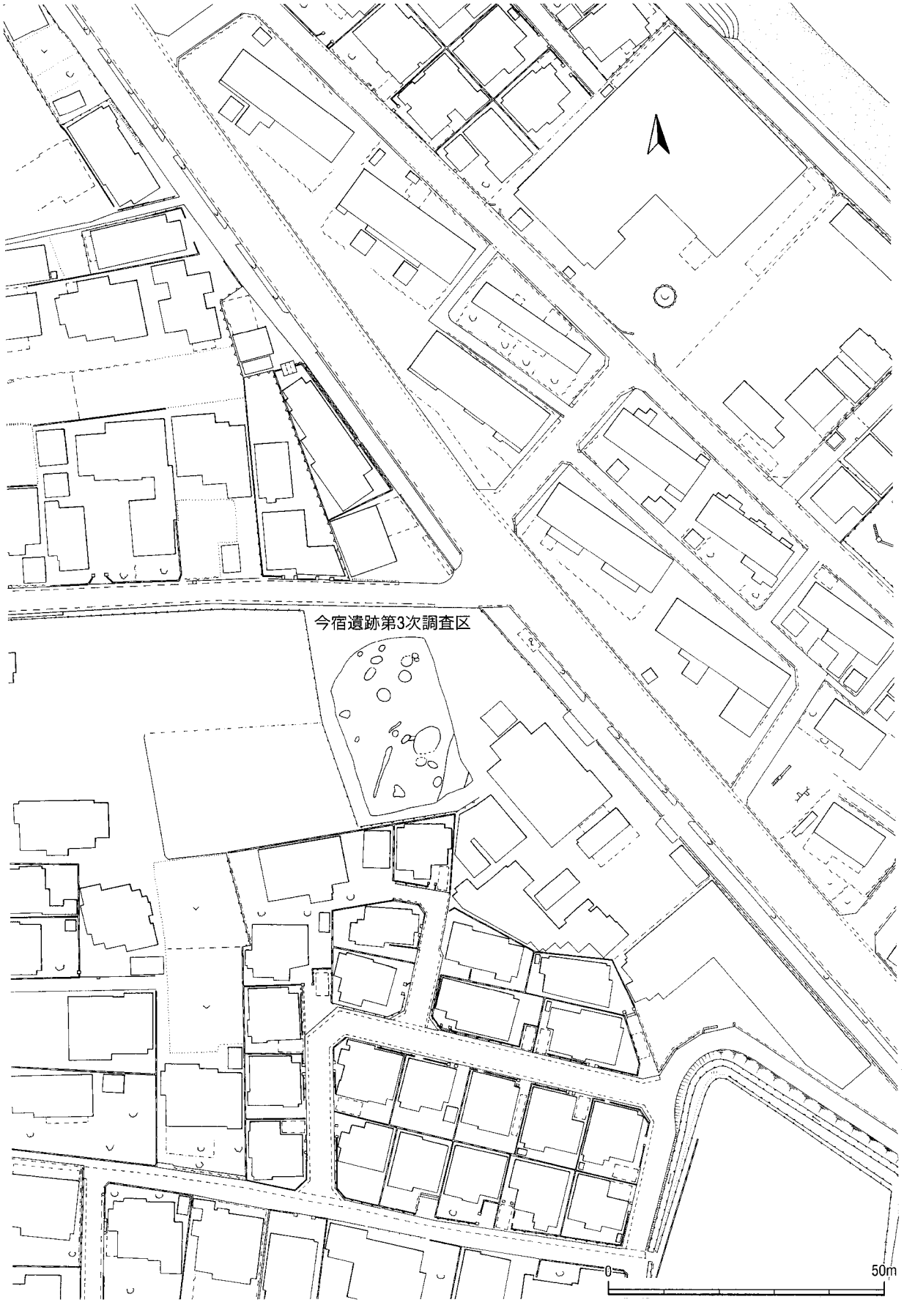


Fig.3　今宿遺跡第3次調査区位置図(1／1,000)

Fig.4　今宿遺跡第3次調査区周辺現況図(1／400)

Ⅱ. 調 査 の 記 録

1. 調査の概要

今宿遺跡は、博多湾に面した糸島半島の基部に拡がる砂丘上に立地し、かつてはその後背面に広汎なラグーンが拡がっていた。砂丘の北端には蛤刃石斧の制作址として著名な国史跡の今山遺跡があり、その北にはかつて糸島水道と呼称されていた瑞梅寺川の河口が東へ開口している。

今宿遺跡の立地する砂丘は、博多湾の左回転流が湾奥の今津湾に当たって形成された砂州状の古砂丘である。第3次調査地点は、弧状に細長く延びる古砂丘の北側に位置し、北北西へ600mの距離には蛤刃石斧の原石を産する今山がある。この今宿遺跡では、これまでに5地点で発掘調査が実施され、古砂丘上には甕棺墓を中心とする弥生時代の墳墓群が広範囲に拡がっていることが次第に明らかになってきた。ただし、第3次調査の実施された昭和63(1988)年においては、すぐ南東の今宿保育園に隣接する第2次調査区で甕棺墓や円形土壙から細型銅剣とヒスイの勾玉が出土したほかは、南東の市営住宅地や砂丘の東部にある二宮神社の境内で甕棺片が採集されているにすぎなかった。

発掘調査は、昭和63(1988) 年7月25日の表土層の除去作業から開始した。調査区は、建物の建築によって破壊される範囲に設定し、外柵の植栽や駐車場部分は破壊面が遺構面まで達しないので現状保存を図った。表土層は、はじめに排土を分別して西隣の民有地に仮置きしたが、崩落しやすい砂層のため板パネルで囲って流出を防止した。埋め戻しにあたってはブロック塀の境界を隔てて低い土地から高い方への移動になり、思いのほか時間と労力を要した。また、調査は連日30℃を超す酷暑に加えてしかも砂丘上での作業であったが、滞りなく9月10日に終了した。改めて発掘作業に従事した人々の労苦に感謝いたします。

発掘調査の結果、調査区は弧状にのびる古砂丘の後背面にあたる。レヴェル的には、北東隅が最も高く南西隅へむかって緩やかに傾斜していくが、西壁の南半部は溝状に急速に深くなっている。遺構は、大きくは弥生時代終末期～古墳時代初めと古代～中世初めに区分される。このうち前者は、調査区の北部にまとまり、最高所の北東隅で弥生時代終末期の甕棺墓1基のほかに古墳時代初めの土壙が検出された。このうち土壙からは、竹管文を配する二重口縁壺や韓半島系の陶質土器など搬入された土器が出土し、対外交流を考える上で海浜集落の重要性を示すものである。また、後者の遺構のうち南東壁際にある小土壙からは鉄鋏や宋銭とともに70個のコバルトブルーやライトグリーンのガラス小玉が出土した。その分析データは、該期のガラス製造を考える上で貴重な資料となろう。

一方、層序的には北側が地表下50cm、南側は90cmが盛り土で、その下には20～30cmの厚さで畑の耕作土があり、畑地は古砂丘の後背面に沿って北東から南や西へむかって低くなっていたことが窺える。この耕作土下には、黒色砂と暗褐色砂が60～70cmの厚さで堆積しており、この中から土錘や富壽神寶など多くの遺物が出土した。遺構は、この遺物包含層下層の暗褐色砂層の中ほどから掘り込まれている。また、古砂丘上には厚さ10cmほどの褐色砂層が砂丘の傾斜に沿って堆積していた。

調査次数	調査番号	所 在 地	調査面積	報告書	調査概要	調 査 期 間	事 業 名
第1次調査	6906	西区今宿町	560㎡	389	弥生時代前期の甕棺墓	1969.5.1 ～ 5.4	水道管埋設
第2次調査	7601	西区今宿町	100㎡	75	弥生時代中期の土壙、細型銅剣	1976.7 ～ 8	玄海自転車道建設
第3次調査	8826	西区今宿町字池田尻	660㎡	本報告	弥生時代末の甕棺墓 古墳時代初の土壙 古代～中世の土壙、溝	1988.7.25 ～ 9.10	民間住宅建設
第4次調査	9336	西区今宿町・今宿駅前1丁目	923㎡	389	弥生時代中～後期の甕棺墓	1993.6.4	水道管埋設
第5次調査	9708	西区今宿東3丁目	397㎡	654	弥生時代前～中期の甕棺墓、土壙墓	1997.4.14 ～ 6.9	JR筑肥線複線化事業

Tab.1　今宿遺跡調査地一覧表

Fig.5　今宿遺跡第3次調査区遺構配置図(1／150)

2. 甕棺墓（ST）

甕棺墓は、調査区の北東隅でただ1基を検出したのみで、墓域の様相を知ることはできない。調査区東方の砂丘尾根上には甕棺墓の発見が報告されており、砂丘上には甕棺墓を主体とする墓域が拡がっていたことが想起される。

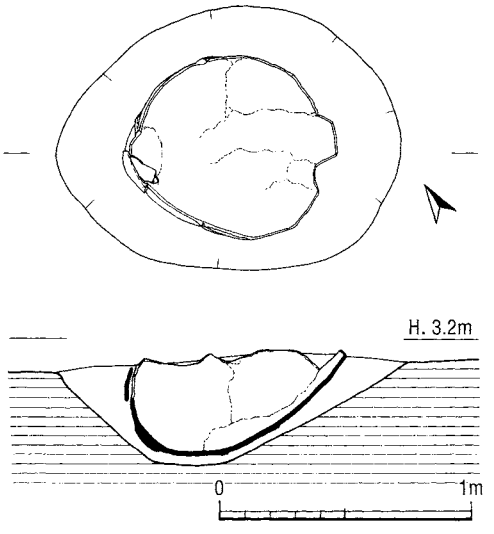


Fig.6　1号甕棺墓実測図(1／30)

1号甕棺墓　ST－01（Fig.6・7　PL.2・10）

1号甕棺墓は、調査区北端部の砂丘後背斜面上に立地する成人墓で、墓壙は上部が大きく削平されている。墓壙は、楕円形プランの斜壙を東から掘り込み、その中に40°の傾斜をもって大型の甕を埋置している。壙底は平坦で、甕との隙間には暗黄褐色砂を敷いて甕の安定を図っている。甕棺内には、同一の甕片しか転入していないことから単口式甕棺と推測される。主軸方位は、N－61°－Wにとる。

1は、復原口径が65.2㎝、器高が92.4㎝の大型の甕で、胴部最大径は68㎝である。口縁部は「く」字状に外反し、平坦に仕上げた外唇にはヘラ状の工具で斜め方向の刻目が施文されている。胴部は短い砲弾形をなし、頸部と胴部中央および下半部に幅4㎝、厚さ5㎜の幅広の帯状凸帯を貼り巡している。凸帯上面には、上から右斜め、左斜め、ヨコ方向にハケ目調整で施文的なアクセントが窺える。底径10.8㎝の底部は、丸みを帯びた凸レンズ状の平底である。調整は、底部が押圧ナデのほかはすべて粗いハケ目調整である。ハケ目は、外面がタテ。内面は、上方からヨコ、左斜め、ヨコ、左斜めである。胎土は良質で、1㎜大の石英や長石粒を含む。色調は褐色～暗褐色で、焼成は良好。

3. 土　壙（SK）

土壙は、すべてで22基を検出した。分布的には、調査区全体に散在的に拡がる傾向を示しているが、古墳時代初めの土壙は調査区の北縁に近接して位置している。一方、平面形は、長方形プランのものと楕円形～円形プランのものがある。このうち円形プランを呈するものは、比較的大型のものが多い。機能的には、廃棄壙としての用途が考えられるが、大型の円形土壙には住居跡の可能性を示唆するものがある。

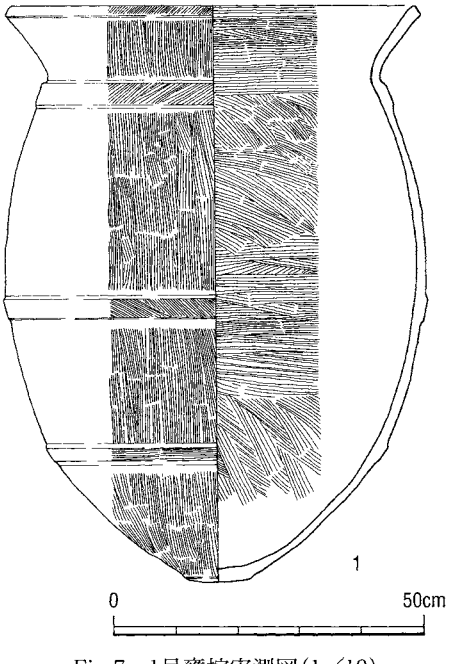


Fig.7　1号甕棺実測図(1／12)

1号土壙　SK－01（Fig.8　PL.3）

1号土壙は、調査区の南東部にあり、すぐ東側には南北方向の1号溝が南流し、北へ1.5mの距離には8号土壙が位置している。平面形は、長さ217㎝、幅が145㎝の楕円形プランを呈し、主軸方位をN－37°－Eにとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、断面形は逆台形をなしている。壙底面は浅い舟底状をなし、深さは50㎝を測る。覆土は、壙底面の近くが黄褐色砂層、中～上層が炭粒の混入した黒褐色砂層である。覆土からは弥生土器や土師器の甕片に混じって焼粘土塊が出土しており、焼土壙の可能性も想定される。

2号土壙　SK－02

(Fig.9　PL.3)

2号土壙は、調査区のほぼ中央部に位置し、13号土壙の西小口壁を切っている。平面形は長さが200㎝、幅が107㎝の楕円形プランをなし、N－46°－Eに主軸方位をとる。壁面はやや緩やかに立ち上がり、壙底までの深さは26㎝である。壙底は平坦で、東側壁にむかって緩やかに傾斜している。覆土は暗茶褐色砂土で、下層はやや黒色が濃くなる。遺物は中位から土錘と土師器坏のほかに須恵器甕片や平瓦等が出土した。

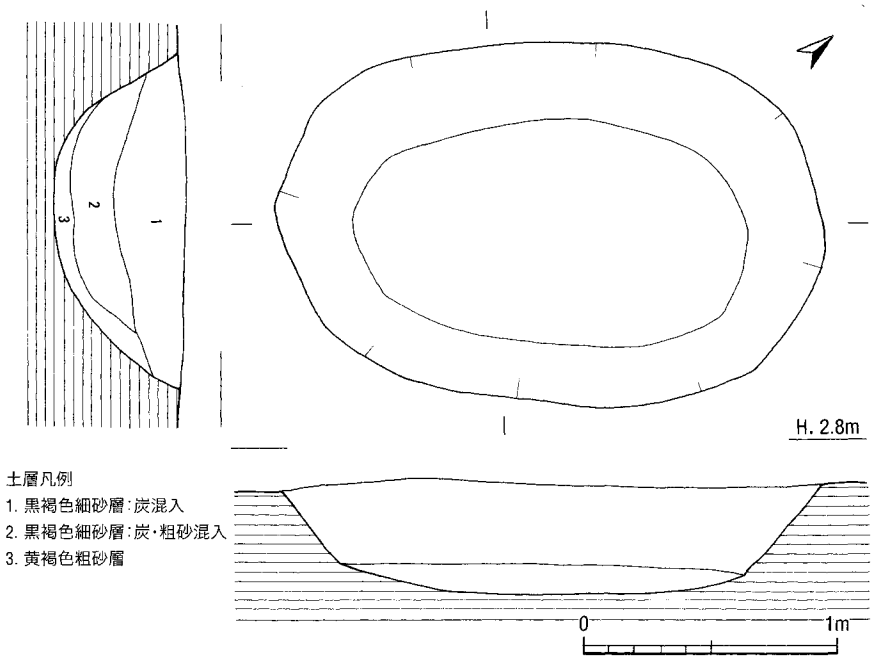


Fig.8　1号土壙実測図(1／30)

出土遺物(Fig.10・11　PL.10・14)

2は、口径14.5㎝、底径8.9㎝、器高が5㎝の土師器坏である。体部は内湾ぎみに膨らみ、口縁部はストレートに外反する。調整は体部がヨコナデ、内底面がナデ、底部はヘラ切り。胎土は良質で、焼成は良好。明赤橙色。

3は、長さ4.4㎝、最大径が2.86㎝の小型の管状土錘で、重さは35g。

3号土壙　SK－03(Fig.12　PL.3・4)

3号土壙は、調査区の北縁部に位置する大型の土壙で、北には4号土壙が近接して立地している。平面形は、長さ289㎝、幅が148㎝の楕円形プランをなす。主軸方位はN－45°－E。深さ49㎝の壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は箱形状をなし、壙底はほぼ平坦である。覆土は黒色砂で、壙底からやや浮いて土師器壺や甕・高坏・器台がまとまって出土した。また、南小口壁側からは陶質土器の甕が1個体出土した。

出土遺物

(Fig.13・14　PL.10)

5は、口径が20.4㎝の二重口縁壺である。口縁部は、肩の張った球形の胴部から直口ぎみに立ち上がった後に屈曲して大きく外反し、その上縁にストレートにのびる口縁部を付加している。二重口縁の下縁と頸部下縁および肩部の3カ所に「C」字状の竹管文を施文している。「C」字状の竹管文は頸部が下向き、

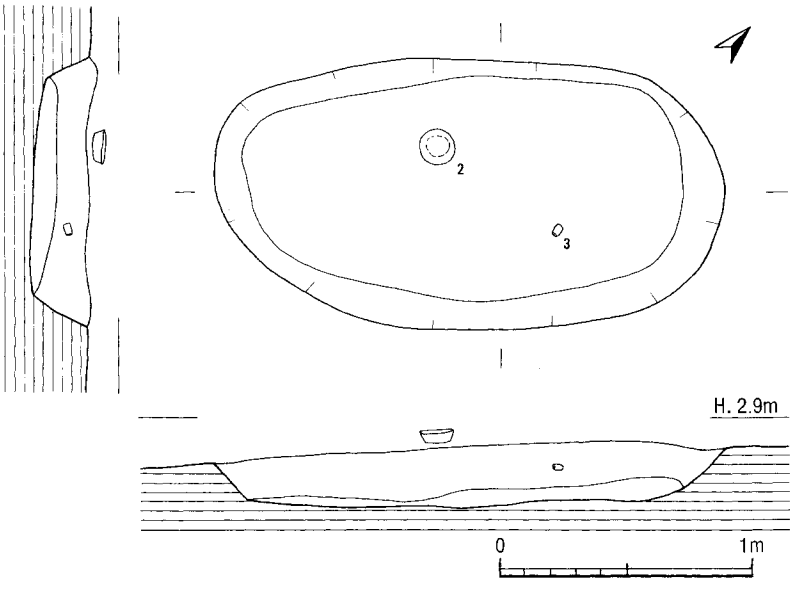


Fig.9　2号土壙実測図(1／30)

ほかは上向きに施文している。更に、頸部と肩部の竹管文間には、ハケ目工具による櫛目文を3カ所に、その間の2カ所にはヘラ工具の先端で羽状文様にナナメ方向に施文している。調整は口縁部がヨコナデ、内面がヘラケズリ、外面は細かいタテハケ目。胎土は砂粒を含み、明灰橙～明黄褐色。6～8は、甕である。6は、倒卵形の胴部に径4.4cmの小さな底部が付く。7・8は、口縁部が短く「く」字状に外反し、胴部は長胴のラグビーボール状をなす。7は、口径20cm。8は、口径が21.8cm、器高は36.1cm。調整は内外面ともに粗いハケ目で、8は胴部下半をケズリ状にナデ上げている。胎土は小～中砂粒と雲母を含み、焼成は良好。黄橙～橙褐色。9は、脚径が7.6cmの土師器台付鉢である。脚部は短くラッパ状に外反する。体部外面はヘラ研磨、脚部はヨコナデ。胎土は、良質で少量の小砂粒と雲母を含み、淡褐色。11～15は、土師器高坏である。坏部口縁は、扁平な半球形が屈曲して短く直口して外湾ぎみに大きく外方に開く。脚部はスマートに直口してラッパ状に外反し、屈曲面に外方より円孔を穿つ。11は、口径が33.6cm、脚径17.6cm、器高は21.3cm。坏内面には放射状の暗文を施文し、脚裾部は粗いヘラ研磨を施している。12は、口径が32.2cm、13は38.4cm。いずれも口縁部下にヘラ描きによる波状の暗文を施文している。14は、脚径が16cm、15は16.2cmで円孔を穿っている。調整は細かいハケ目～ナデで、脚内面には絞り痕がある。胎土は良質で、少量の小～中砂粒と雲母を含み、淡赤褐色～明橙褐色。16は、底径が20cmの鼓形器台である。脚部内面は小さく屈曲して外反し、頸部の上下には対称位に三角凸帯状の段を有する。調整は外面がヨコナデ、内面はヘラケズリ。胎土は小砂粒を含み、焼成は良好。外面はにぶい橙色、内面はにぶい赤褐色。

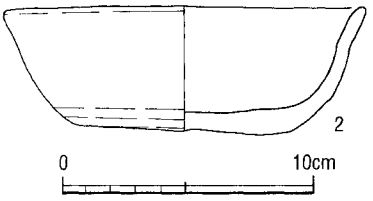


Fig.10　2号土壙出土遺物実測図(1／3)

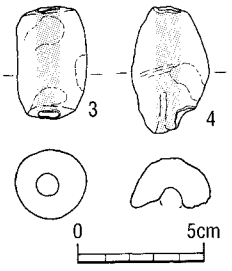


Fig.11　2・26号土壙出土土錘実測図(1／3)

10は、口径が16.4cm、器高が22.4cmの陶質土器の壷。頸部は直口ぎみに立ち上がり、口縁部は屈曲して短く外反する。胴部はやや偏球形で、上半部には12条の横凹線を描いている。外面は縄蓆文状の叩き、内面はナデ。胎土は良質で、焼成は軟質。灰～薄灰色。

4号土壙　SK－04（Fig.15　PL.3・4）

4号土壙は、調査区の北縁部にある大型の土壙で、南には3号土壙がある。平面形は、北東隅壁が消失しているが、長さが224cm、幅が151cmの隅丸長方形プランをなそう。主軸方位はN－73°－E。深さが38cmの壁面は、緩やかに立ち上がり、平坦な壙底の断面形は逆台形を呈している。覆土は、黒色砂で下層にはブロック状の黄白褐色砂が混入していた。遺物は、壙底から土師器高坏や甕・鉢が比較的まとまって出土した。

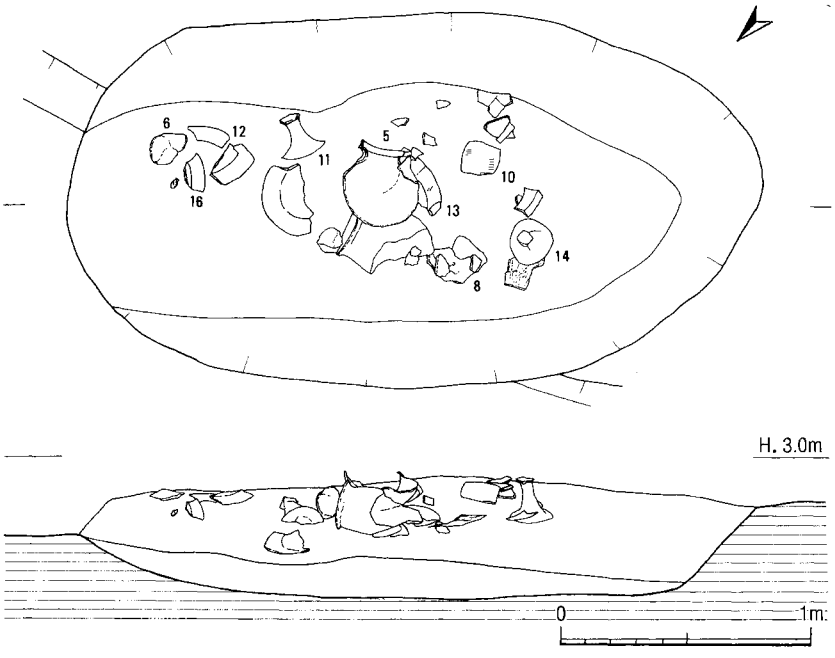


Fig.12　3号土壙実測図(1／30)

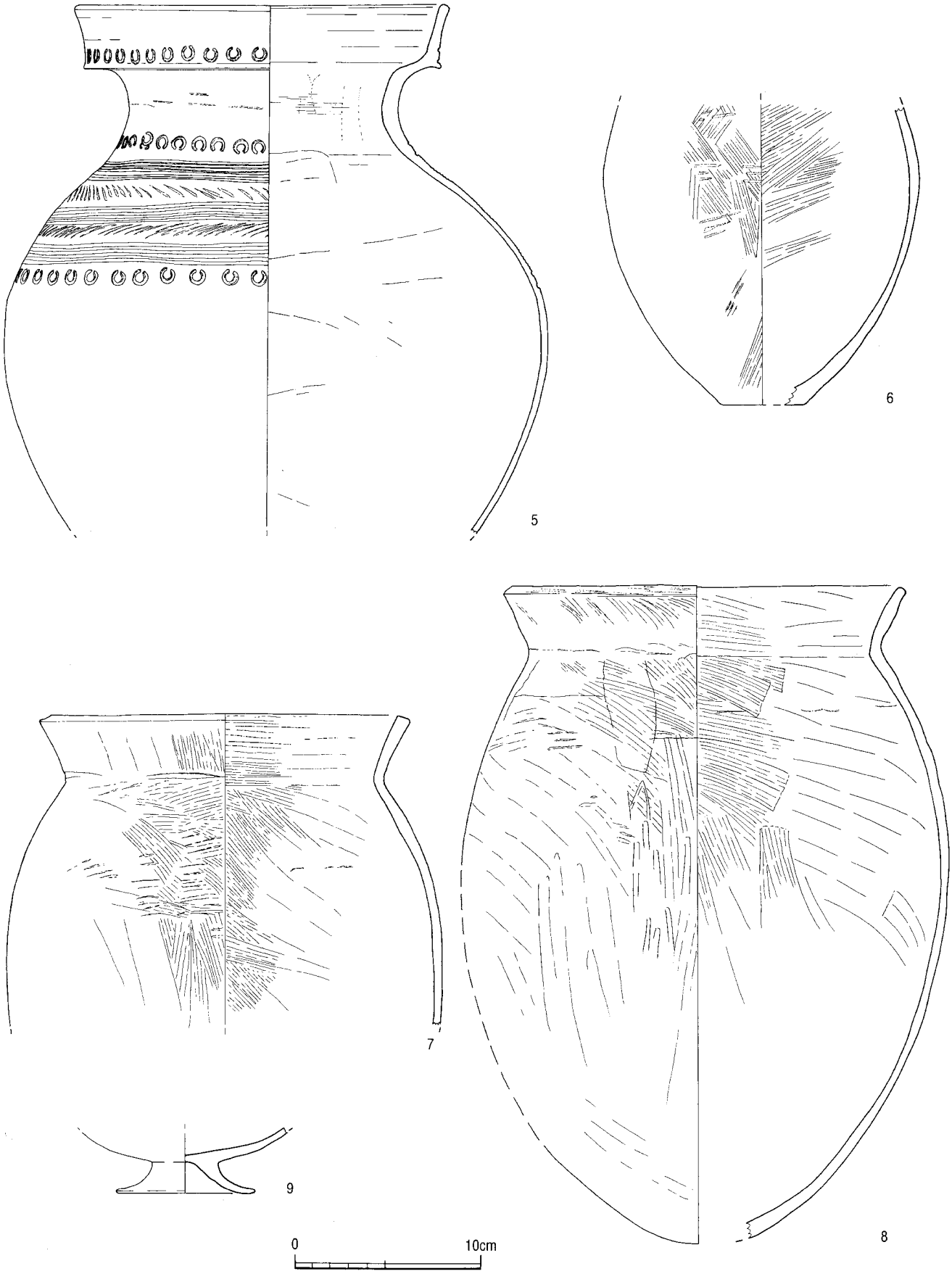


Fig.13　3号土壙出土遺物実測図1(1／3)

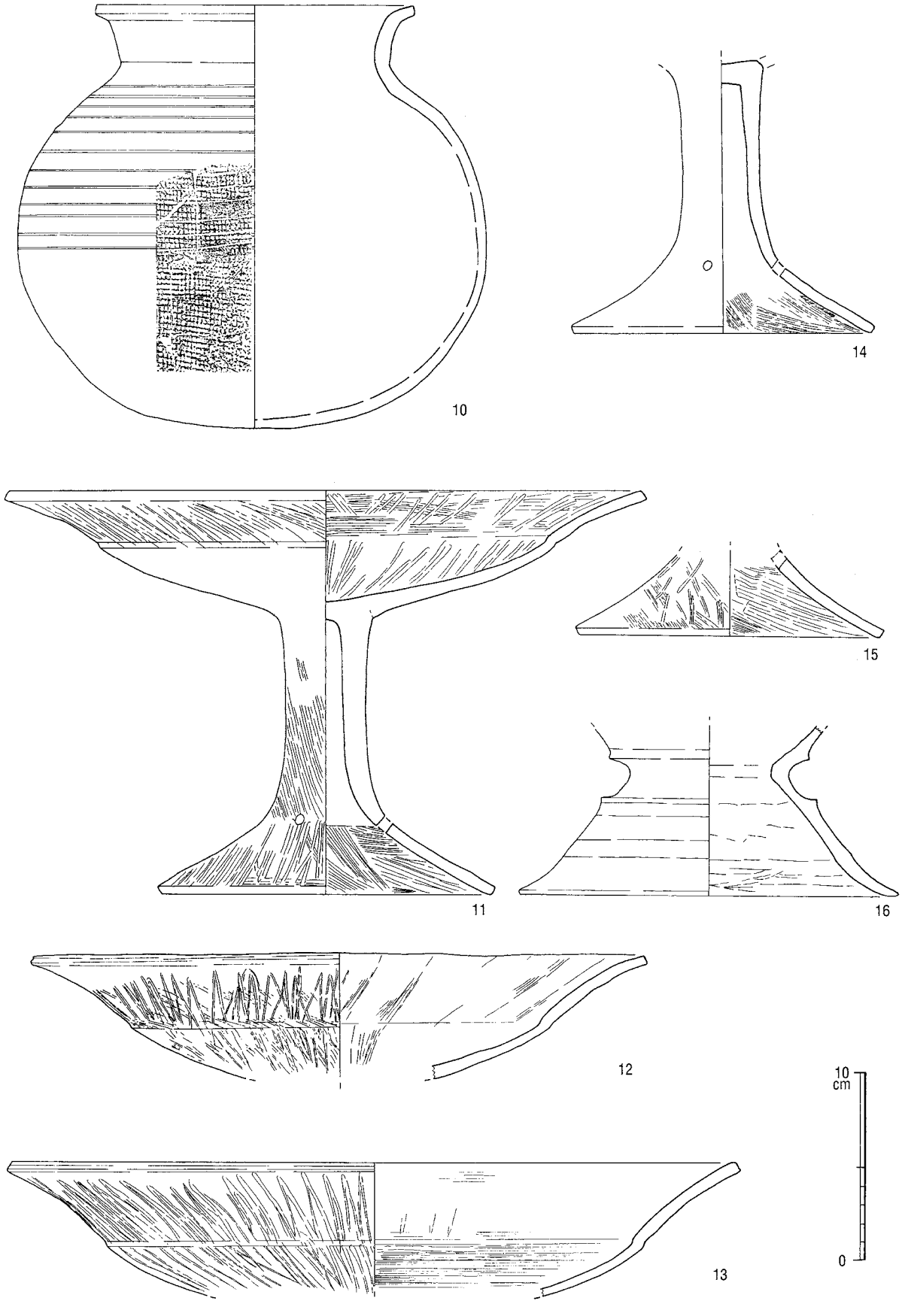


Fig.14　3号土壙出土遺物実測図2(1／3)

出土遺物（Fig.16　PL.10）

17は、口縁部を欠く土師器甕である。長胴形の胴部は上半部がタテハケ目、下半部がヘラケズリ後にナデ仕上げ、煤が付着している。胎土は小～粗砂粒を多く含み、焼成は良好。暗灰黄色。18は、口径が16㎝、器高が5.8㎝の土師器埦である。体部は扁平な半球形で、口縁部は短く上方に摘み上げている。口縁部がヨコナデのほかはナデ調整。胎土には石英・長石粒と雲母を含み、焼成は良好。外面は灰赤色、内面は橙～褐灰色。19・20は、土師器高坏である。19は、口径が36.4㎝、脚径が20.4㎝、器高は29㎝。坏口縁は、体部が一旦屈曲して短く直口した後に大きく外反する。脚部は、スマートに長くのびてラッパ状に開き、裾部への屈曲面に外方より円孔を3カ所に穿つ。調整は坏部内外面と脚部がやや粗いヘラ研磨で、脚内面は絞り、裾部は細かいナナメのハケ目。坏部内面には、内底の中央から放射状に、口縁部下には波状の暗文をヘラ工具で施文している。20は、脚径17.9㎝。脚部はラッパ状に大きく開き、3カ所に円孔を穿つ。いずれも胎土は精良で、小砂粒と雲母を含み、焼成は良好。明橙褐色。

5号土壙　SK－05（Fig.17　PL.5）

5号土壙は、調査区東縁部のやや北寄りに位置する小型の土壙で、南西へ4.5mの距離には7号土壙がある。西壁が消失しているが、平面形は直径が95～105㎝の円形プランをなそう。上縁部は著しく削平されているが、深さ12㎝の壁面は緩やかに立ち上がる。壙底は、中央部が浅く凹レンズ状に窪み、断面形は緩やかな舟底状をなしている。覆土は黒色砂で、下層にはブロック状の黄褐色砂が混入している。壙底から10㎝ほど上層からは土師器坏と高坏片がまとまって出土した。

出土遺物（Fig.18　PL.11）

21～25は土師器坏。口径は11.7～12.3㎝、底径は6.3～6.5㎝、器高は3.6～4㎝。体部はストレートに立ち上がり、21～23は口縁部を外方に小さく摘み出している。調整は体部がヨコナデ、内底面がナデ。底部はヘラ切りで21は板目痕が残る。胎土は良質で細砂～小砂粒と雲母微細を多く含む。明橙褐色～赤橙褐色。26は内黒の高台付坏。口径は11.4㎝、器高は5.4㎝。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は肉厚に仕上げている。径7.2㎝の高台はストレートに開く。体部外面～高台部がヨコナデ、内面は粗いヨコ研磨、底面はナデ。胎土は良質で細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。色調は外面が明橙褐色、内面は黒色。

6号土壙　SK－06

（Fig.19　PL.5・6）

6号土壙は、調査区南東縁を南流する南北方向の1号溝の埋土上に位置し、すぐ南には1号焼土壙が隣接している。東壁が調査区外に拡がっているために全容は明らかでないが、長さが135㎝、幅が80～100㎝ほどの隅丸長方形プランをなそう。上縁部が深く消失しているが、深さ30㎝の壁面は、急峻に立ち上がる。壙底は、中央部が凹レンズ状に窪む浅い舟底形をなしている。覆土は、茶～黒褐色砂層で、壙底部にはブロ

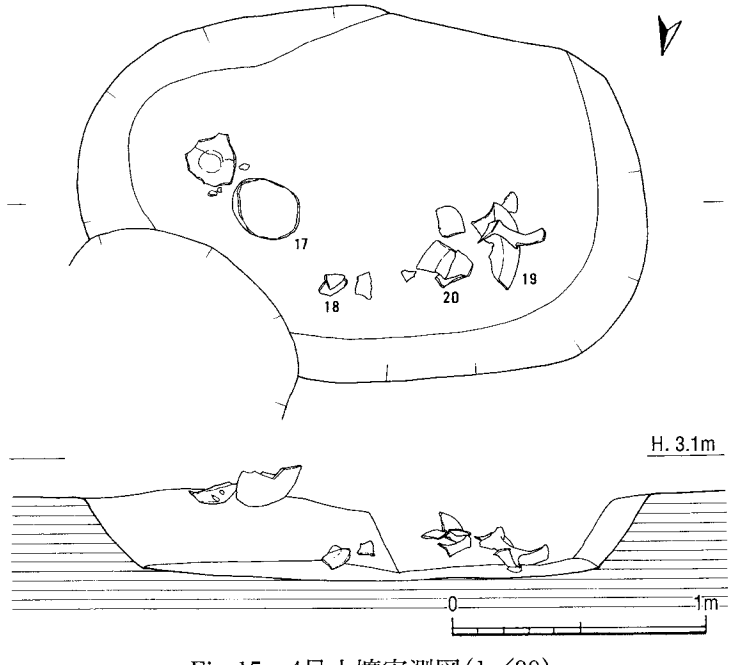


Fig.15　4号土壙実測図（1／30）

ック状の黄白褐色砂が混入していた。また、土壙内からは鉄鋏や鉄環、元豊通寶等の7枚の宋銭と70個余のグリーンやブルーのガラス小玉のほかに土師器片が出土しており、墳墓の可能性も考えられる。

出土遺物（Fig.20　Tab.2・3　PL.11・13）

27は、長さが12.3㎝の鋏で、「U」字状に湾曲する基部幅は2.2㎝、厚さは6㎜である。刃部の長さは5.2㎝で、断面形は鋭利な三角形をなす。刃部に布目痕があり、布に包んで埋納されたのであろう。28は、直径が2.9㎝の鉄環で、断面形は幅5㎜、厚さ2㎜の長方形をなす。

29～33は、宋銭である。29は、1086年初鋳の「元祐通寶」。30は、1078年初鋳の「元豊通寶」。31は、

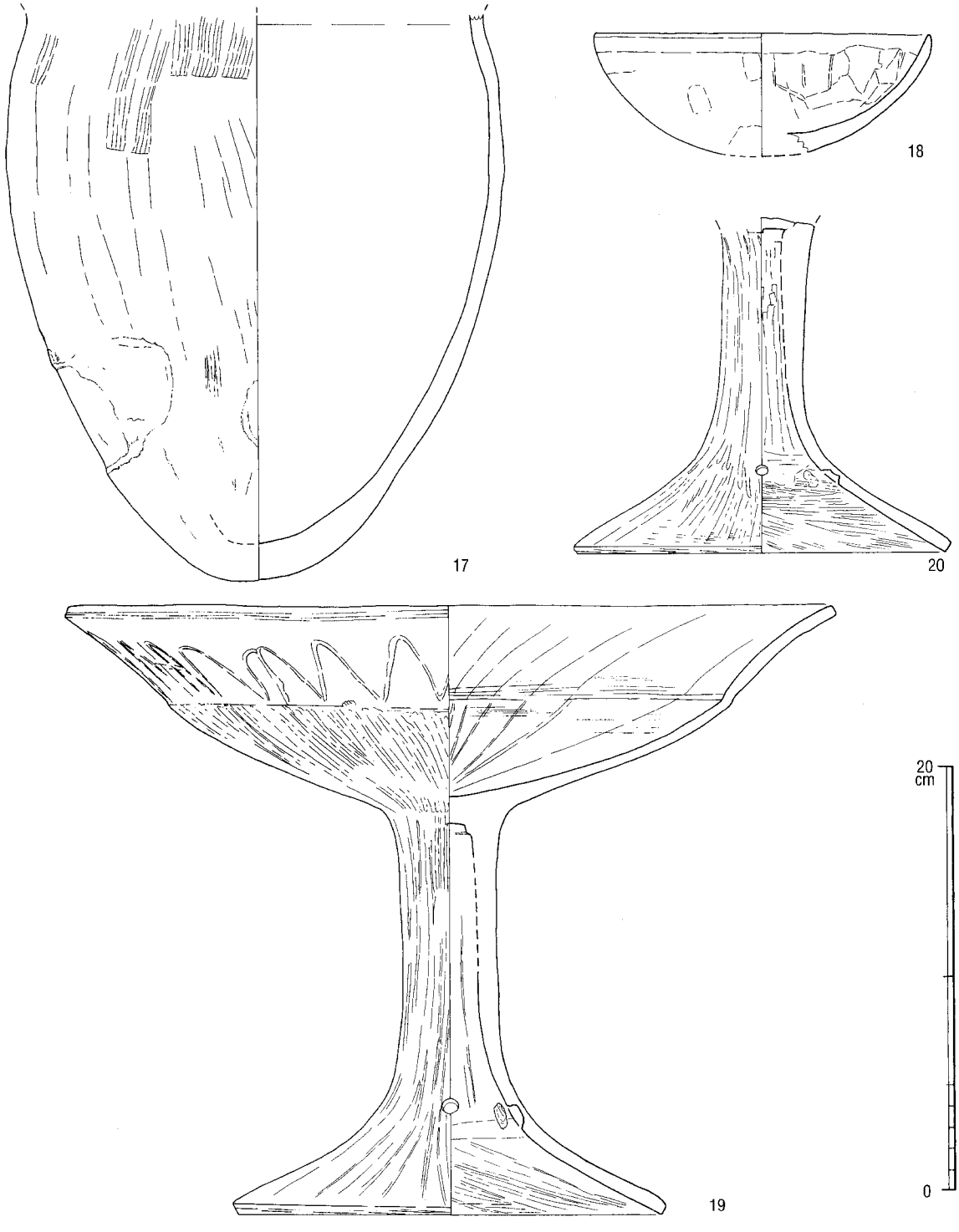


Fig.16　4号土壙出土遺物実測図(1／3)

1009年初鋳の「祥符通寶」。32・33は、1009年初鋳の「祥符元寶」。34・35は判読不能。

36～105は、ガラス小玉で緑、青紺と赤白色がある。このうち緑と青紺の小玉は、径が3.6～5.2㎜、厚さが1.95㎜～4.45㎜、孔径は1.01～2.31㎜である。赤白色(104・105)の小玉は、径が2.4㎜、厚さが1.4㎜、孔径が0.63㎜と小さい。

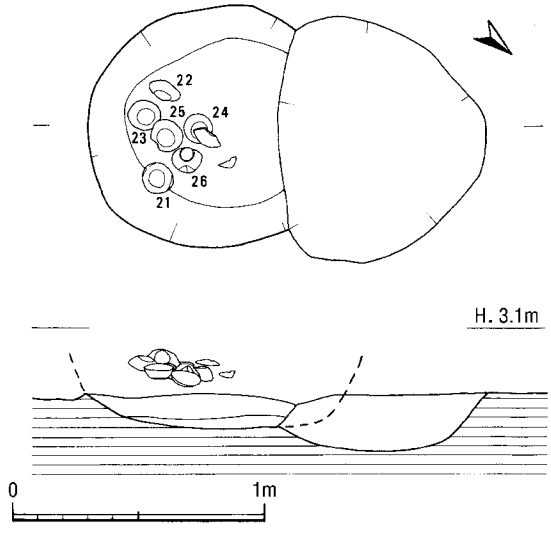


Fig.17　5号土壙実測図(1／30)

7号土壙　SK－07（Fig.21　PL.5）

7号土壙は、調査区の中央部東寄りにある21号土壙の上に掘り込まれた小型の土壙で、西隣には14号土壙がある。平面形は、長さが96㎝、幅が72㎝のやや不整な楕円形プランを呈する。壁面はやや緩やかに立ち上がり、深さは23㎝。壙底は、中央部が浅く窪んだ凹レンズ状をなしている。覆土は暗茶～黒茶褐色砂で、遺物は少ない。

出土遺物（Fig.22　PL.11）

106は口径が14.6㎝、底径が12.8㎝、器高が1.8㎝の土師器皿。肉厚の体部は短く外反する。体部はヨコナデ、底部はナデ。胎土には細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。淡赤橙褐色。

8号土壙　SK－08（Fig.21）

8号土壙は、調査区の南東部にあり、すぐ西隣には9号土壙が、また南へ2mの距離には1号土壙が位置している。平面形は、長さが203㎝、幅が106㎝のやや長目の楕円形プランをなし、主軸方位をN－63°－Wにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壙底までの深さは23～30㎝を測る。壙底の東小口壁側には長さが75㎝、幅が50㎝、深さが15㎝の小ピットが掘り込まれている。覆土は、暗茶褐色砂で土師器甕片に混じって染付皿片が僅かに出土した。

9号土壙　SK－09（Fig.21）

9号土壙は、調査区の南東部に位置し、東には8号土壙がある。北壁がトレンチで消失しているが、平面形は長さが205㎝、幅が170㎝の円形プランをなそう。壁面は、緩やかに立ち上がり、深さは20～35㎝。東側が平坦な壙底は、西壁側に向かって緩やかに傾斜する2段掘り状の断面形をなしている。覆土は、黒褐色砂で、土師器甕や鉢、須恵器甕、坏蓋片のほかに軽石塊が出土した。

10号土壙　SK－10（Fig.21）

10号土壙は、調査区南縁の西寄りに位置する大型のやや不整形な土壙で、東へ6mの距離には1号土壙がある。平面形は、長さが260㎝、幅が120～145㎝で北小口壁側が尖り気味になる楕円形プランをなしている。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは40㎝を測る。壙底はほぼ平坦で、断面形は中央部が僅かに窪んだ舟底状をなしている。覆土は、黒～黒褐色砂で、土師器甕や坏、須恵器甕片のほかに青磁片が出土した。

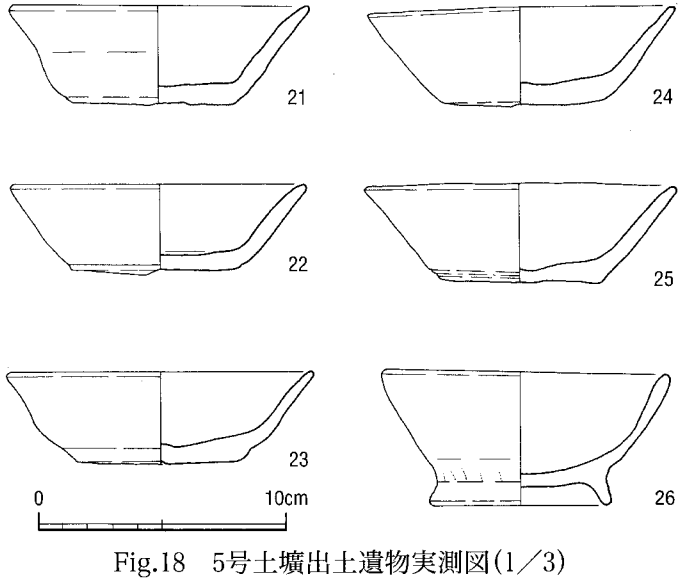


Fig.18　5号土壙出土遺物実測図(1／3)

11号土壙　SK－11（Fig.21）

11号土壙は、調査区の中央部にある小型の土壙で、1m南東には2号土壙がある。平面形は、長さが122cm、幅が106cmの円形プランをなす。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは32cmを測る。壙底はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈している。覆土は黒褐色砂で、少量の土師器甕や坏片が出土した。

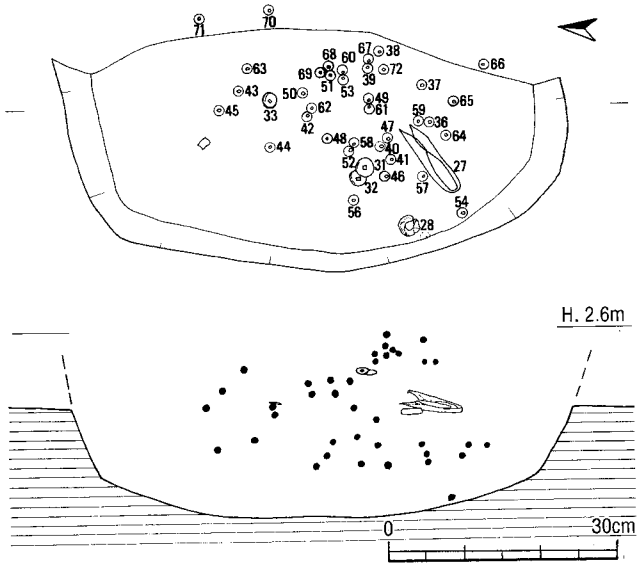


Fig.19　6号土壙実測図(1／10)

12号土壙　SK－12（Fig.23　PL.1）

12号土壙は、調査区西縁の北寄りに位置し、2m北東には5号焼土壙がある。平面形は、長さが175cm、幅は東小口壁が125cm、西小口壁が65cmの不整形な方形プランをなしている。壁面は緩やかに立ち上がり、壙底は平坦で断面形は逆台形をなしている。壙底までの深さは35cmである。覆土は、黒～黒褐色砂で土師器甕や高坏、須恵器甕片に混じって黒曜石片や玄武岩片、軽石等が出土した。

13号土壙　SK－13（Fig.23）

13号土壙は、調査区の中央部にある大型の21号土壙の埋土上に位置しており、西側壁は2号土壙に切られている。平面形は、幅が76cmで長さは160cmほどの隅丸長方形プランをなそう。主軸方位は、東西軸のE－3°－Nにとる。深さが23cmの壁面は、緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈している。覆土は、黒褐色砂で土師器片と玄武岩片がわずかに出土した。

14号土壙　SK－14（Fig.23）

14号土壙は、調査区中央部のやや東寄りにあり、21号土壙の北壁上に掘り込まれている。すぐ東に7号土壙、西には13号土壙がある。平面形は、長さが140cm、幅が70cmの楕円形プランを呈し、壙底までの深さは20cmである。壁面は、やや緩やかに立ち上がり、壙底はほぼ平坦で断面形は逆台形をなしている。覆土は、黒～黒褐色砂で土師器甕や坏の小片と玄武岩片が出土した。

15号土壙　SK－15（Fig.23）

15号土壙は、調査区中央部の西縁に位置し、北へ4mの距離には12号土壙がある。平面形は、長さが110cm、幅が65cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN－28°－Eにとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、壁高は29cmである。壙底は中央部が浅く窪んだ凹レンズ状をなし、断面形は舟底状をなしている。覆土は、暗黒褐色砂で遺物は1点も出土していない。

21号土壙　SK－21（Fig.5）

21号土壙は、調査区の中央部東寄りに位置する大型の楕円形土壙で、埋土上には7・13・14号土壙や2・3号焼土壙が掘り込まれている。平面形は、長径が5.9m、短径が4.5mで、南壁

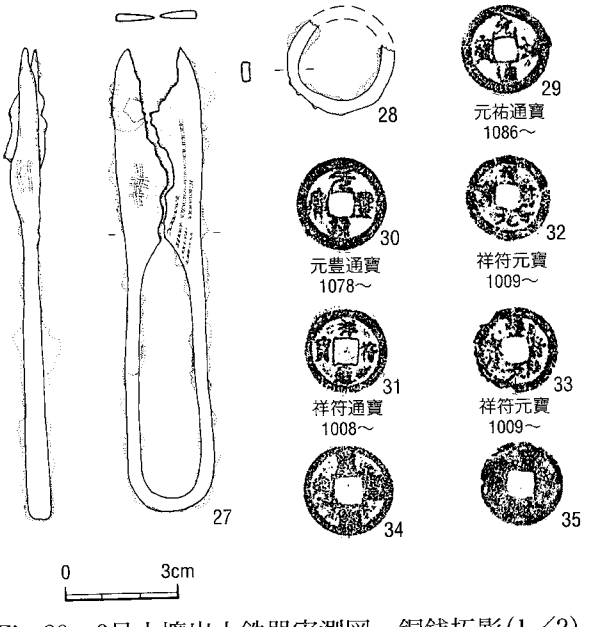


Fig.20　6号土壙出土鉄器実測図・銅銭拓影(1／2)

遺物番号	色調	(mm) 径	厚さ	孔径	(g) 重量	比重	観察所見	分類
36	緑	3.85	3.25	1.67	0.08	3.68	側面に螺旋状の蝕像。	カリウム鉛ガラス
37	緑（濃く、やや青みがかる）	4.40	2.90	1.68	0.11	4.07	表面はザラついている。気泡は比較的多く独立。側面に螺旋状の蝕像。	カリウム鉛ガラス
38	緑（濃く、やや青みがかる）	4.30	2.60	1.63	0.09	3.91	表面はザラついている。気泡は比較的多く独立。片側の小口面に螺旋状の蝕像。	カリウム鉛ガラス
39	緑（濃く、やや青みがかる）	4.40	2.40	1.61	0.09	5.18	透明感が強い。小口面に明瞭な螺旋状の蝕像。	カリウム鉛ガラス
40	緑（濃く、やや青みがかる）	3.65	2.90	1.54	0.08	3.95	表面は気泡がはじけたような細かい円形の蝕像で覆われている。側面に螺旋状の蝕像が若干有り。鉄分と思われる赤褐色の物質が噛み込んでいる。	カリウム鉛ガラス
41	緑（濃く、やや青みがかる）	5.20	3.75	1.55	0.13	4.45	表面は気泡がはじけたような細かい円形の蝕像で覆われている。螺旋状の蝕像有り。鉄分と思われる赤褐色の物質が噛み込んでいる。	カリウム鉛ガラス
42	緑（やや濃い）	4.00	2.80	1.67	0.07	4.53	表面は気泡がはじけたような細かい円形の蝕像で覆われている。側面に螺旋状の蝕像が若干有り。	カリウム鉛ガラス
43	緑（やや濃い）	3.80	3.10	1.56	0.07	4.93	表面はザラついている。気泡は少ないが独立した大きなものが有る。側面に若干螺旋状の蝕像。	カリウム鉛ガラス
44	青紺（淡い）	4.15	2.75	1.80	0.09	4.78	風化が少なく透明感がある。孔を取り巻くように円周方向に引き延ばされた独立気泡有り。細かい螺旋状の凹凸有り。巻付けの最後尾が角状に突出。	カリウム鉛ガラス
45	緑（濃い）	3.95	4.45	1.69	0.11	4.87	樽形の形状。表面は細かい凹凸で覆われザラついている。不明瞭ながら螺旋状の蝕像有り。	カリウム鉛ガラス
46	緑	3.85	2.40	1.58	0.06	4.00	表面は細かい凹凸で覆われザラついている。独立した気泡が小数。小口面で若干螺旋状の蝕像が見られる。	カリウム鉛ガラス
47	青紺	4.40	2.75	1.71	0.08	4.17	孔を取り巻くように引き延ばされた気泡が廻る。表面は風化により？溶けたように凹凸が著しい。螺旋状の蝕像有り。	カリウム鉛ガラス
48	青紺	4.20	2.45	1.67	0.07	4.53	風化により螺旋状の蝕像が著しい。黒色微粒子の噛み込みが数カ所で見られる。	カリウム鉛ガラス
49	青紺	4.20	2.45	1.61	0.07	4.33	風化により螺旋状の蝕像が著しい。黒色微粒子の噛み込みが見られる。	カリウム鉛ガラス
50	緑（やや青みがかる）	3.90	3.00	1.74	0.07	4.06	風化により螺旋状の蝕像が著しい。明瞭な巻付け痕。	カリウム鉛ガラス
51	緑（やや淡い）	3.90	2.05	2.05	0.03	4.71	風化が進み痩せて凹凸が著しい。螺旋状の蝕像有り。	カリウム鉛ガラス
52	緑（やや濃いめ）	3.70	2.65	1.61	0.07	4.33	表面は気泡がはじけたような細かい円形の蝕像で覆われている。側面に螺旋状の蝕像が不明瞭ながら見られる。	カリウム鉛ガラス
53	緑（濃く青味が強い）	4.05	3.35	1.73	0.08	4.15	螺旋状の蝕像と巻き付け痕が明瞭。	カリウム鉛ガラス
54	緑（やや濃いめ）	3.80	3.00	1.58	0.08	4.39	表面は微細な凹凸で覆われザラついている。螺旋状の蝕像が若干有り。	カリウム鉛ガラス
55	緑（濃く青味が強い）	4.30	2.45	1.63	0.08	4.00	表面は気泡がはじけたような細かい円形の蝕像で覆われている。螺旋の蝕像が明瞭。	カリウム鉛ガラス
56	緑（やや濃いめ）	3.85	2.70	1.67	0.06	4.00	全体に細かい凹凸で覆われ、螺旋状の蝕像も不明瞭。	カリウム鉛ガラス
57	青紺（淡く赤みがかる）	4.20	2.40	1.61	0.07	4.56	風化が少なく透明感がある。孔を取り巻くように円周方向に引き延ばされた独立気泡と、細かい凹凸が廻る。赤紫色の細長い介在物が孔の周りを廻る。	カリウム鉛ガラス
58	緑（やや濃いめ）	3.60	2.35	1.67	0.06	4.21	全体に細かい凹凸で覆われ、螺旋状の蝕像も不明瞭。	カリウム鉛ガラス
59	緑（濃く、やや青みがかる）	4.00	2.45	1.70	0.08	3.43	全体に細かい凹凸で覆われ、螺旋状の蝕像も不明瞭。	カリウム鉛ガラス
60	緑	3.70	2.70	1.95	0.05	4.55	風化が進み痩せて凹凸が著しい。螺旋状の蝕像有り。	カリウム鉛ガラス
61	緑（濃く青みがかる）	4.55	2.95	1.54	0.11	3.93	気泡がはじけたような細かい円形と、螺旋状の蝕像が見られる。	カリウム鉛ガラス
62	青紺	4.15	2.35	1.59	0.07	4.47	風化により螺旋状の蝕像が著しい。明瞭な巻付け痕。	カリウム鉛ガラス
63	緑	3.75	2.30	1.49	0.05	4.15	比較的残りがよい。螺旋状の蝕像が小口面を中心に明瞭に観察される。側面観は台形を呈する。	カリウム鉛ガラス
64	緑	3.90	2.65	1.56	0.06	3.71	全体に細かい凹凸で覆われ、螺旋状の蝕像も不明瞭。	カリウム鉛ガラス
65	緑	3.65	3.05	1.69	0.05	4.45	風化が進み痩せて凹凸が著しい。螺旋状の蝕像有り。	カリウム鉛ガラス
66	青紺	4.30	2.70	2.00	0.07	4.06	部分的に破損しているが巻き付け痕が明瞭。	カリウム鉛ガラス
67	緑（濃く、やや青みがかる）	4.60	2.60	1.73	0.01	4.13	全体に細かい凹凸で覆われ、螺旋状の蝕像も不明瞭。	カリウム鉛ガラス
68	緑（濃く、やや青みがかる）	4.45	2.50	1.59	0.01	3.77	比較的残りがよい。螺旋状の蝕像が小口面を中心に明瞭に観察される。側面観は台形を呈する。	カリウム鉛ガラス
69	緑（鮮やか）	4.25	3.00	1.95	0.07	4.06	風化が進み痩せて凹凸が著しい。螺旋状の蝕像有り。	カリウム鉛ガラス
70	青紺	4.05	3.35	1.73	0.01	4.71	風化が少なく透明感がある。細かい螺旋状の凹凸が孔の周りを廻る。巻付けの最後尾が角状に突出。	カリウム鉛ガラス

Tab.2　6号土壙出土ガラス玉計測表1

遺物番号	色調	(mm) 径	厚さ	孔径	(g) 重量	比重	観察所見	分類
71	緑（濃く青みがかる）	4.30	4.00	1.70	0.12	3.41	表面細かい凹凸に覆われザラついている。螺旋状の蝕像が小口面を中心に明瞭に観察される。側面観は台形を呈する。	カリウム鉛ガラス
72	緑（濃く、やや青みがかる）	4.40	2.45	1.67	0.08	4.00	気泡がはじけたような細かい円形と、螺旋状の蝕像が見られる。	カリウム鉛ガラス
73	青紺	4.80	3.10	1.66	0.12	4.07	風化が進み痩せて凹凸が著しい。螺旋状の蝕像有り。	カリウム鉛ガラス
74	青紺	4.35	2.60	1.62	0.08	3.81	風化が進み凹凸が著しく、螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
75	青紺	4.30	3.90	1.69	0.08	4.37	風化が進み凹凸が著しく、螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
76	青紺	4.30	2.30	1.77	0.07	4.38	風化が進み凹凸が著しく、螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
77	青紺（淡い）	4.25	2.80	1.62	0.10	4.55	殆ど風化が見られない。気泡は独立し球形を呈する。	カリウム鉛ガラス
78	青紺	4.35	2.55	1.46	0.09	4.05	風化が進み凹凸が著しい。螺旋状の蝕像有り。巻き付けの最後尾が角状に突出。	カリウム鉛ガラス
79	青紺	4.50	2.40	1.49	0.08	4.11	風化が進み凹凸が著しい。螺旋状の蝕像有り。	カリウム鉛ガラス
80	青紺	4.15	2.85	1.69	0.07	4.11	やや風化が見られ、螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
81	青紺	4.55	2.40	1.71	0.08	4.05	やや風化が見られ、凹凸が著しい。	カリウム鉛ガラス
82	青紺	4.40	2.30	1.72	0.07	3.82	風化が進み凹凸が著しく、螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
83	青紺	4.40	2.30	1.70	0.07	4.80	風化が進み凹凸が著しく、螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
84	緑（かなり濃く青味がかる）	4.55	2.70	1.64	0.10	4.12	気泡がはじけたような細かい円形と、螺旋状の蝕像が見られるが、残存状況は良好。	カリウム鉛ガラス
85	緑（黄緑）	4.10	1.95	2.28	0.04	4.89	風化が進み凹凸が著しく、螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
86	緑	3.60	2.75	1.73	0.05	4.36	やや風化が見られ、螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
87	緑（黄緑）	4.00	2.20	2.31	0.04	4.56	風化が進み痩せて凹凸が著しい。螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
88	緑	3.75	2.55	2.23	0.04	4.44	風化が進み痩せて凹凸が著しい。螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
89	緑（かなり濃く青味がかる）	4.45	2.85	1.56	0.10	4.12	あまり風化は見られない。気泡のはじけたものと、螺旋状の蝕像が若干有り。	カリウム鉛ガラス
90	緑（かなり濃く青味がかる）	4.45	3.10	1.59	0.11	3.83	あまり風化は見られない。気泡のはじけたものと、螺旋状の蝕像が若干有り。	カリウム鉛ガラス
91	緑（かなり濃く青味がかる）	4.30	2.30	1.54	0.09	4.00	やや風化が見られ、螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
92	緑（濃く、やや青味がかる）	3.95	2.55	1.47	0.06	3.44	やや風化が見られ、螺旋状の蝕像が明確化。巻き付けの最後尾が角状に突出。	カリウム鉛ガラス
93	緑（濃く、やや青味がかる）	4.30	2.45	1.60	0.09	3.87	あまり風化は見られない。気泡のはじけたものと、螺旋状の蝕像が若干有り。	カリウム鉛ガラス
94	緑（濃いめ）	3.90	3.00	1.67	0.07	3.70	表面細かい凹凸に覆われザラついている。螺旋状の蝕像が小口面を中心に明瞭に観察される。側面観は台形を呈する。	カリウム鉛ガラス
95	緑（濃く、やや青味がかる）	4.25	2.65	1.55	0.09	3.91	あまり風化は見られない。気泡のはじけたものと、螺旋状の蝕像が若干有り。	カリウム鉛ガラス
96	緑	4.35	2.15	2.26	0.06	4.31	風化が進み痩せて凹凸が著しい。螺旋状の蝕像が明確化。	カリウム鉛ガラス
97	緑（濃いめ）	3.70	2.30	1.60	0.06	4.58	あまり風化は見られない。気泡のはじけたものと、螺旋状の蝕像が若干有り。	カリウム鉛ガラス
98	緑（濃く、やや青味がかる）	3.65	2.65	1.53	0.06	4.75	やや風化が見られ、凹凸が著しい。所々に小さな欠損有り。	カリウム鉛ガラス
99	緑（濃く、やや青味がかる）	3.70	2.95	1.54	0.07	3.79	あまり風化は見られない。螺旋状の蝕像が若干有り。	カリウム鉛ガラス
100	緑（濃く、やや青味がかる）	3.80	2.50	1.58	0.06	3.93	全体に細かい凹凸で覆われ、螺旋状の蝕像も不明瞭。	カリウム鉛ガラス
101	緑（濃く、やや青味がかる）	3.70	2.70	1.62	0.06	3.59	若干風化が進み、気泡のはじけたものと螺旋状の蝕像が見られる。	カリウム鉛ガラス
102	緑（濃く、やや青味がかる）	3.70	2.75	1.67	0.06	4.57	あまり風化は見られないが、微細な凹凸で覆われている。螺旋状の蝕像は不明瞭。	カリウム鉛ガラス
103	緑（濃いめ）	3.60	2.80	1.61	0.06	4.21	表面細かい凹凸に覆われザラついている。螺旋状の蝕像は不明瞭。	カリウム鉛ガラス
104	赤白	2.40	1.40	0.63	0.02	計測不能	赤色ガラスは透明度が高く気泡は少ない。表面に微細な凹凸が見られる。内部の白色ガラスは不透明で気泡等は観察できない。	カリウム鉛ガラス
105	赤白	2.40	1.40	0.63	0.02	計測不能	赤色ガラスでは、孔の軸方向に平行して微細な気泡列が複数列観察できる。	カリウム鉛ガラス

Tab.3　6号土壙出土ガラス玉計測表2

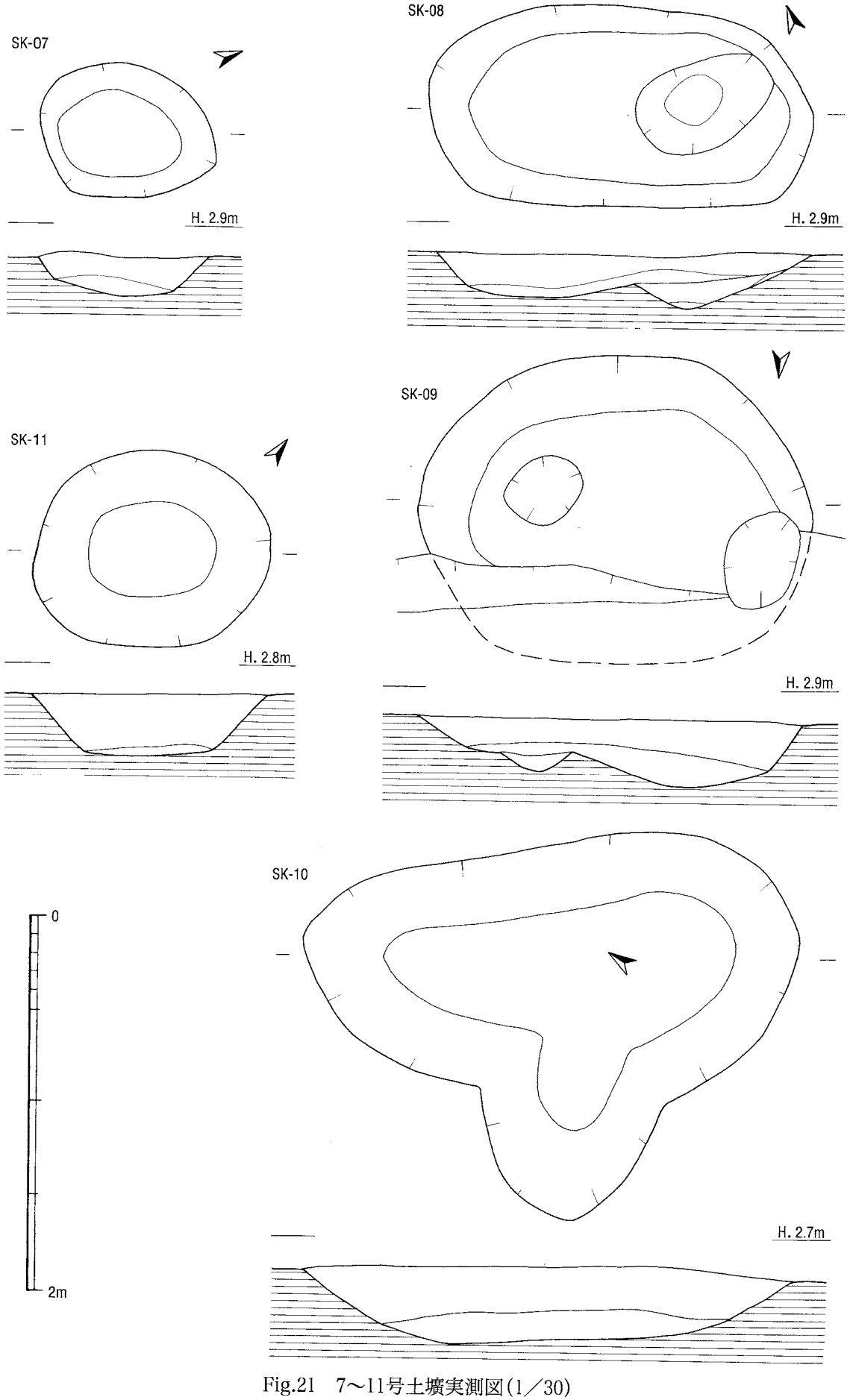


Fig.21　7～11号土壙実測図(1／30)

から東壁下には幅が20～25㎝、深さが12～15㎝の浅い舟底状をした溝が巡り、東壁から西壁下にも同様の痕跡が観察された。竪穴住居跡の可能性も考えられるが、明確な柱穴は検出されなかった。床面は、ほぼ平坦で中央部は浅い凹レンズ状をなしていた。覆土は、暗黄褐色砂を含んだ暗茶褐色砂で、土師器甕や坏片のほかに玄武岩片や焼粘土塊が出土した。

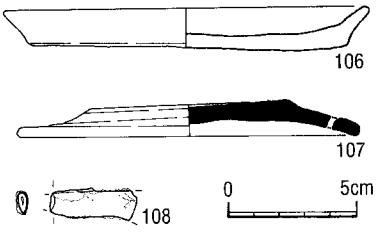


Fig.22　7・26号土壙出土遺物
実測図(1／3)

22号土壙　SK－22（Fig.5）

22号土壙は、調査区の北東端にある円形土壙で、北壁は1号甕棺墓に削平されている。平面形は、長さ120㎝で幅は90㎝程になろう。壁面は、西壁が急峻なほかはやや緩やかに立ち上がり、深さは20㎝。壙底は平坦で、断面形は逆台形を呈する。覆土は暗茶褐色砂で、遺物は出土していない。

23号土壙　SK－23（Fig.5　PL.1）

23号土壙は、調査区中央部の北寄りに位置する円形土壙で、北東へ3mの距離には25号土壙がある。平面形は、長径が250㎝、短径が235㎝のやや不整な円形プランを呈している。壁面はやや急峻で、壁高は29㎝を測る。壙底は平坦であるが、北東壁から南西壁に向かってわずかに傾斜している。覆土は暗茶～黒褐色砂で土錘のほかに土師器甕や坏、須恵器甕、青磁合子、人形土製品片が出土した。

24号土壙　SK－24（Fig.5　PL.1）

24号土壙は、調査区の北東部にあり、22号土壙と25号土壙に挟まれて位置している。平面形は、

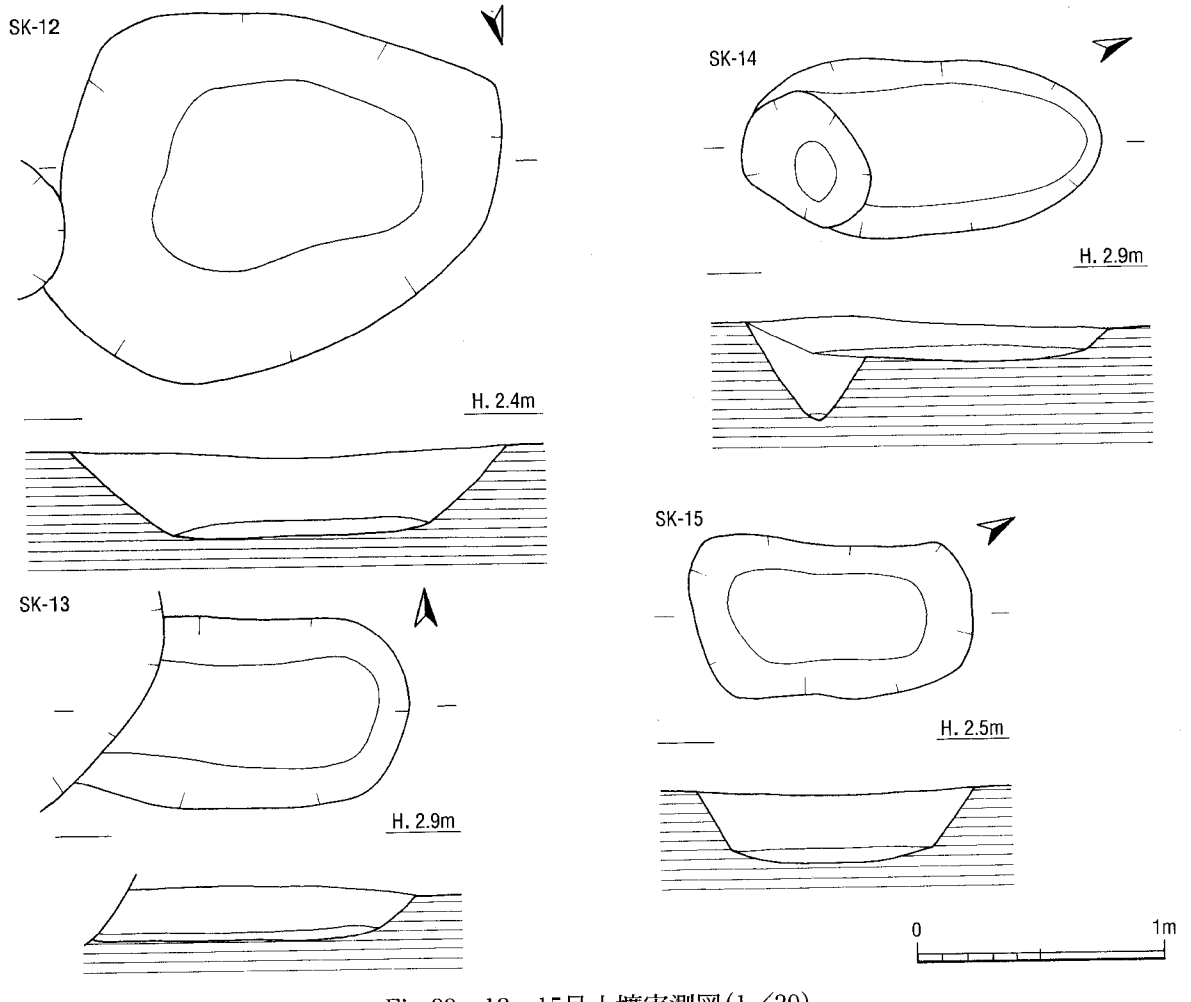


Fig.23　12～15号土壙実測図(1／30)

長径が220㎝で、短径が200㎝の円形プランをなそう。壁面はやや緩やかに立ち上がり、壁高は30㎝。壙底は平坦で、断面形は逆台形をなす。覆土は、暗茶～黒褐色砂で遺物は出土しなかった。

25号土壙　SK－25（Fig.5　PL.1）

25号土壙は、調査区の北東部に位置し、すぐ北には24号土壙が、また南西へ3mの距離には23号土壙がある。平面形は、径が210㎝の円形プランを呈する。壁面は急峻に立ち上がり、壁高は5～17㎝で南壁は大きく削平されている。壙底は、中央部が浅く窪むがほぼ平坦で、断面形は逆台形をなしている。覆土は、暗茶～黒褐色砂で遺物は出土していない。

26号土壙　SK－26（Fig.5）

26号土壙は、調査区中央部の南寄りにあり、21号土壙南西壁に沿って掘り込まれているが切り合いは確認できなかった。平面形は、長径が150～170㎝、短径が100～120㎝ほどの不整な楕円形プランをなそう。覆土は、暗茶～暗赤褐色砂で中央部には淡く赤変した小石が転がる。その外縁にはドーナツ状に淡黒色砂が拡がり、焼土壙の可能性もある。遺物は、土師器甕や甑把手が出土した。

出土遺物（Fig.11・22　PL.14）

107は、口径が13.5㎝、器高が1.4㎝の須恵器蓋である。ストレートに外反する体部には3㎜の円孔を穿っている。調整は体部と内面がヨコナデ、平坦な天井部は回転ヘラ切り。胎土は精良で、若干の石英・長石粒と雲母を含み、焼成は良好。色調は外面が暗灰黄色、内面は灰白色。

108は、現長3.4㎝の刀子片で、わずかに関部が遺存している。

4は、長さが4.47㎝、最大径3.04㎝、重さが29gの管状の小型土錘である。

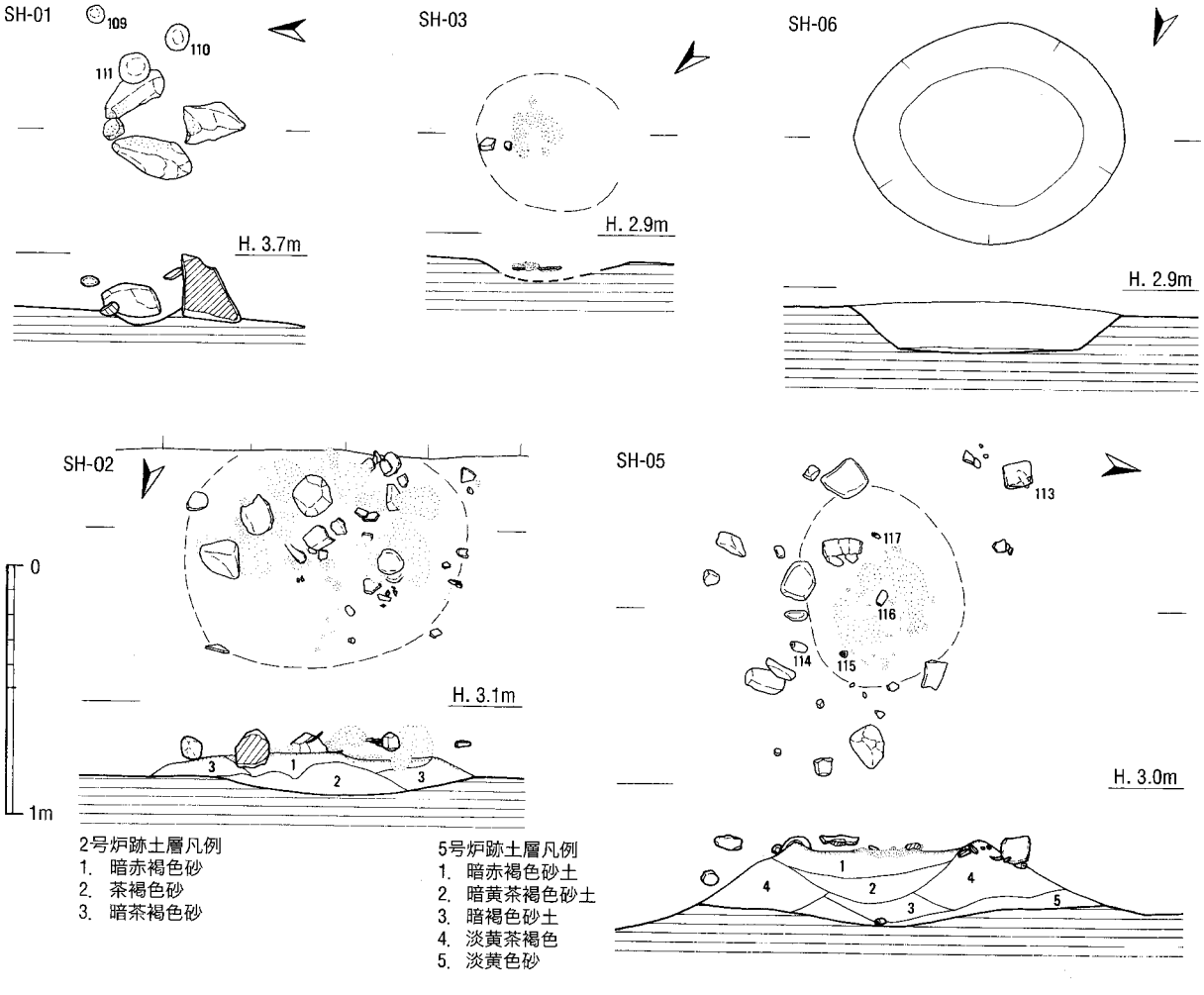


Fig.24　1～3・5・6号炉跡実測図(1／30)

27号土壙　SK－27（Fig.5　PL.1）

27号土壙は、調査区中央部の北縁にあり、すぐ南には4号土壙が位置している。平面形は、長径が145㎝、短径が105㎝の楕円形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなしている。壁高は32㎝である。覆土は茶～暗茶褐色砂で、遺物は出土していない。

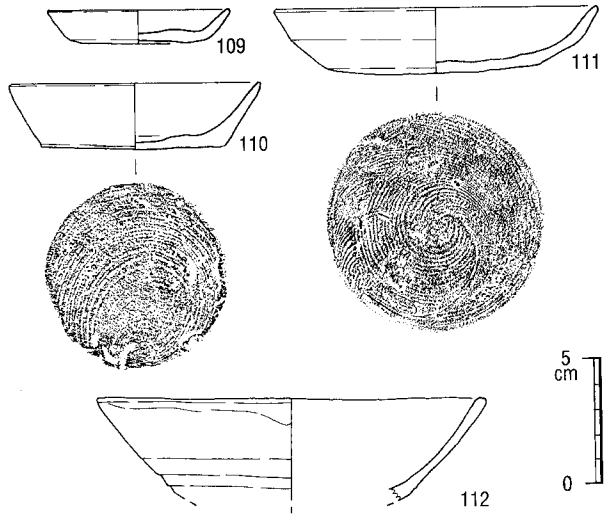


Fig.25　1・4号炉跡出土遺物実測図(1／3)

4. 焼土壙（SH）

焼土壙は6基を検出したが、焼粘土塊や赤変した転石が点在している箇所があった。これらの粘土塊や転石は比較的狭い範囲に散在し、破壊された炉跡と推考され、更に数基の焼土壙が存在していたと考えられる。分布的には、砂丘後背の緩斜面に沿うように一定の空間を保って弧状に拡がっているようであるが定かにはしがたい。

1号焼土壙　SH－01（Fig.24　PL.6）

1号焼土壙は、調査区南東端の南流する1号溝の埋土上にあり、北東へ50㎝の距離にはガラス小玉や宋銭等が出土した6号土壙が位置している。焼土壙は、長さが25～35㎝大の花崗岩を並べて焼壁としている。角礫は、東と西から各々北へ鋭角的に配置し、その間には10㎝大の扁平な円礫を詰めて隙間を埋めている。また、南側は西壁石の南東端に接して角礫の小口面を配置して三角形状の平面プランを呈しているが、南東隅は10㎝ほどの隙間がある。角礫の内側は、焼成による赤変が著しい。覆土は、暗茶～暗黒褐色砂であるが、6～8㎝ほど凹レンズ状に浅く窪む床面には炭小片を含んだ黒色砂が堆積していた。遺物は、東壁石の外側から土師器坏2点と土師器皿1点が出土している。

出土遺物（Fig.25　PL.11）

109は、口径7.3㎝、底径5.5㎝、器高が1.4㎝の土師器小皿。体部はストレートに外反し、底部はやや上げ底になる。胎土は良質で、細～小砂粒と雲母微細を含む。にぶい橙色。110は、口径10㎝、底径7.4㎝、器高が2.7㎝の土師器坏。ストレートに外反する体部はヨコナデ、内底面はナデ調整。平底の底部は回転糸切り。胎土には細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。外面は灰褐色、内面は橙色。111は、口径12.9㎝、底径8.5㎝、器高が2.7㎝の土師器皿。口縁部は、内湾ぎみに立ち上がる体部から小さく屈曲して短く外反する。体部はヨコナデで、内面には油煙状の黒色物が付着している。内底面はナデで、丸みを帯びた底部は糸切り。胎土には微細砂と雲母微細を含み、焼成は良好。外面はにぶい黄色、内面は明褐灰色。

2号焼土壙　SH－02（Fig.24　PL.6・7）

2号焼土壙は、調査区の中央部にある21号土壙の南壁際の埋土上にあり、2m南には8・9号土壙が並んで位置している。平面形は、長さが115㎝、幅が105㎝の円形プランを呈している。壙底は、浅い凹レンズ状でその窪み上には茶褐色砂が5～15㎝の厚さで、その周縁には小灰粒の混入した暗茶褐色砂が

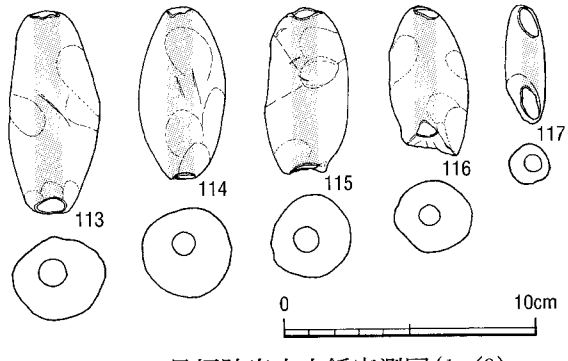


Fig.26　5号炉跡出土土錘実測図(1／3)

ドーナツ状に堆積していた。この堆積砂上には、8～15㎝大の赤変した転石と炉壁体と考えられる焼粘土塊が散乱していた。炉壁片の混入した覆土は、中央部が厚く外縁にむかって緩やかに傾斜する台形の断面形を呈している。覆土からは、土師器壷・甕・坏片と須恵器甕・坏片が出土した。

3号焼土壙　SH－03（Fig.24　PL.6・7）

3号焼土壙は、調査区中央部にある21号土壙の埋土上にあり、すぐ南には2号焼土壙が位置している。削平が著しいが、壙底の平面形は長さが60㎝、幅が50㎝の楕円形プランを呈している。壙底は、中央部が浅く凹レンズ状に窪み、炉壁体と考えられる拳大の焼粘土塊が混入した赤褐色砂が薄く堆積していた。覆土中からは土師器甕片がわずかに出土した。

4号焼土壙　SH－04（Fig.5　PL.8）

4号焼土壙は、調査区中央部のやや西よりにあり、11号土壙のすぐ西に位置している。平面形は、長さが140㎝、幅が110㎝の楕円形プランを呈し、断面形は台形をなしている。覆土は、基底面に淡茶灰褐色砂があり、その上面に茶褐色～暗褐色砂、暗赤褐色砂が互層をなして堆積していた。最上層の暗赤褐色砂に灰層を含んだ焼粘土粒が混入していた。基底層から土師器甕、坏片が出土した。

出土遺物（Fig.25）

112は、口径が15.4㎝の内黒埦。体部はわずかに膨らみ、肉厚の口縁部はストレートにのびる。外面はヨコナデ、内面はナデ後に粗い研磨。胎土は精良で、外面は暗灰～黄灰色、内面は灰黄色。

5号焼土壙　SH－05（Fig.24　PL.8）

5号焼土壙は、調査区の北西縁にあり、12号土壙の東2mの距離に位置している。平面形は、直径が140㎝の円形プランをなす。炉辺には、幅が50～60㎝、厚さが20～25㎝の淡黄茶褐色砂がドーナツ状に巡り、その窪みに赤変した暗黄茶褐色砂と暗赤褐色砂が堆積していた。炉床は、この暗赤褐色砂上にあり、厚さ1～2㎝の焼けた炉壁体が拡がっていた。また、炉内や周縁には拳大～小児頭大の赤変した転石が炉を囲むように点在していた。遺物は、土錘や土師器甕・高坏・器台のほかに須恵器甕・瓶・坏と瓦片が出土した。

出土遺物（Fig.26　PL.14）

113～115は、長さが6.64～8.04㎝、最大径が3.28～3.67㎝、重さが62～84gの大型の管状土錘。116・117は、小型の管状土錘。長さは4.64～5.6㎝で、117は最大径が1.64㎝、重さは10gと長さに較べていたって細身である。

6号焼土壙　SH－06（Fig.24）

6号焼土壙は、調査区北縁の西寄りにあり、東3mの距離には27号土壙が位置している。平面形は、長さが107㎝、幅が88㎝の楕円形プランをなす。深さが21㎝の壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈している。壙底の中央部には、明褐色砂がレンズ状に堆積し、その周辺部には淡黒色砂がドーナツ状に観察された。この淡黒色砂層は、灰の混入と推考されることから焼土壙と考えられる。遺物は出土していない。

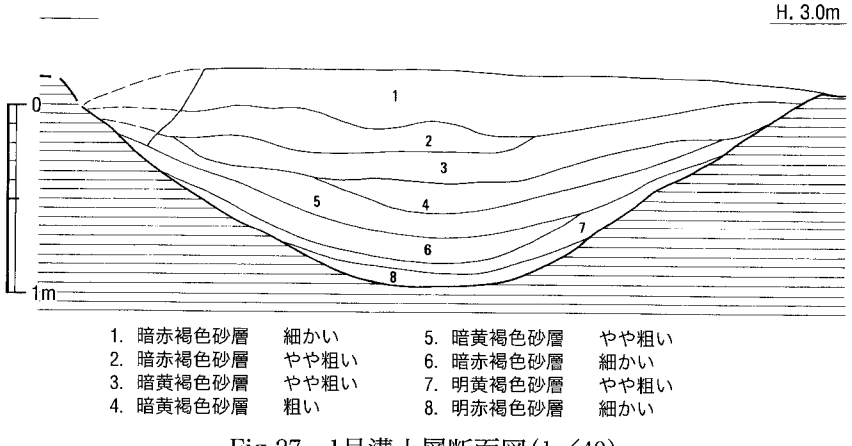


Fig.27　1号溝土層断面図(1／40)

5. 溝遺構（SD）

溝状遺構としては、3条を検出した。このうち直線的に延びる1条の大溝は、該期の土壙とともに何らかの有機的な関連が想起される。一方、大溝を除く2条の溝は細く短いものでその用途は明らかにしがたい。

1号溝　SD－01（Fig.27　PL.9）

1号溝は、調査区の南東端にある南北流する大溝で、磁北から東へ20°の角度で直線的に延び、その埋土上には1号焼土壙と6号土壙が掘り込まれている。溝幅は4～4.2m、深さは100～115cmで壁面は緩やかに立ち上がる。断面形は、溝底の中央部が浅く凹レンズ状に窪んだ逆台形をなしている。溝底は北から南にむかって緩やかに傾斜し、中程で10cmほどの比高差をもって傾斜している。標高は、北端の最高所で1.85m、南端の最低所で1.61mである。覆土は、上層が暗赤褐色砂、中層が暗黄褐色砂で下層は薄い明黄褐色砂を挟んで赤褐色砂が薄い互層をなして堆積していた。覆土からは、弥生土器壷、土師器甕・高坏・器台、須恵器甕・坏、青磁碗、平瓦のほかにフイゴ片や鉄滓等が出土した。

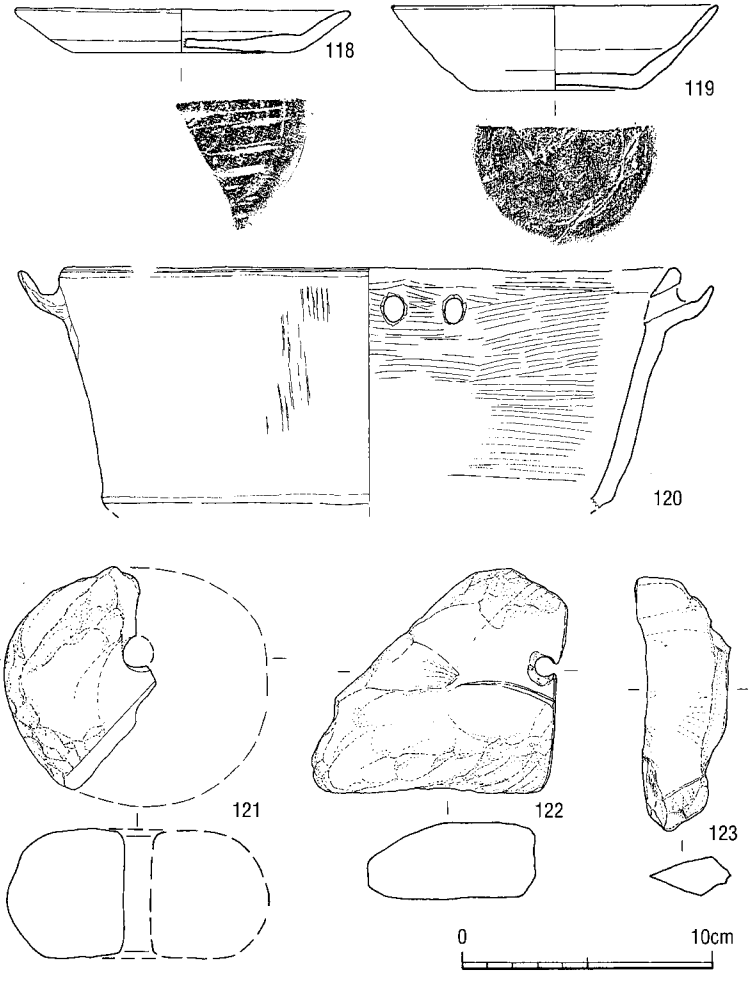


Fig.28　1号溝出土遺物実測図（1／3）

出土遺物（Fig.28・29　PL.14）

118は、口径13.4cm、底径8.6cm、器高が1.7cmの土師器皿である。体部は短く外反し、口縁部は小さく外方に摘み出す。体部はヨコナデ、内底面はナデ、底部には板目痕が残る。胎土は精良で、焼成は良好。灰白色。119は、口径は13cm、器高は3.4cmの土師器坏で、底径が6.6cmの底部には板目痕が残る。体部は小さく膨らんで立ち上がる。調整は体部がヨコナデ、内底面がナデ。胎土には石英・長石・雲母微細を含み、焼成は良好。外面は灰黄色、内面は灰黄褐色～黄灰色。120は、口径が24.7cmの土師器質の土鍋である。肉厚の体部はストレートに立ち上がり、口縁部下には小さな角状の把手が付き、焼成前に円孔が穿たれている。内面は粗いヨコハケ目、外面はタテハケ目後に粗いナデで全体に煤が付着している。胎土は、精良で雲母を含み、焼成は良好。内面は灰色。

121は、滑石の石錘で復原径が11.5cm、厚さが5.5cm。径1.3cmの円孔を中央よりやや偏って上下より穿ち、仕上げは粗い。122は、

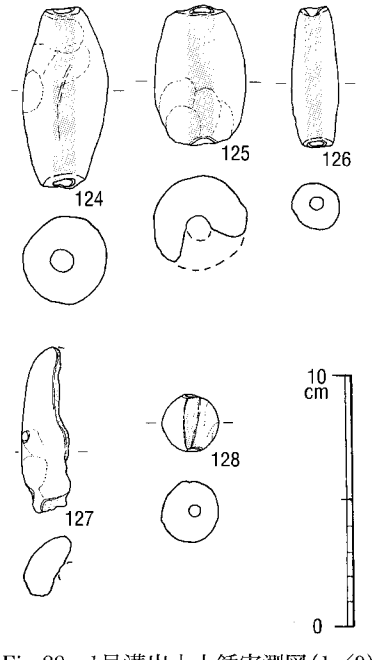


Fig.29　1号溝出土土錘実測図（1／3）

9㎜の円孔のある石錘片で、厚さは3.2㎝。123は、凝灰岩質の砥石片である。

124・127が大型、125・126は小型の土錘。大型の土錘124は、長さが7.07㎝、最大径3.75㎝、重さは76g。小型の土錘は、長さが5.2～5.6㎝、最大径1.92～3.88㎝で、126は重さが17gと細身で軽い。128は、有溝タイプの丸形土錘で、径2.26～2.48㎝、重さは12g。

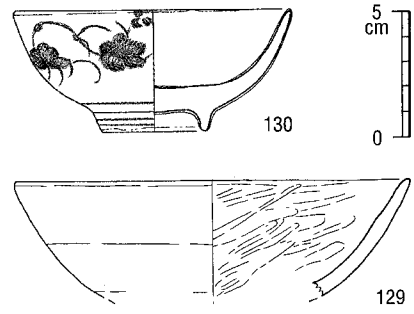


Fig.30　18・53号ピット出土遺物実測図(1／3)

2号溝　SD－02（Fig.5）

2号溝は、調査区の南西部にある長さ10mの細長い溝で、調査区南西端から北東端にむかって直線的に延びている。溝幅は、南端が20～25㎝、北端が55～80㎝で北から南へむかって10㎝ほど低くなる。断面形は、浅い舟底状をなしている。覆土は、暗茶～黒色砂で、土師器壷・瓶・坏のほかに玄武岩片が出土した。

3号溝　SD－03（Fig.5）

3号溝は、調査区の中央部にある短く細い溝で、11号土壙の北壁に沿うように弧状に緩く湾曲している。長さは2.3m、幅は25～35㎝、深さは25㎝で断面形は浅い舟底状をなしている。覆土は、明黒色砂の単一層で、土師器甕、須恵器甕片と滑石片が出土した。

6. その他の遺構と包含層出土の遺物

甕棺墓や土壙などのほかに100基を超すピットが調査区全域で検出された。ピットの中には深く掘り込まれたものもあり、建物跡の存在を想起させるものがあるが、ひとつの遺構としては把握しえなかった。また、黒褐色の厚い包含層中からは120点を超す土錘が出土しており、砂丘上に立地する遺跡の性格を示唆するものがある。

ピットの出土遺物（Fig.30・31　PL.14）

129は、口径が15.6㎝の瓦器埦である。口縁部は、半球形の体部から短くストレートにのび、底部には高台が付こう。調整は外面がヨコナデ、内面は粗い研磨。胎土は良質で、若干の石英・長石・雲母微細を含み、焼成は良好。外面は黄灰色、内面は灰～灰黄色。

130は、波佐見窯の染付碗である。口径は11㎝、器高は4.8㎝、高台径は4.2㎝。半球形の体部には梅文、高台には圏線を描き、見込みには釉剥ぎ痕が残る。18世紀後半の産。

131・132は、長さが7.1～7.76㎝、最大径3.23～3.91㎝の大型土錘で、132は103gと重い。

包含層の出土遺物（Fig.33～42　PL.11・12・14～18）

133は、小型丸底壷である。偏球形の胴部に短い「く」字状の口縁部が付こう。調整は外面がタテハケ目後にナデ、内面は上半がナデ、下半はケズリで粘土の継ぎ目痕が明瞭に残る。胎土は精良で、焼成は良好。外面はにぶい褐色、内面はにぶい橙色。134は、口径が9.6㎝の土師器丸底壷。「く」字状に外反する口縁部は端部を小さく上方に摘み上げている。口縁部がヨコナデ、内面はヘラケズリ、外面はハケ目調整。胎土は良質で、灰黄褐色。135は、口径9㎝、器高12.5㎝の丸底壷。口縁部は短く直口し、球形の胴部中位と底部には焼成後に大きな円孔を穿っている。胎土は精良で、外面はにぶい赤褐～褐

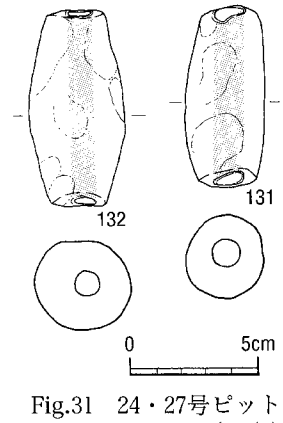


Fig.31　24・27号ピット出土土錘実測図(1／3)

Fig.32　包含層出土土錘位置図(1／150)

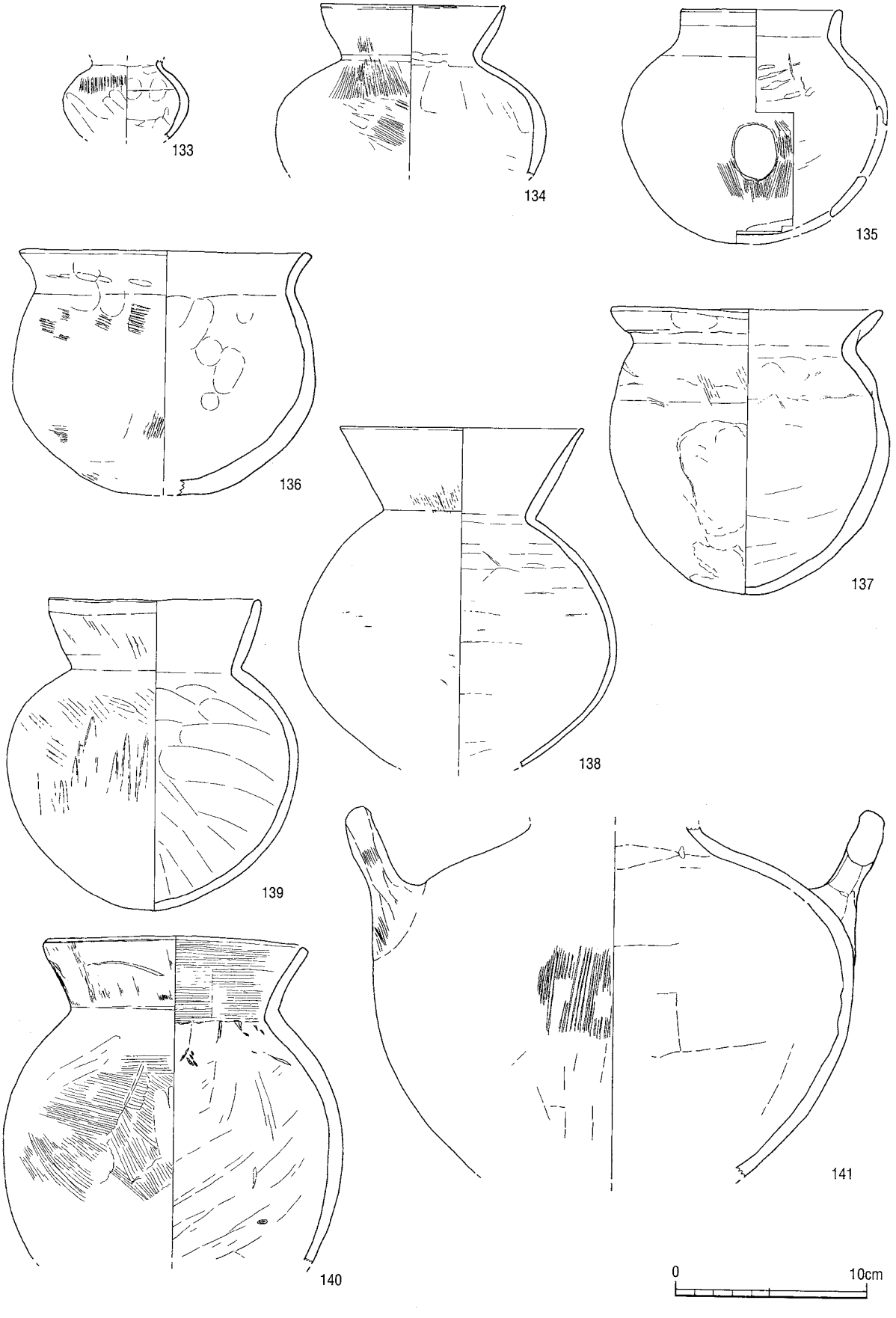


Fig.33　包含層出土遺物実測図1(1／3)

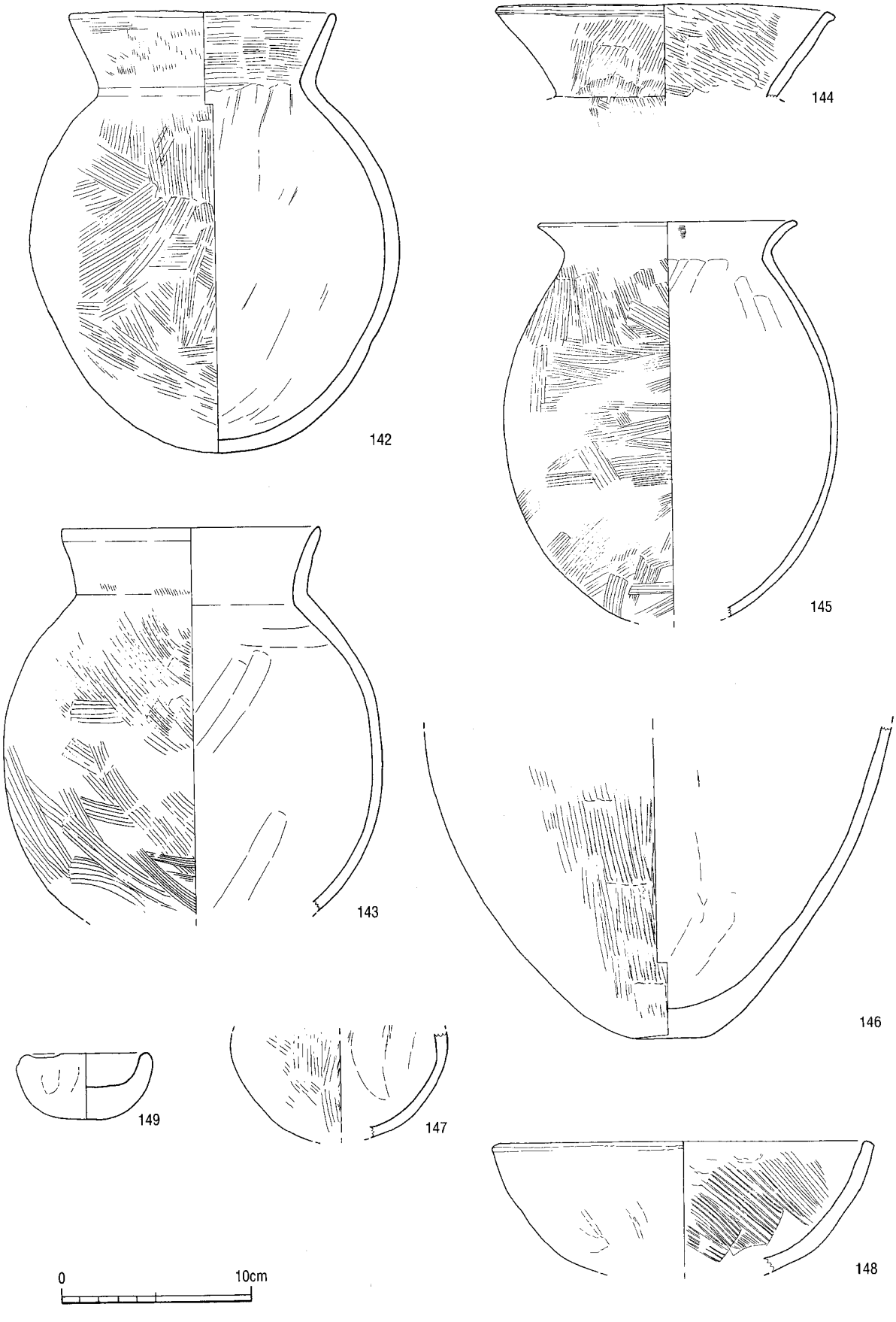


Fig.34　包含層出土遺物実測図2(1／3)

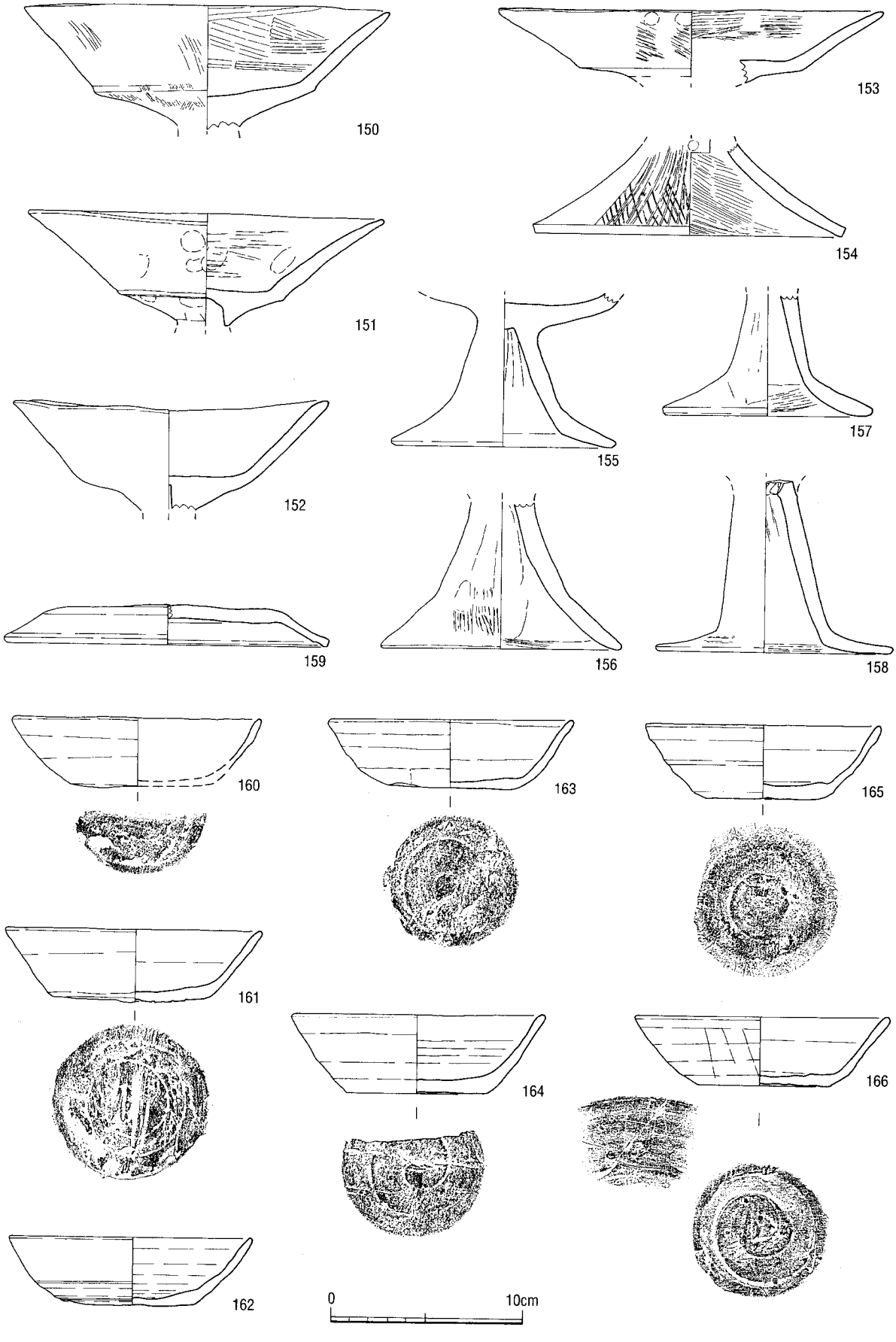


Fig.35　包含層出土遺物実測図3(1／3)

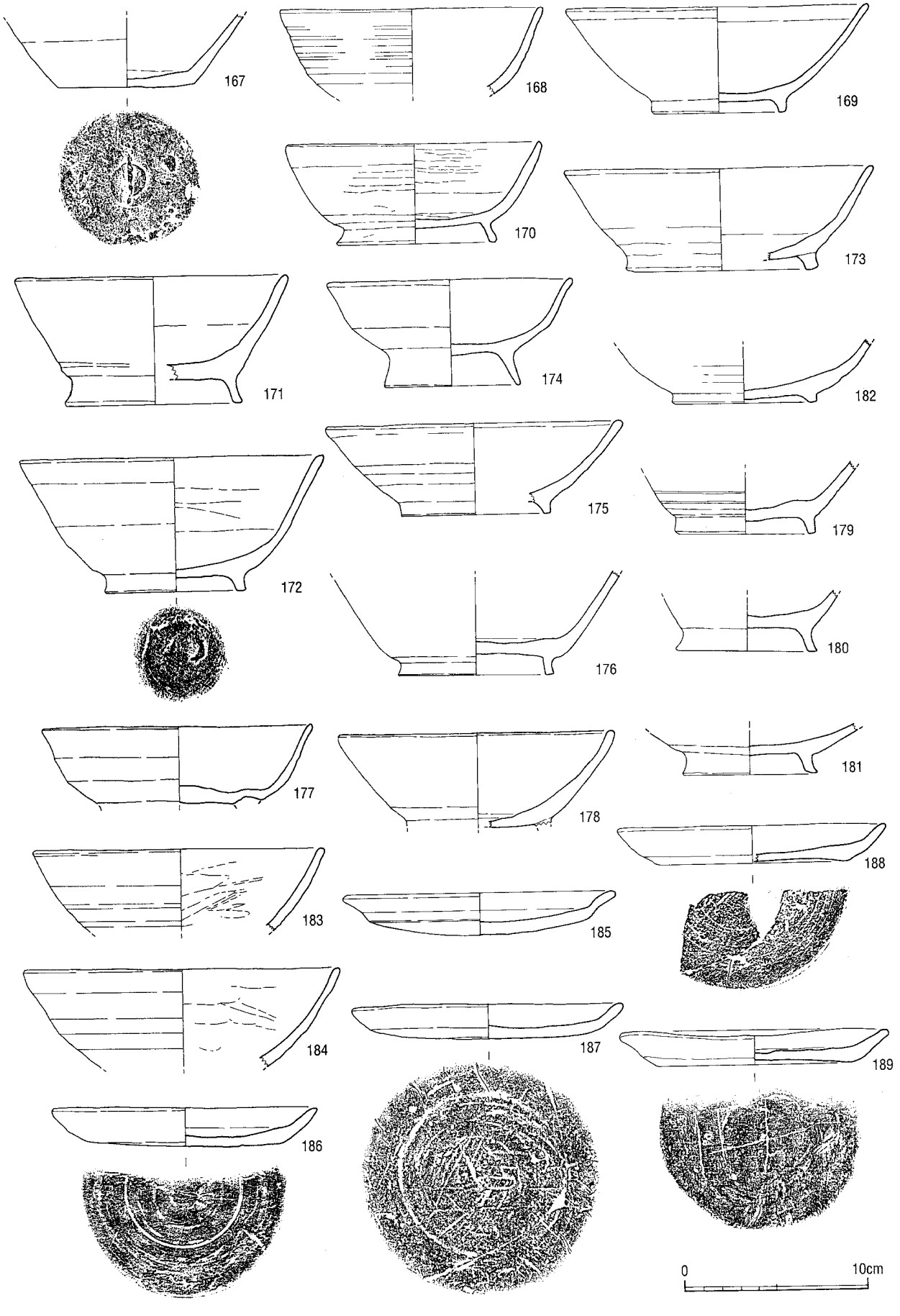


Fig.36　包含層出土遺物実測図4(1／3)

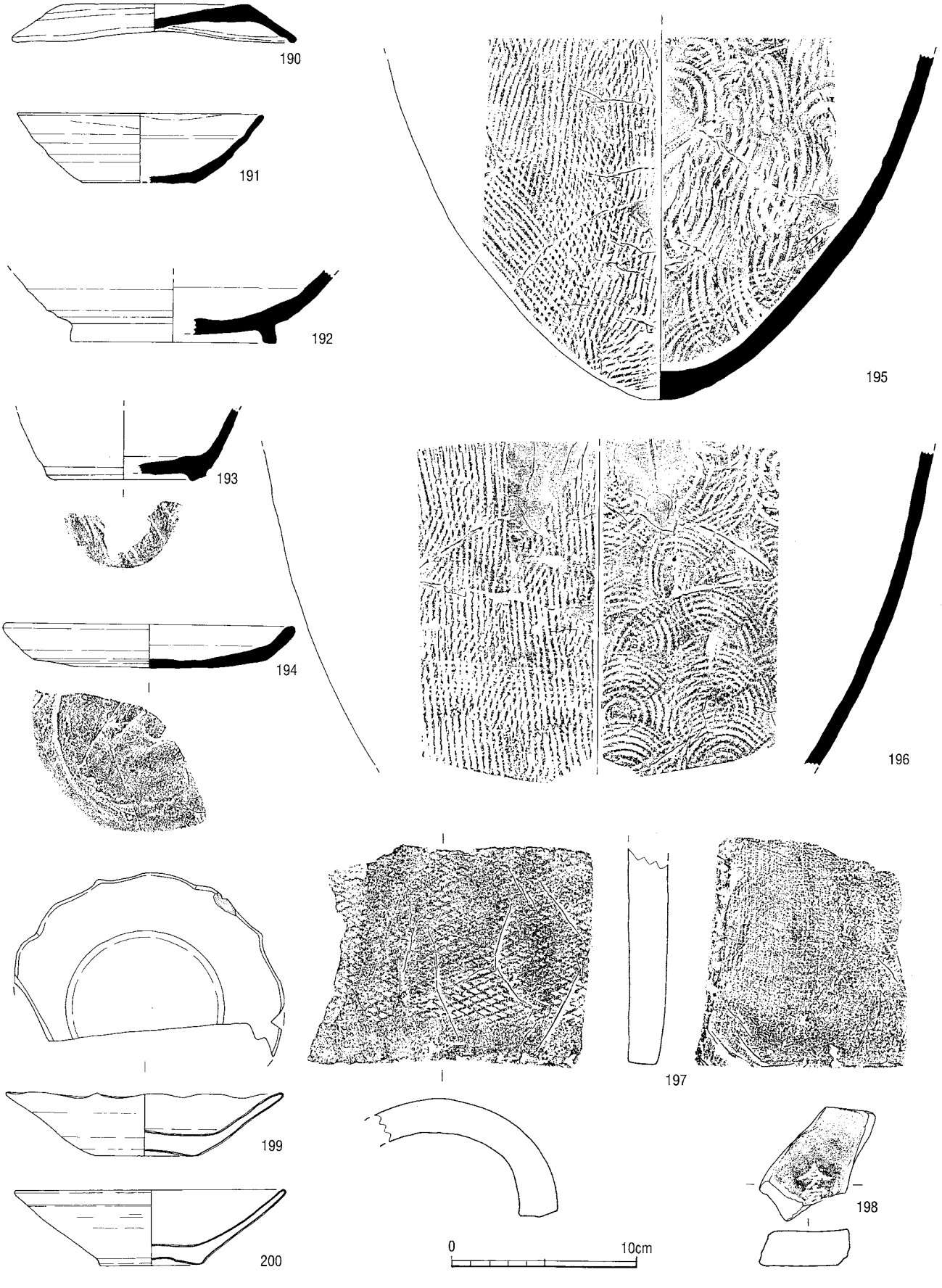


Fig.37　包含層出土遺物実測図5(1／3)

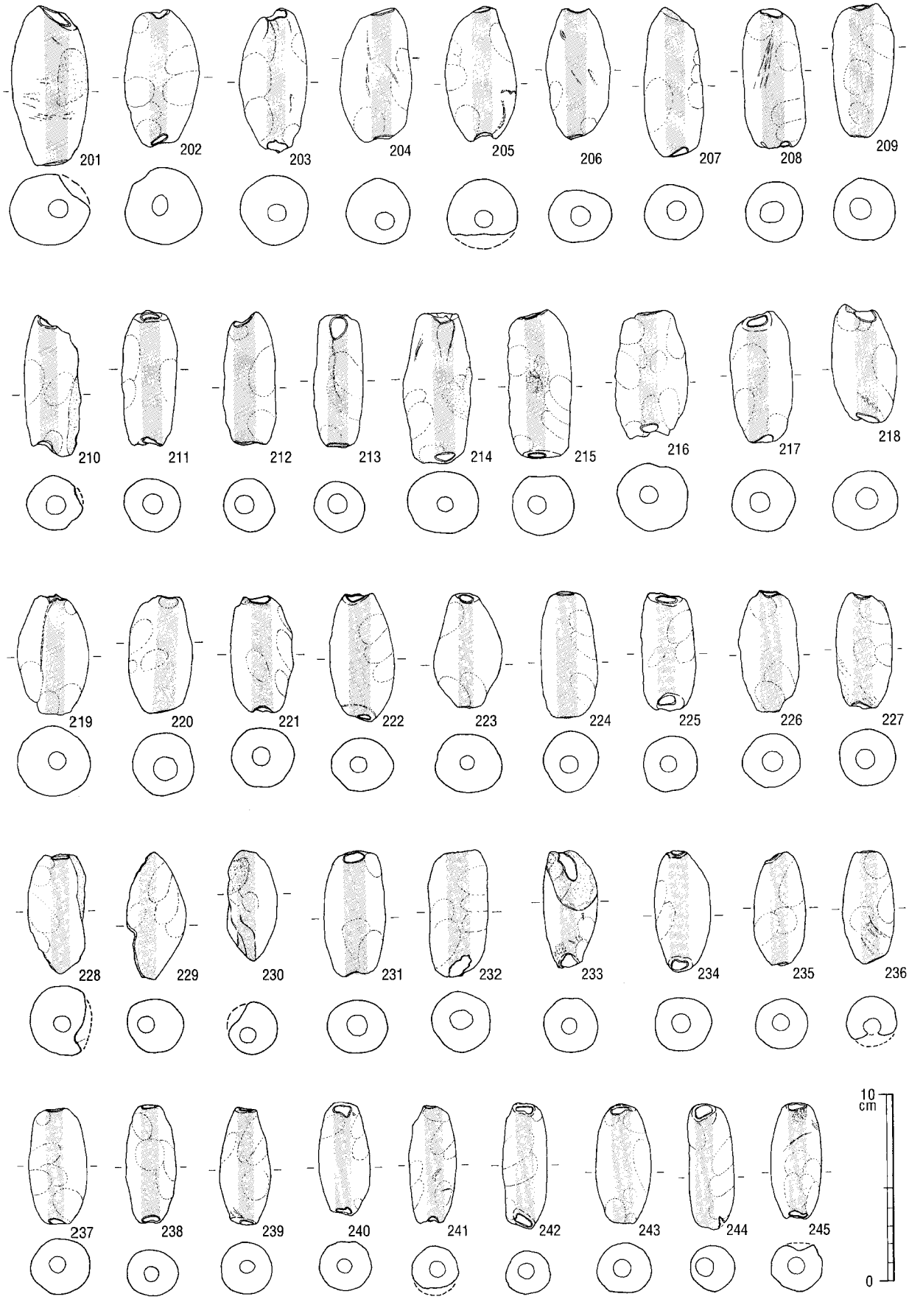


Fig.38　包含層出土土錘実測図1(1／3)

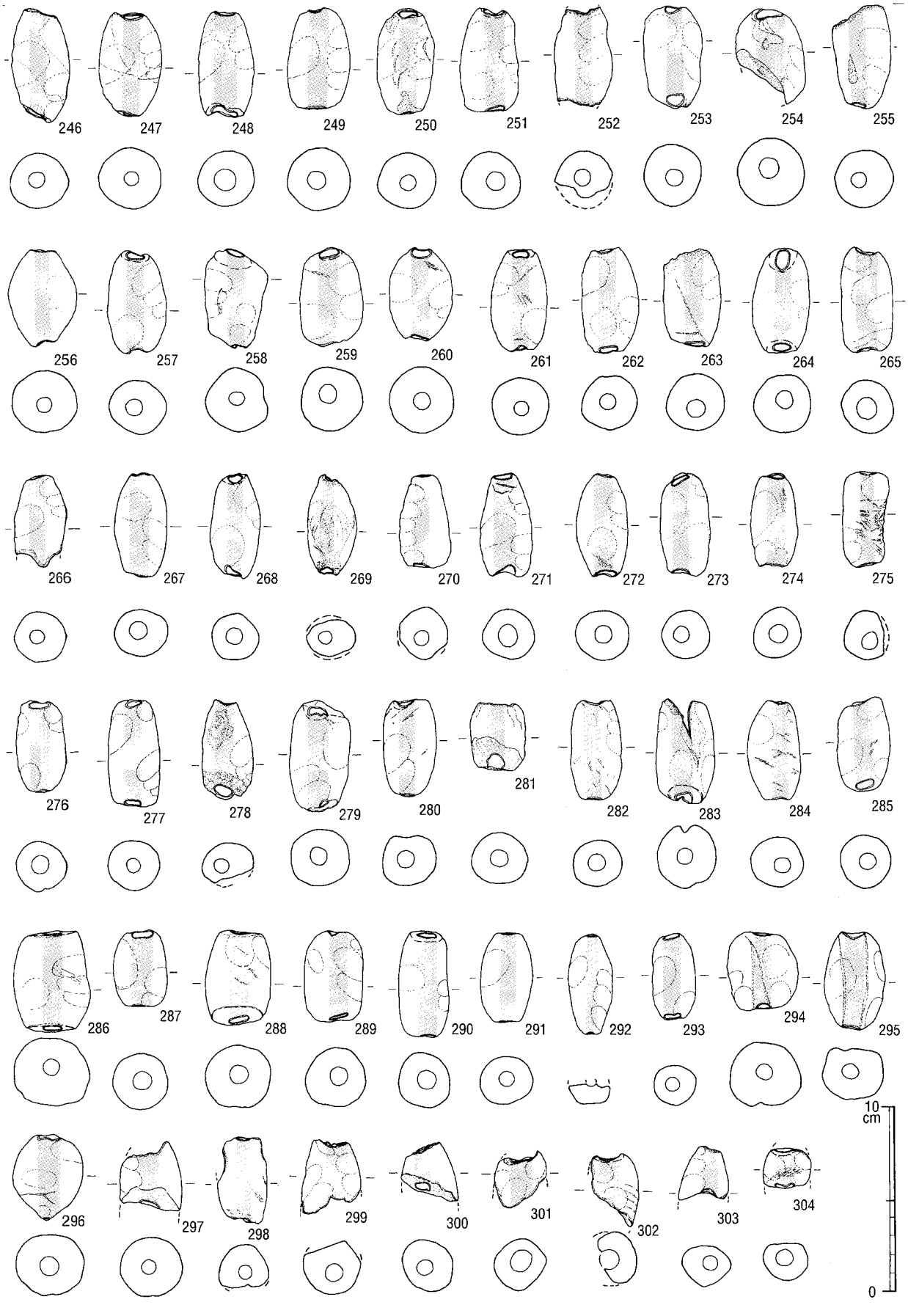


Fig.39　包含層出土土錘実測図2(1／3)

灰色。136は、口径15.4cm、器高が13cmの鉢。口縁部は短い「く」字状をなし、偏球形の胴部は底部が肉厚になる。外面はハケ目後にナデ、内面は押圧ナデ。胎土は砂粒を多く含む。

137は、口径14.3cm、器高が15.2cmの甕。「く」字状の口縁部は、ストレートに外反し、胴部は倒卵形をなす。外面はハケ目後にナデ、内面はヘラケズリ。胎土は粗砂粒を含み、褐～橙褐色。138・139は丸底壷。138は口径12.8cm。ストレートに外反する口縁部は長く、胴部は球形をなす。外面は研磨状の丁寧なナデ、内面はヘラケズリ。胎土は精良で、橙褐色～黄褐色。139は、口径11.7cm、器高は16.4cm。胴部は偏球形をなし、口縁部は内湾ぎみに小さく外反する。内面はヘラケズリ、外面下半はケズリ状に撫でて仕上げ大きな黒斑がある。胎土は精良で、黄橙～赤橙色。140～146は甕である。140は口径が13.9cm。「く」字状の口縁部は大きく外反する。口縁部外面はタテハケ後にヨコナデ、内面はヨコハケ目。胴部は外面がハケ目で煤が付着している。内面はヘラケズリで籾圧痕がある。胎土は小～中砂粒を含み、橙褐色。141は、胴部最大径が25.2cmの把手付壷。球形をなす胴肩部に上方を向いた扁平で円孔を穿った把手が付く。搬入品であろう。外面はタテハケ目後にナデ、内面はヘラケズリ。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好。外面はにぶい褐色～灰黄色、内面はにぶい橙色。

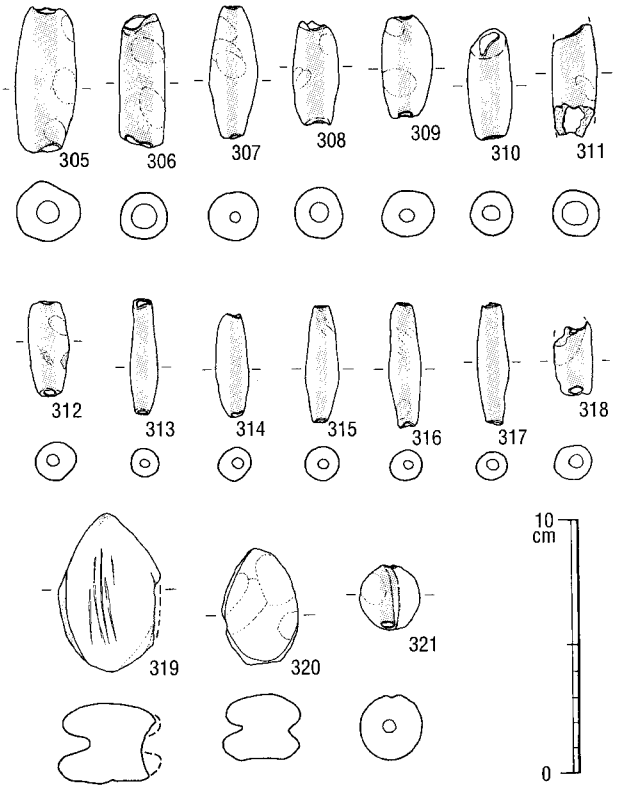


Fig.40　包含層出土土錘実測図3(1／3)

142～145は、土師器甕である。142は、口径14.1cm、器高は23.4cm。「く」字状の口縁部はストレートに外反し、胴部はやや卵形をなす。口縁部外面は、ハケ目後にヨコナデ。胴部は外面がハケ目、内面はヘラケズリ。胎土は細～中砂粒を含み、橙褐色～暗灰褐色。143は、口径が13.6cm。「く」字状の口縁部は、端部を直口ぎみに摘み上げ、胴部は球形をなす。口縁部はヨコナデ、胴部は外面がハケ目、内面はヘラケズリ。胎土は小砂粒を多く含み、暗橙褐色。144は、口径が18cm。ストレートに外反する口縁部は、端部を外方に摘み出している。ハケ目は粗い。胎土は良質で雲母を含み、外面は明褐灰色、内面は灰白色。145は、口径13.8cm。短い「く」字状の口縁部は、反りぎみに開き、胴部は卵形をなす。口縁部はヨコナデ、胴部は外面が細かいハケ目、内面はヘラケズリ。胎土は砂粒を多く含み、暗褐色。147・148は土師器鉢。148は、口径が20.2cm。体部は半球形で、口縁部は上縁を平坦に整えている。胎土は小砂粒と雲母を含む。

149は、口径が7cm、器高が3.5cmの手捏ね土器。底部は厚く、口縁部は半球形の胴部から直口する。胎土は砂粒と雲母を含み、褐灰色。

150～158は、土師器高坏。150は、口径が19cm。口縁部は、小さな段を造ってストレートに外反する。暗赤褐色。151は、口径18.6cm。ストレートに外反する口縁部は、長く外湾ぎみにのびる。にぶい赤橙色。152は、口径が17.1cm。口縁部は緩やかに屈曲してストレートに外反する。153は、口径20.2cm。154は、脚径16.4cmでラッパ状に開く脚部の外面は、粗いヘラ研磨。にぶい橙色。155は、脚径11.6cm。裾部は、屈曲して内面に稜を作って大きく外反する。暗橙褐色。156は、脚径12.6cm。脚裾は緩やかにラ

ッパ状に開く。鈍い赤褐色。157は、脚径11㎝。筒状の脚部は、緩やかに屈曲して外湾ぎみに外反する。灰褐色～にぶい橙色。158は、脚径12.4㎝。筒状の脚部は鋭く屈曲して水平に外反する。暗橙褐色。いずれも胎土には細～小砂粒を含み、焼成は良好。

159は、口径17.2㎝、器高が2.1㎝の土師器坏蓋。天井部は平坦で、口縁部は下方に摘み出している。天井部は回転ヘラケズリ、内底はナデ、体部はヨコナデ。胎土は良質で、にぶい橙色～赤褐色。

160～167は、土師器坏。160は、口径13㎝、器高は3.8㎝。体部は内湾ぎみに立ち上がり、丸く納めた口縁部はやや肥厚する。161は、口径13.4㎝、器高は3.8㎝。体部はストレートに立ち上がり、口縁部は小さな段を作って外反する。外面は暗灰黄色、内面は灰褐色。162は、口径12.7㎝、器高は3.6㎝。体部は内湾ぎみに立ち上がる。外面は淡褐色、内面は淡橙褐色。163は、口径13㎝、器高は3.6㎝。164は、口径13.4㎝、器高は4.2㎝。外面は灰黄褐色、内面はにぶい橙色。165は、口径12.4㎝、器高は3.9㎝。体部は内湾ぎみに立ち上がり、厚い口縁部は段状の稜を作る。外面は灰黄褐色、内面はにぶい赤褐色。166は、口径13.6㎝、器高は3.6㎝で、ストレートに外反する体部外面にはヘラ記号がある。いずれも底部は回転ヘラ切りで、163には板目痕が残る。胎土は良質で砂粒と雲母を含み、焼成は良好。

168～184は、高台付土師器椀。このうち169・172・174・175・178・182～184は内黒椀である。169は、口径16.6㎝、高台径7.4㎝、器高は5.8㎝。体部はストレートに外反し、低い高台は直口する。170は、口径14㎝、高台径8.5㎝、器高は5.6㎝で、体部は内湾気味に立ち上がり、ストレートにのびる高台の畳付は水平である。171は、口径15㎝、高台径9.6㎝、器高は7㎝。体部はストレートに外反し、高台は畳付を小さく外方に摘み出す。172は、口径16.6㎝、器高は7.4㎝で底面はヘラ切り。174は、口径13.4㎝、器高は5.9㎝。体部は緩く屈曲して外反し、ストレートにのびる高台は高い。175は、口径16.4㎝、器高は5㎝。内湾ぎみに立ち上がる体部は浅く、高台は低い。183・184は、体部が偏球形状に内湾して立ち上がる。183は口径が16㎝。調整は体部がヨコナデで内黒椀は粗い研磨。胎土は良質で、細～小砂粒を含む。灰白～褐灰色。

185～189は、土師器皿。185は口径15㎝、器高は2.3㎝。底部は凸レンズ状をなし、口縁部は外湾してのびる。186は、口径14.5㎝、器高は2.2㎝。底部はヘラ切り。187は、口径15㎝、器高は1.9㎝。底部は回転ヘラ切りで、体部はストレートに外反する。188は、口径14.8㎝、底径10.8㎝、器高は2.1㎝。回転ヘラケズリの底部はやや上げ底状をなす。189は、口径14.8㎝、器高は1.8㎝。底部にはヘラ記号がある。体部はヨコナデ、内底はナデ調整。胎土には砂粒を含み、黄灰～灰褐色。

190は、口径15.4㎝、器高が2㎝の須恵器坏蓋。口縁部は内唇に小さく摘み出して横凹線を作る。胎土は良質で、砂粒と雲母を含む。灰～灰白色。191は須恵器坏。口径13.4㎝、底径6㎝、器高は3.7㎝。底部は内湾ぎみに外反する。体部はヨコナデ、内底はナデ、底部は回転ヘラ。胎土は精良で、黄灰色～褐灰色。192・193は、高台付の須恵器坏。192は、高台径が11㎝で畳付は水平である。193は、高台径が8.6㎝。体部はストレートに外反し、底部には板目痕が残る。いずれも胎土には小砂粒を少量含む。褐灰色～黄灰色。194は、口径15.8㎝、器高2.4㎝の須恵器皿。凸レンズ状の底部には板目痕が残る。胎土は砂粒を若干量含み、にぶい橙～赤褐色。195・196は、須恵器甕。外面は板目状、内面は同心円文の叩き痕が残る。胎土は粗砂粒を含み、外面は黄灰色、内面は灰白色。195の底部は尖り底である。

199は越州窯系の輪花文青磁皿。口径15㎝、底径5.2㎝、器高は3.4㎝。畳付は淡いオリーブ色の釉を剥ぎ取り、見込みには5カ所に目跡が残る。

197は、須恵質の丸瓦。外面は斜格子文叩き、内面は布目痕。胎土は小砂粒や雲母を含み、黄灰～灰色。

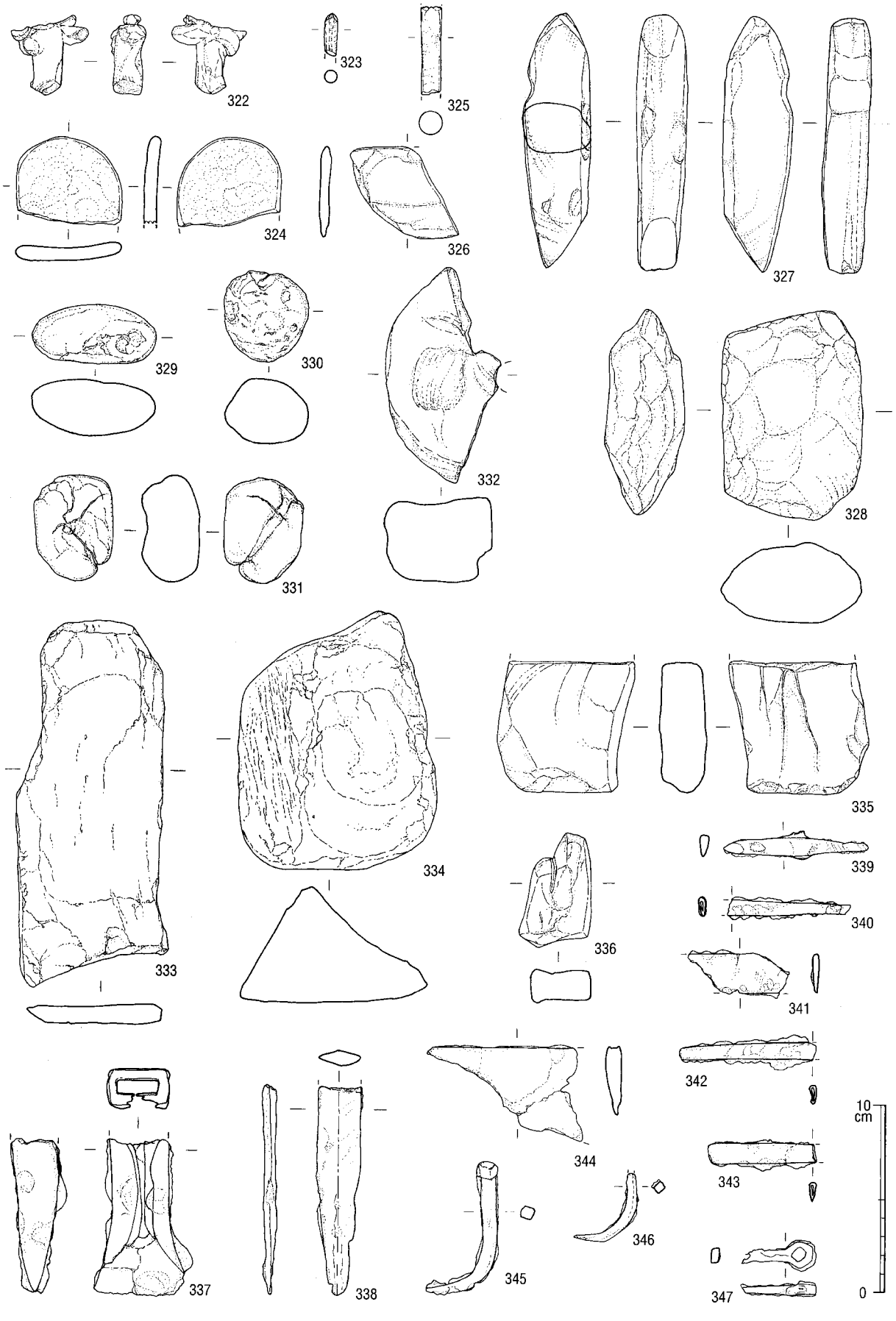


Fig.41　包含層出土石器・鉄器実測図(1／3)

198は、「今宿」の文字が陰刻された平瓦。

201～321は土錘である。指標を長さに求めると6.33cm以上（Lタイプ）の大型品、5.67～6.29cm（Mタイプ）の中型品、5.64cm以下（Sタイプ）の小型品の3タイプに大別される。一方、大型品（Lタイプ）の重さは30～99gであるが、100gを超えるもの（201・215）もある。中型品（Mタイプ）は32～68g、小型品（Sタイプ）は12～88gであるが、312～317は10g以下ときわめて軽いものもある。320は、木葉形の土錘で、側縁には漁網結節用の溝が彫り込まれている。321は、有溝丸形土錘で、径2.43～2.51cm、重さが14g。

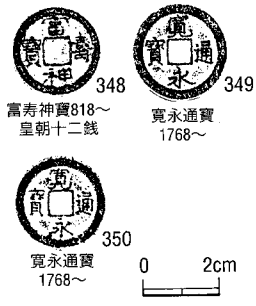


Fig.42　包含層出土銅銭拓影（1／2）

322は人形状、323は棒状、324は円盤状の土製品である。325は、径6mmの棒状石製品。326は、凝灰岩質の石庖丁。327は、長さ14.8cm、幅2.9cm、厚さが4cmの抉入扁平片刃石斧で刃部は鋭利に研ぎ出している。328は、玄武岩の石斧未製品。329・330は、軽石の浮子。331・332は石錘。331には結節痕の溝がある。332は、厚さが4.7cmの滑石製石錘。333～336は砥石片。333は、厚さ1.1cmで表裏面とも研ぎ込まれている。頁岩質。

337は、長さ8.3cm、袋幅3.3cmの鉄斧で刃部はバチ状をなす。338は、現長11.2cmの鉄剣で断面形は菱形をなす。339～343は、刀子片。339は関幅3mm、茎長は3cm。345・346は鉄釘で、先端部は「U」字状に曲がっている。347は馬具片。基部には径1.4cmの環が付く。

348は、818年に初鋳された皇朝十二銭5番目の「富壽神寶」で、市内では2点目の出土である。349・350は、江戸時代中期の「寛永通寶」で、初鋳は1768年であろう。

Ⅲ. お　わ　り　に

今宿遺跡の第3次調査では、弥生時代末の甕棺墓と古墳時代初めの土壙群および古代から中世の土壙や焼土壙、溝遺構を検出した。ただ1基の甕棺墓は、弥生時代末に属する。墓域を立地的に俯瞰すると、はじめに前期の甕棺墓群が、古砂丘の東端（第5次調査区）に造営され、それは次第に弧状の砂丘を北上して中期には中央部から北部の砂丘尾根上に営まれ最盛期（第1・2次調査区）を迎える。あたかも砂丘北端に位置する今山の消長に歩を会わせるように展開し、砂丘を供用地とする墓域の在り方を示している。後期には墓域は衰退し、甕棺墓に混じって箱式石棺墓が営まれるがその拡がりは狭小になる。本調査区の甕棺墓は、墓域外縁に散逸的に展開するうちの1基で、他地域の終末期甕棺墓の在り様に符合する。これらの甕棺墓の終焉に続いて古墳時代初めには、韓半島の陶質土器を初めとする外来系の土器が散見される。調査範囲の狭小さに集落域の展開は明らかでないが、弥生時代から古墳時代初めにおける墓域や集落域の一連の在り様は、博多湾西部の砂州上に立地する西新～藤崎浜の様相と同じ展開を示し、砂丘遺跡の性格を如実に物語っている。

次に、6号土壙からは、布に巻いた鉄鋏や宋銭とともに緑や青紺、赤白色のガラス小玉70個が出土しており、土壙墓の可能性が高い。その分析値からは中世のガラス生産に関する特徴的なデータが得られており、その調査研究に資するところは大きい。今後のデータの蓄積を待ちたい。

最後に、砂丘上に厚く堆積した遺物包含層からは、多量の土錘が出土している。形態的には、管状、丸玉状、木葉状のものがあるが管状のものが圧倒的に多数を占める。このうち管状の土錘は、法量的に長さが6.33cmを超えるLタイプ。5.67～6.29cmのMタイプ。5.64cm以下のSタイプに3大別されるが、大きさに対して重量が比例するとは必ずしも言い難い。これは漁網の深度、つまり捕獲する魚種に起因すると考えられるが、詳細に検討を加えて後述したい。

遺物No	遺　構	法量 長さ×最大径：(cm)	重さ (g)	タイプ	Fig	PL.No	備　考
3	SK02	4.40 × 2.86	35	S	11	14	
4	SK26	4.76 × 3.04	29	S	11	14	
113	SH05	8.04 × 3.67	84	L	26	14	
114	SH05	6.87 × 3.44	72	L	26	14	
115	SH05	6.64 × 3.28	62	L	26	14	
116	SH05	5.60 × 3.05	42	S	26	14	
117	SH05	4.64 × 1.64	10	S	26	14	
124	SD01	7.07 × 3.75	76	L	29	14	
125	SD01	5.52 × 3.88	59	S	29	14	
126	SD01	5.56 × 1.92	17	S	29	14	半欠、細身
127	SD01	6.52 + α × 2.41 + α	16	L	29	14	半欠
128	SD01	2.26 × 2.48	12	S	29		丸形、有溝
131	SP24	7.10 × 3.23	67	L	31	14	
132	SP27	7.76 × 3.91	103	L	31	14	
201	包含層	8.52 + α × 4.02	107	L	38	14	半欠
202	包含層	7.51 × 3.03	99	L	38	14	
203	包含層	7.65 × 3.79	88	L	38	14	
204	包含層	7.71 × 3.83	79	L	38	14	
205	包含層	7.34 × 3.88	75	L	38	14	
206	包含層	7.11 × 3.34	59	L	38	14	
207	包含層	7.94 × 3.19	69	L	38	14	
208	包含層	7.41 × 3.15	75	L	38	15	
209	包含層	7.02 × 3.43	73	L	38	15	
210	包含層	7.82 × 3.11	69	L	38	15	
211	包含層	7.26 × 3.12	56	L	38	15	
212	包含層	7.07 × 2.84	54	L	38	15	
213	包含層	7.27 × 2.87	56	L	38	15	
214	包含層	8.09 × 3.84	92	L	38	15	
215	包含層	7.89 × 3.45	100	L	38	15	
216	包含層	7.18 × 3.66	84	L	38	15	
217	包含層	6.97 × 3.38	69	L	38	15	
218	包含層	6.45 × 3.39	55	L	38	15	
219	包含層	6.35 × 3.64	70	L	38	15	有溝
220	包含層	6.50 × 3.34	59	L	38	15	
221	包含層	6.28 × 3.35	68	M	38	15	
222	包含層	6.76 × 3.41	61	L	38	15	
223	包含層	6.13 × 3.54	54	M	38	15	
224	包含層	6.82 × 3.26	62	L	38	15	
225	包含層	6.41 × 3.01	53	L	38	15	
226	包含層	6.43 × 3.09	53	L	38	15	
227	包含層	6.10 × 3.15	56	M	38	15	
228	包含層	6.52 × 3.89	68	L	38	16	
229	包含層	6.56 × 3.16	44	L	38	16	
230	包含層	6.05 × 2.97	36	M	38	16	
231	包含層	6.80 × 3.37	64	L	38	16	
232	包含層	6.98 + α × 3.12	62	L	38	16	半欠
233	包含層	6.18 + α × 2.90	40	L	38	16	半欠
234	包含層	6.63 × 3.15	58	L	38	16	
235	包含層	6.12 × 2.97	45	M	38	16	
236	包含層	6.06 × 2.87	32	M	38	16	
237	包含層	6.33 × 3.14	60	L	38	15	
238	包含層	6.34 × 2.75	41	L	38	15	
239	包含層	6.28 × 2.95	36	M	38	16	
240	包含層	6.08 × 2.76	40	M	38	16	
241	包含層	6.41 × 2.66	30	L	38	15	
242	包含層	6.75 × 2.53	40	L	38	15	
243	包含層	6.14 × 3.03	34	M	38	15	
244	包含層	6.73 × 2.63	43	L	38	16	
245	包含層	6.05 × 2.89	38	M	38	16	
246	包含層	5.95 × 3.10	48	M	39	16	
247	包含層	5.80 × 3.54	61	M	39	16	
248	包含層	5.79 + α × 3.22	54	M	39	16	半欠
249	包含層	5.68 × 3.73	63	M	39	16	
250	包含層	5.64 × 3.18	51	S	39	16	
251	包含層	5.42 × 3.29	54	S	39	16	
252	包含層	5.36 + α × 3.14	35	M	39	16	半欠
253	包含層	5.36 × 3.21	51	S	39	16	

Tab.4　土錘計測表1

遺物 No	遺　構	法量 長さ×最大径：(cm)	重さ (g)	タイプ	Fig	PL.No	備　考
254	包含層	5.37 × 3.63	50	S	39	16	
255	包含層	5.55 + α × 3.11	38	M	39	16	半欠
256	包含層	5.27 × 3.62	52	S	39	16	
257	包含層	5.46 × 3.13	45	S	39	16	
258	包含層	5.21 × 3.45	52	S	39	17	
259	包含層	5.17 × 3.45	54	S	39	17	
260	包含層	5.01 × 3.63	55	S	39	17	
261	包含層	5.26 + α × 3.14	43	M	39	17	半欠
262	包含層	5.79 × 3.24	50	M	39	17	
263	包含層	5.44 + α × 3.18	48	M	39	17	半欠
264	包含層	5.65 × 3.10	46	M	39	17	
265	包含層	5.66 + α × 3.09	46	M	39	17	半欠
266	包含層	4.89 + α × 2.69	30	S	39	17	半欠
267	包含層	5.52 × 2.87	32	S	39	17	
268	包含層	5.63 × 2.87	34	S	39	17	
269	包含層	5.44 × 2.91	32	S	39	17	
270	包含層	5.06 + α × 2.82 + α	29	S	39	17	半欠
271	包含層	5.58 + α × 2.63	34	M	39	17	半欠
272	包含層	5.76 × 2.97	39	M	39	17	
273	包含層	5.41 × 2.63	36	S	39	17	
274	包含層	4.96 × 2.71	23	S	39	17	
275	包含層	5.03 × 2.64	30	S	39	17	丸形、有溝
276	包含層	4.92 × 2.85	30	S	39	17	
277	包含層	5.94 × 3.21	55	M	39	17	
278	包含層	5.58 + α × 2.80	29	M	39	17	半欠
279	包含層	5.84 + α × 3.30	56	M	39	17	半欠
280	包含層	5.42 + α × 3.05	37	M	39	17	半欠
281	包含層	3.86 + α × 2.74	27	S	39	17	半欠
282	包含層	5.42 × 2.64	34	S	39	17	
283	包含層	5.49 × 3.29	54	S	39	17	
284	包含層	5.28 × 2.76	35	S	39	17	
285	包含層	5.15 × 2.73	33	S	39	17	
286	包含層	5.50 × 3.92	88	S	39	17	
287	包含層	4.16 × 2.90	32	S	39	17	
288	包含層	5.19 × 3.59	71	S	39	18	
289	包含層	5.01 × 3.25	51	S	39	18	
290	包含層	5.60 × 2.76	51	S	39	18	
291	包含層	4.80 × 2.86	34	S	39	18	
292	包含層	5.43 + α × 2.33	14	S	39	18	半欠
293	包含層	4.59 × 2.42	23	S	39	18	
294	包含層	4.38 × 3.75	56	S	39	18	有溝
295	包含層	5.02 × 3.14	41	S	39	18	有溝２本
296	包含層	4.53 × 4.02	49	S	39	18	
297	包含層	3.76 × 3.39	34	S	39	18	
298	包含層	4.70 + α × 2.80	23	S	39	18	半欠
299	包含層	3.86 + α × 2.82	22	M	39	18	半欠
300	包含層	3.34 + α × 3.02	16	L	39	18	半欠
301	包含層	3.05 + α × 2.82 + α	12	S	39	18	半欠
302	包含層	3.88 + α × 2.86	12	S	39	18	半欠
303	包含層	3.01 + α × 2.72 + α	14	M	39		半欠
304	包含層	2.20 + α × 2.50	16	S	39		半欠
305	包含層	5.67 × 2.45	33	M	40	18	
306	包含層	5.19 + α × 1.87	13	M	40	18	半欠
307	包含層	5.15 × 1.91	16	S	40	18	
308	包含層	4.14 + α × 2.06	14	S	40	18	半欠
309	包含層	4.02 × 1.94	16	S	40	18	
310	包含層	4.38 × 1.76	12	S	40	18	
311	包含層	4.28 + α × 1.73	9	S	40	18	半欠
312	包含層	3.78 × 1.58	9	S	40	18	
313	包含層	4.42 × 1.22	6	S	40	18	
314	包含層	4.01 × 1.24	5	S	40	18	
315	包含層	4.63 × 1.38	7	S	40	18	
316	包含層	4.81 × 1.27	7	S	40	18	
317	包含層	4.69 × 1.13	5	S	40	18	
318	包含層	2.89 + α × 1.50	6	S	40	18	半欠
319	包含層	6.29 × 3.07	66	M	40	18	
320	包含層	4.65 × 2.77	40	S	40	18	有溝
321	包含層	2.43 × 2.51	14	S	40	18	丸形、有溝

Tab.5　土錘計測表2

今宿遺跡3次調査出土ガラス小玉の保存科学的調査

比佐陽一郎・片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）

出土ガラスは、その出現期の資料を中心に調査研究が進んでいるが、中世のガラス製品については調査事例がそれほど多くない状況がある。今回は平安時代末（12世紀）頃と考えられる土壙墓から出土した装身用の玉70点について調査の機会を得たので、ここにその結果を報告する。

資料の内容は一覧表（Tab.2・3）に示すとおりである。これらは色調から青、または緑色系のもの68点と、白地に赤色を被せたツートンカラーのもの2点に大きく分類され、前者は更に青紺色系19点と緑色系49点に細分できる。しかし同じ色調の中でも濃淡などがあり一様ではなく、具体的に色を文字化することは困難である。ここでは便宜的に青紺色、緑色として表現する。いずれも径が5.2㎜以内に収まる、いわゆる小玉に属する大きさであるが、赤白玉の方が若干小振りである。

またアルキメデス法による見かけの比重測定も試みたが、資料が小さく、また気泡が含まれることなどから誤差も大きいと思われる。しかし測定可能であった資料では3.43～5.18(平均4.2）と、比較的まとまった、且つ大きな数値が得られている。この結果からは全て同じ系統で、それもアルカリ系ではなく鉛系のガラスであることが推測された。

続いて顕微鏡による表面観察を行った。青・緑系の個体では、多くの資料で風化によるものと見られる細かい凹凸が表面を覆っていたり、更には風化が進み、かなり痩せているものも見られる。風化による蝕像を見ると、玉の外周に沿って渦を巻くような状態を呈しているものが観察され、この色調の小玉が何らかの心材に溶融したガラスを巻き付けて作られたことが看取される。

一方の赤白玉は、透明度の低い白色のガラスに透明度の高い赤色ガラスを被せた重層ガラスで、非常に整った形状を呈している。赤色ガラスには孔の長軸方向に平行する微細な気泡列が観察されるが、白色ガラスは不透明で小口面にしか露出していないため、気泡は観察できず、その製作技法は不明である。このことから詳細は明らかでないが、白色のガラスに引き延ばして作られた赤色ガラスを被せ、再加熱により端部を丸くしたものと推測される。

次に蛍光X線分析法による材質調査であるが、今回はガラス小玉を対象としたため、X線強度が小さくても測定が可能で、測定範囲が絞れる微少領域用エネルギー分散型の装置（エダックス社製：Eagle μ-plobe）を使用し、対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧・電流：20kV・320～460μA／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3㎜ϕ／測定時間300秒の条件により行った。

本来、詳細な調査を行うには、風化層を除去した上で標準資料を用いた校正により成分の定量値を求める必要があるが、今回は大まかな傾向を知るための非破壊的手法による定性分析とし、顕微鏡下でのクリーニングを行った後、そのまま測定している。

青・緑系の個体では、ガラスの主成分である珪素の他、鉛が特徴的なピークとして表れている。同時にカリウムの強いピークも見られることから、カリウム鉛ガラスに属すると考えられる。この他、検出される元素としては、アルミニウム、カルシウム、マンガン、鉄、銅、亜鉛が、ほぼ全ての個体で検出されている。しかし細かく見ると、元素の中には個体によって強度が異なっているものがあり、これらは大きく二つのグループに分けることができる。一つはマンガンが強く表れ、銅は微弱、或いはピークとして確認できないもの。このグループでは7.8keV付近に突出が見られるものがあり、コバルトのKβ線と考えられる。もう一つは逆に銅が強く、マンガンが微弱あるいは確認できないグループである。前者は青紺色、後者は緑色と、それぞれの色調に対応しており、各元素の強度の違いは

着色要因物質の種類や量に起因しているようである。また同一グループ内でも個体ごとで各元素の強度に違いが見られるが、これは非破壊による表面分析のため、残留した埋土や風化による元素の変化が影響しているものと思われる。なおコバルトは、これまでの研究から青紺色の着色要因で、マンガンはコバルト鉱石に伴う不純物であると考えられている。

赤白玉は、色調の異なる部分でそれぞれ分析を試みたが、特に白色部分の範囲がX線の照射面積と同程度で、赤色部分の影響が含まれるためか、定性的にほとんど違いは見られなかった。青・緑系統と同様に鉛やカリウムが強く検出されており、ガラスの種類としてはカリウム鉛ガラスに分類されると思われる。しかし銅やマンガンなどはピークとして確認できないほど微弱で、逆に他では見られないヒ素が強いピークとして現れるという違いがある。また外層である赤色の発色については、古い時代のものでは酸化銅が、近代以降の製品ではカドミウムを用いる例があるとされるが、今回の資料ではどちらの元素も検出限界以下で、その要因は不明である。これまでに無い組成を示しており、今後、類例の増加を待って検討を加える必要があると考える。

調査の結果、一部不明な点も残されたが、分析を行った70点はいずれもカリウム鉛ガラスという結果が得られた。カリウム鉛ガラスは中国宋代に起源を持つ、いわゆるクリスタルガラスで、日本でもほぼ同時期に流通が開始するとされており、これまで博多遺跡群59次、62次、71次、79次調査や太宰府市宝満山11次調査出土資料が肥塚隆保氏らの分析によって確認されている。特に博多59、62次では坩堝に残留したガラスがカリウム鉛ガラスと同定され、更なる分析調査によって原料の調合用ではなく加工のための溶解に用いられたことが明らかにされており、この種のガラスの加工が中世の日本で行われていたことは間違いないようである。しかし、製品も含めた鉛同位体比分析では、少なくとも対馬対州鉱山産と中国産の可能性を持つ二種類の鉛が用いられており、今回の資料がどこで製造、加工されたものかを現時点で得られた情報のみで判断することはできない。今後の更なる調査が期待される。

今回の調査によって、中世のガラス文化の中に、カリウム鉛ガラスの事例をまた一つ付け加えることができた。市内では前に挙げた以外にも博多や箱崎といった海岸地域の遺跡を中心に、中世のガラス製品が数多く出土している中で、分析に供されたのはごく一部であるが、この種のガラスが頻繁に流通していたことを予感させる結果となっている。

なお調査にあたっては、奈良文化財研究所肥塚隆保氏より多大なるご指導、ご助言を頂いた。また分析や計測にあたっては内海好絵氏にご協力頂いた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

参考文献

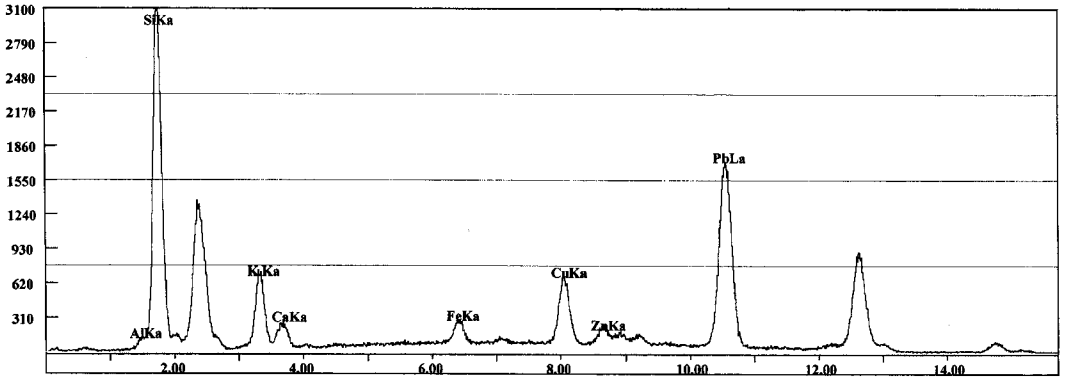
肥塚隆保 2001「太宰府市宝満山遺跡・原8次調査出土ガラスの分析調査」『宝満山遺跡Ⅲ』太宰府市の文化財第55集　太宰府市教育委員会

山崎一雄・肥塚隆保 1993「博多第59次調査ピット0018出土の無釉壺内に付着した緑色ガラスの化学分析」『博多36』福岡市埋蔵文化財調査報告書第328集　福岡市教育委員会

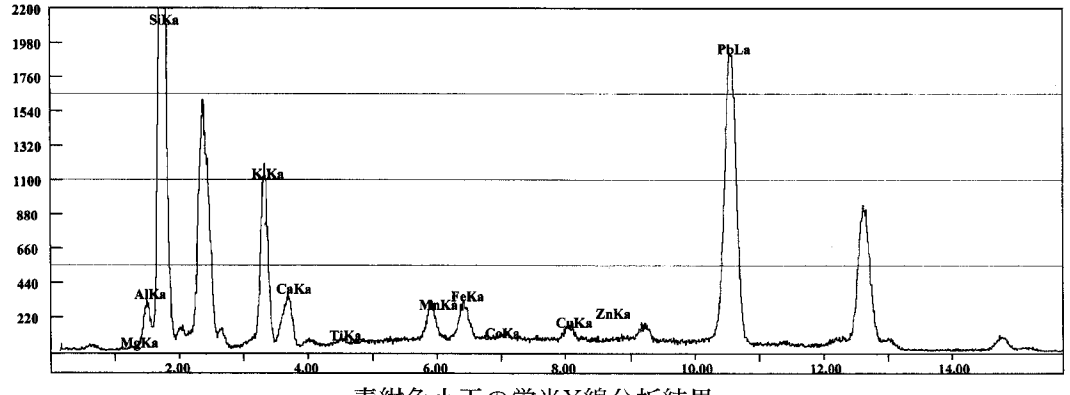
山崎一雄・肥塚隆保・白幡浩志 1995「博多遺跡群第62次調査で出土した無釉壺破片に付着した緑色ガラスの化学分析値と鉛同位体比」『博多48』福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集　福岡市教育委員会

山崎一雄・肥塚隆保・白幡浩志 1996「博多遺跡群第71次調査で出土した白磁片とそれに付着した緑色ガラスなどの化学分析および鉛同位体比測定」『博多53』福岡市埋蔵文化財調査報告書第450集　福岡市教育委員会

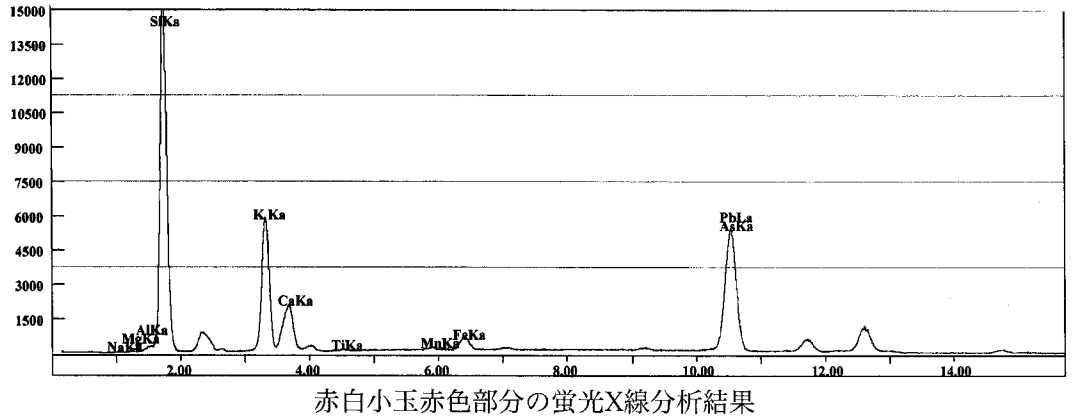
山崎一雄・肥塚隆保・白幡浩志 1996「博多遺跡群第79次調査で出土した緑色ガラス容器の化学分析と鉛同位体比測定」『博多50－博多遺跡群第79次調査の概要－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第447集　福岡市教育委員会



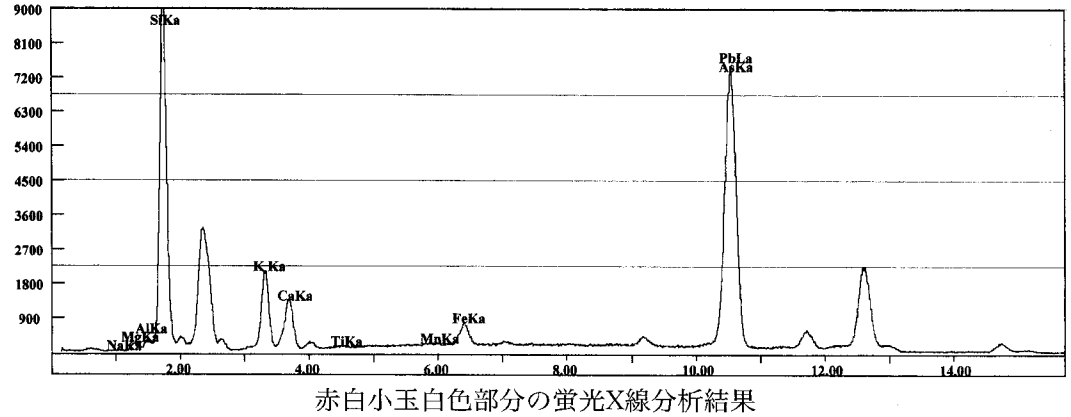
緑色小玉の蛍光X線分析結果



青紺色小玉の蛍光X線分析結果



赤白小玉赤色部分の蛍光X線分析結果



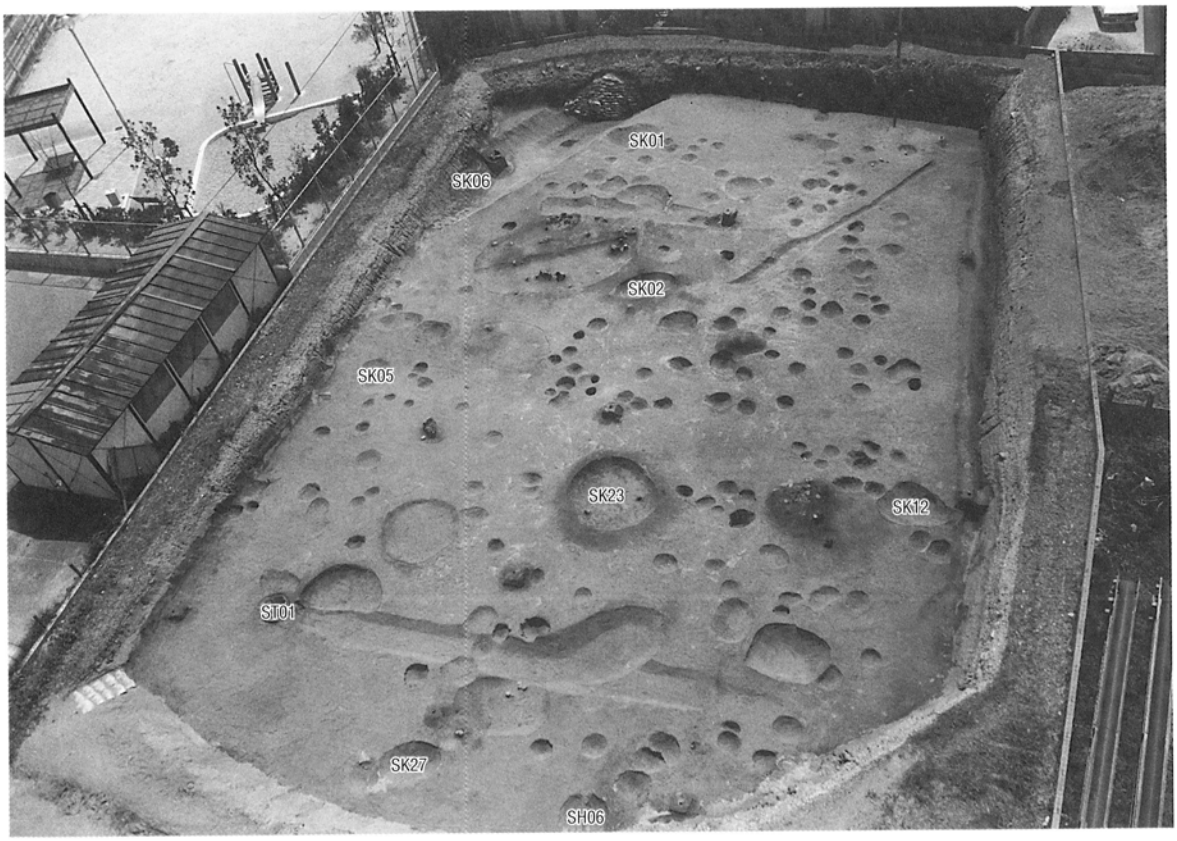
赤白小玉白色部分の蛍光X線分析結果

No.00044
(×13)
No.00050
(×13)
No.00055
(×13)
No.00057
(×13)
No.00063
(×13)
No.00092
(×13)
No.00104
(×22)
No.00105
(×34)

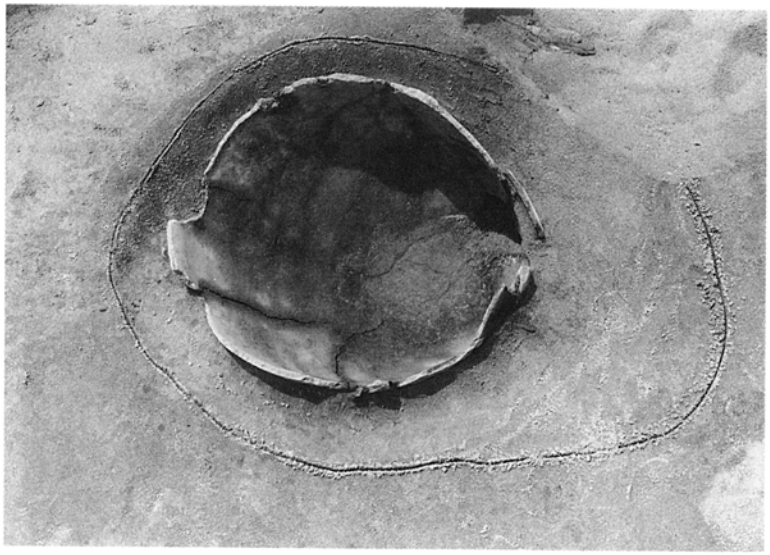
(スケールは1mm)

PLATES

(1) 調査区全景(西より)

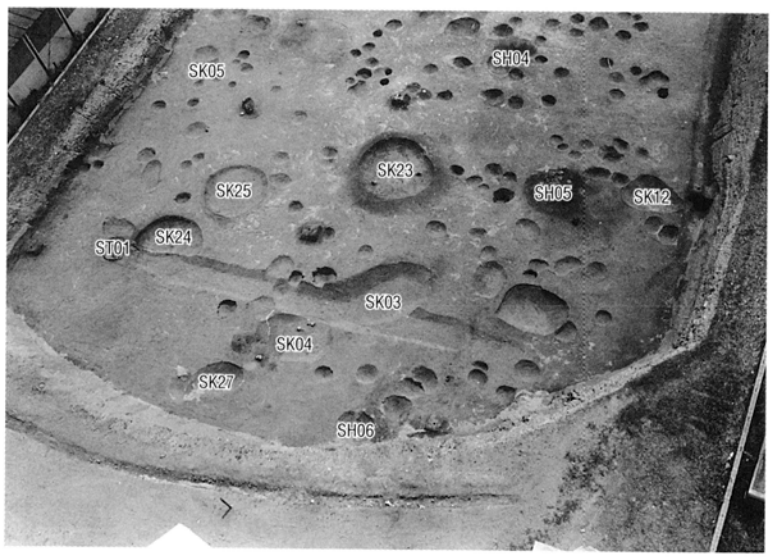


(2) 調査区全景(北より)

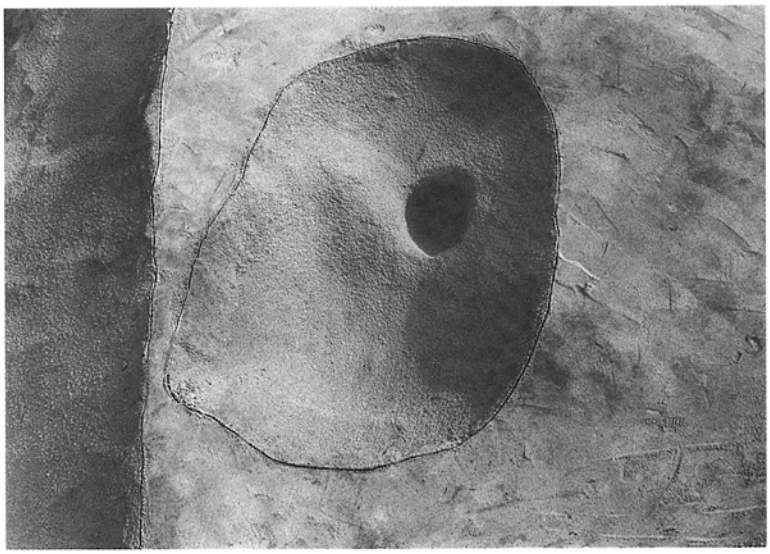


(1) 1号甕棺墓全景(北より)

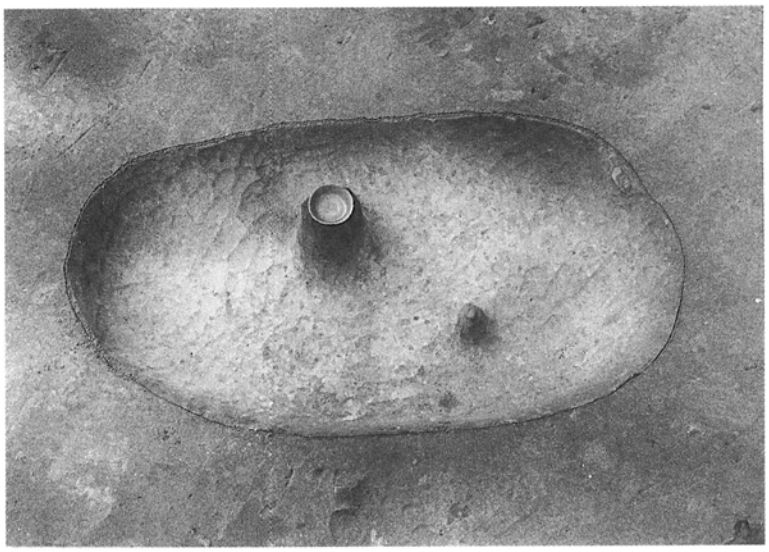
(2) 1号甕棺墓全景(東より)



(3) 調査区北半部全景(北より)



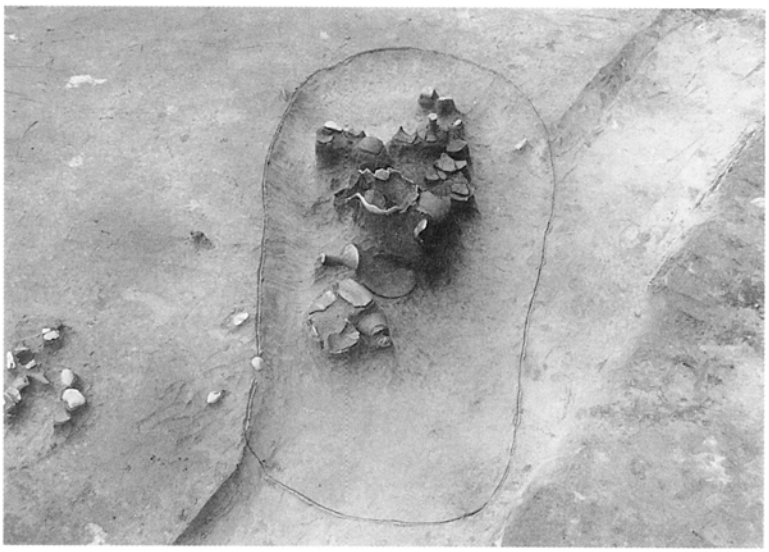
(1) 1号土壙全景(北より)



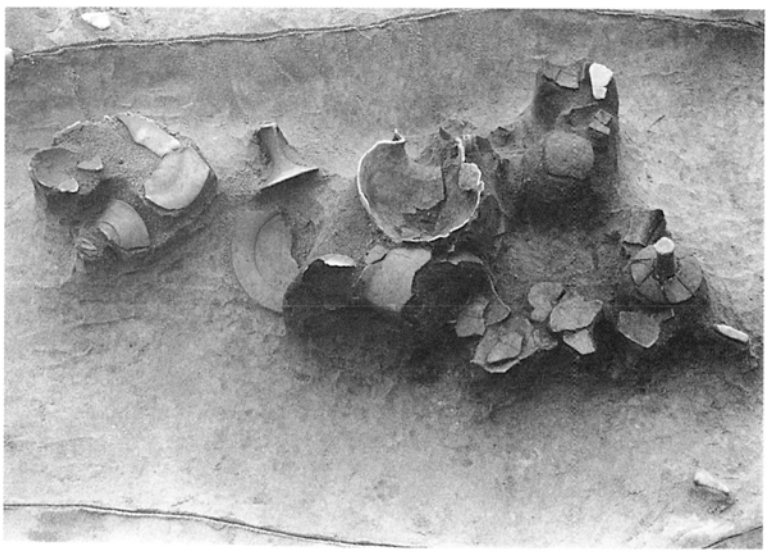
(2) 2号土壙全景(南東より)

(3) 3・4号土壙全景(北より)

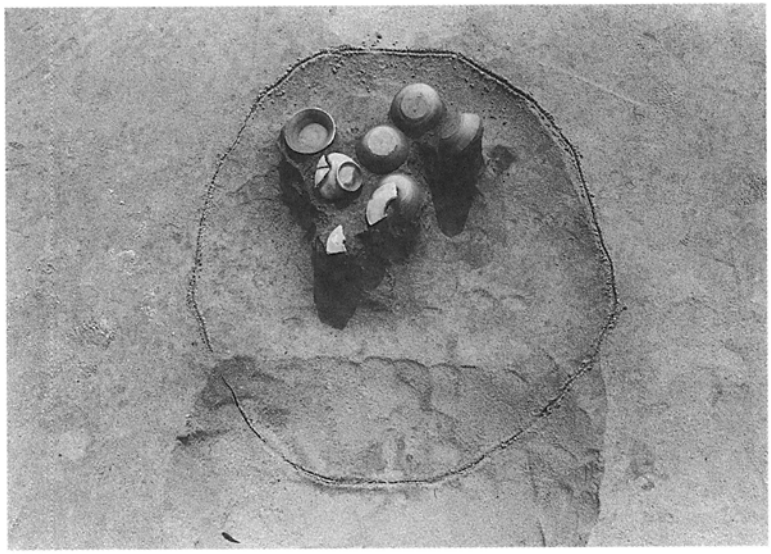
(1) 3・4号土壙遺物出土状況(北より)



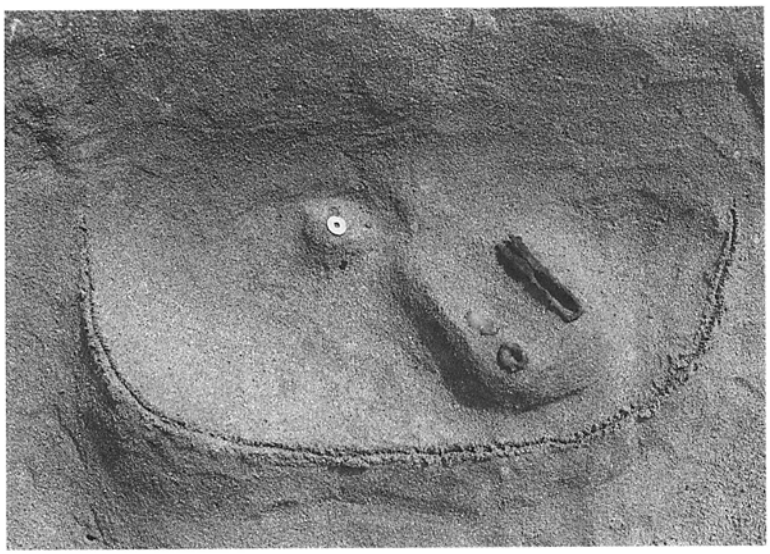
(2) 3号土壙遺物出土状況(北より)



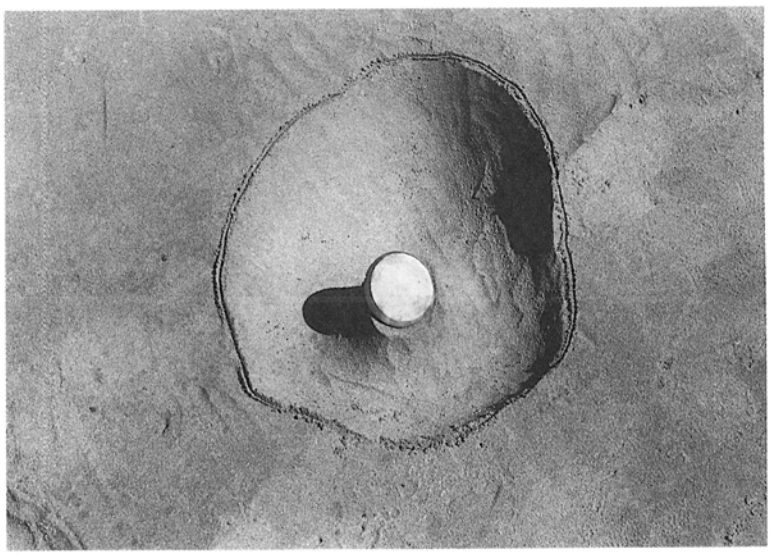
(3) 3号土壙遺物出土状況近景(西より)



(1) 5号土壙遺物出土状況(北より)

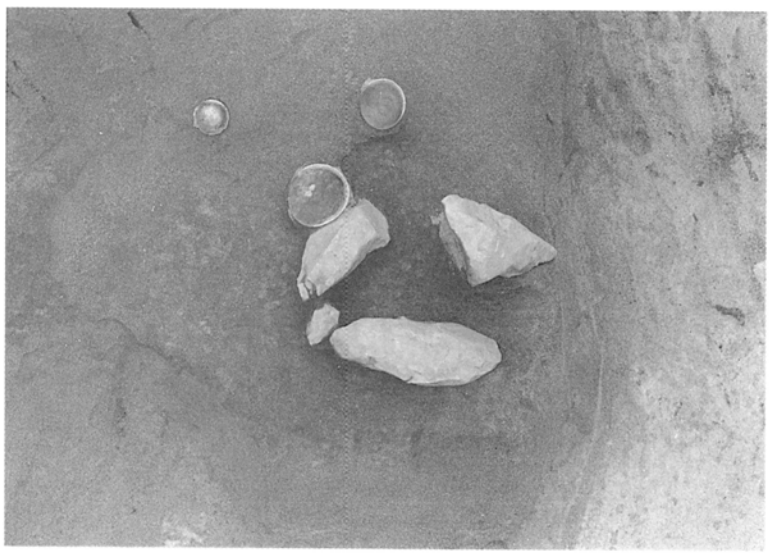


(2) 6号土壙遺物出土状況(西より)



(3) 7号土壙遺物出土状況(南より)

(1) 1号炉跡・6号土壙遺物出土状況(西より)

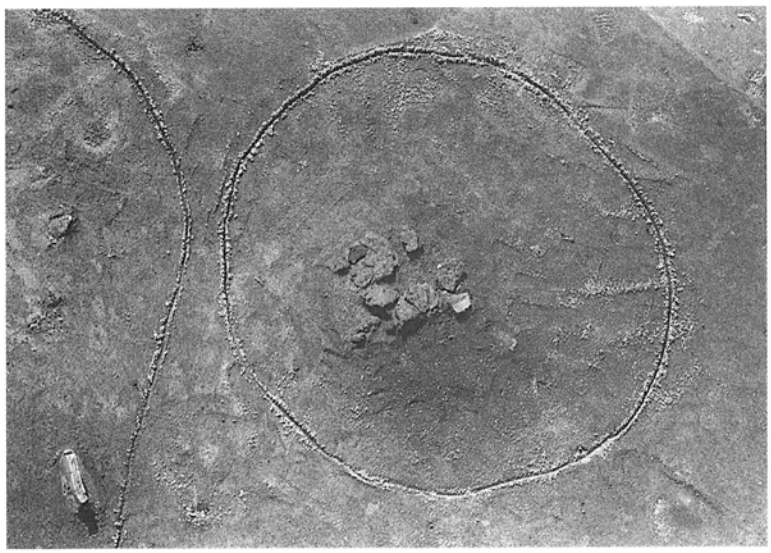


(2) 1号炉跡遺物出土状況(西より)

(3) 2・3号炉跡遺物出土状況(東より)

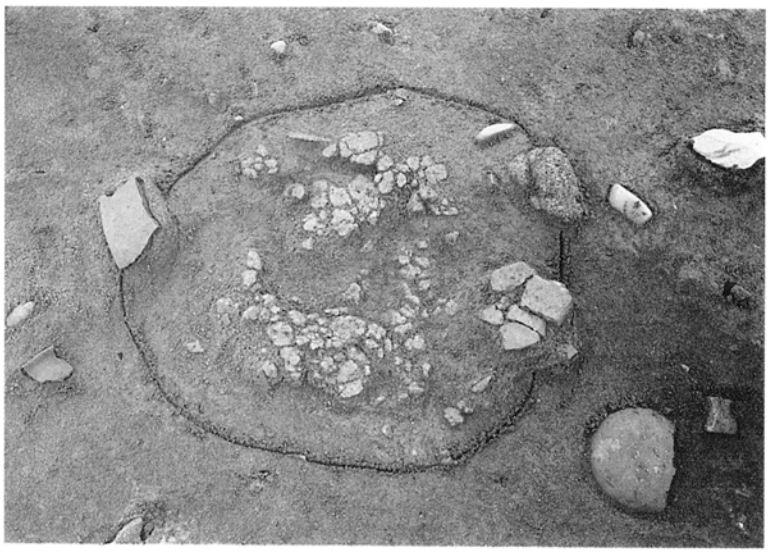
(1) 2号炉跡遺物出土状況(南より)

(2) 2号炉跡土層断面(北より)

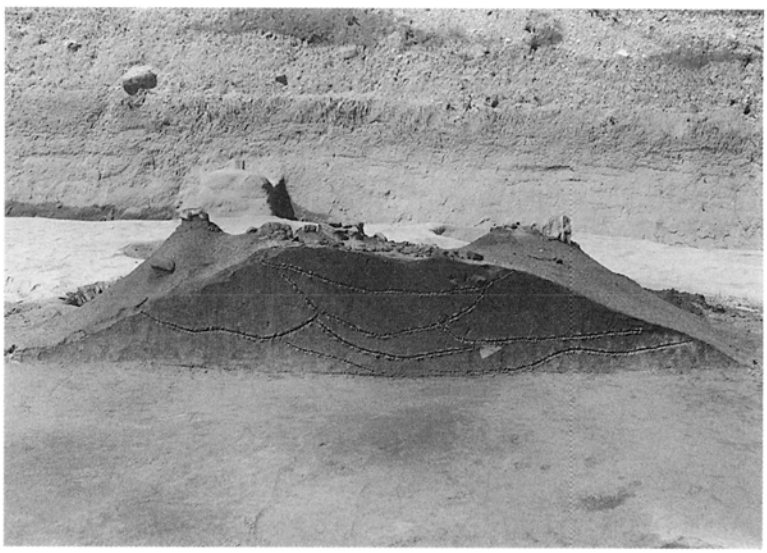


(3) 3号炉跡全景(東より)

(1) 4号炉跡全景(南より)

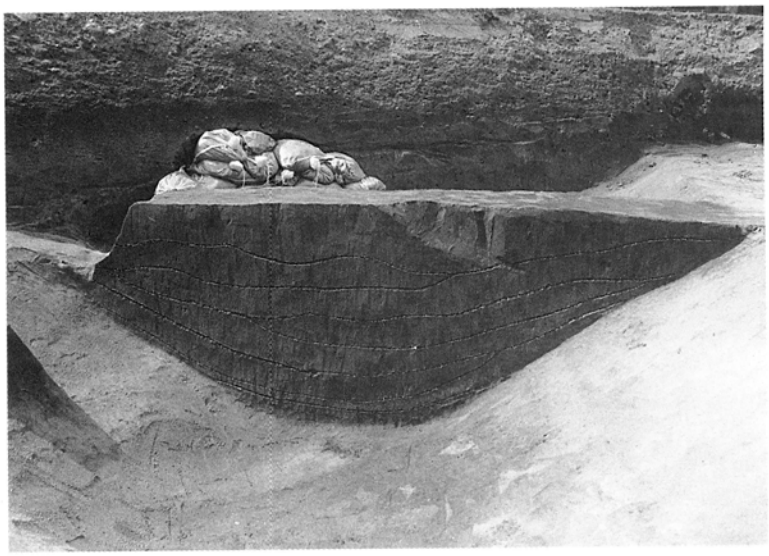


(2) 5号炉跡全景(西より)



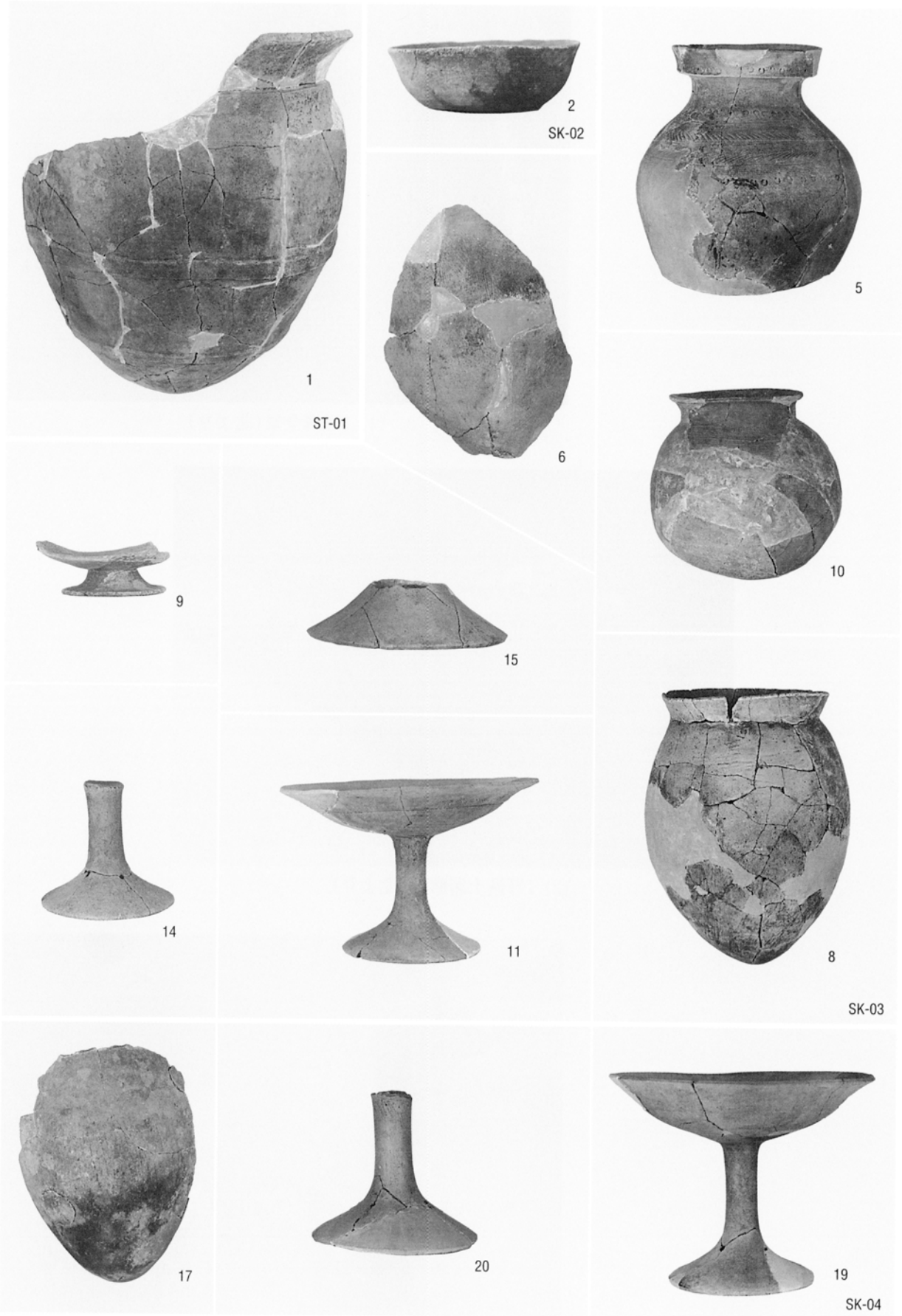
(3) 5号炉跡土層断面(東より)

(1) 1号溝全景(北より)

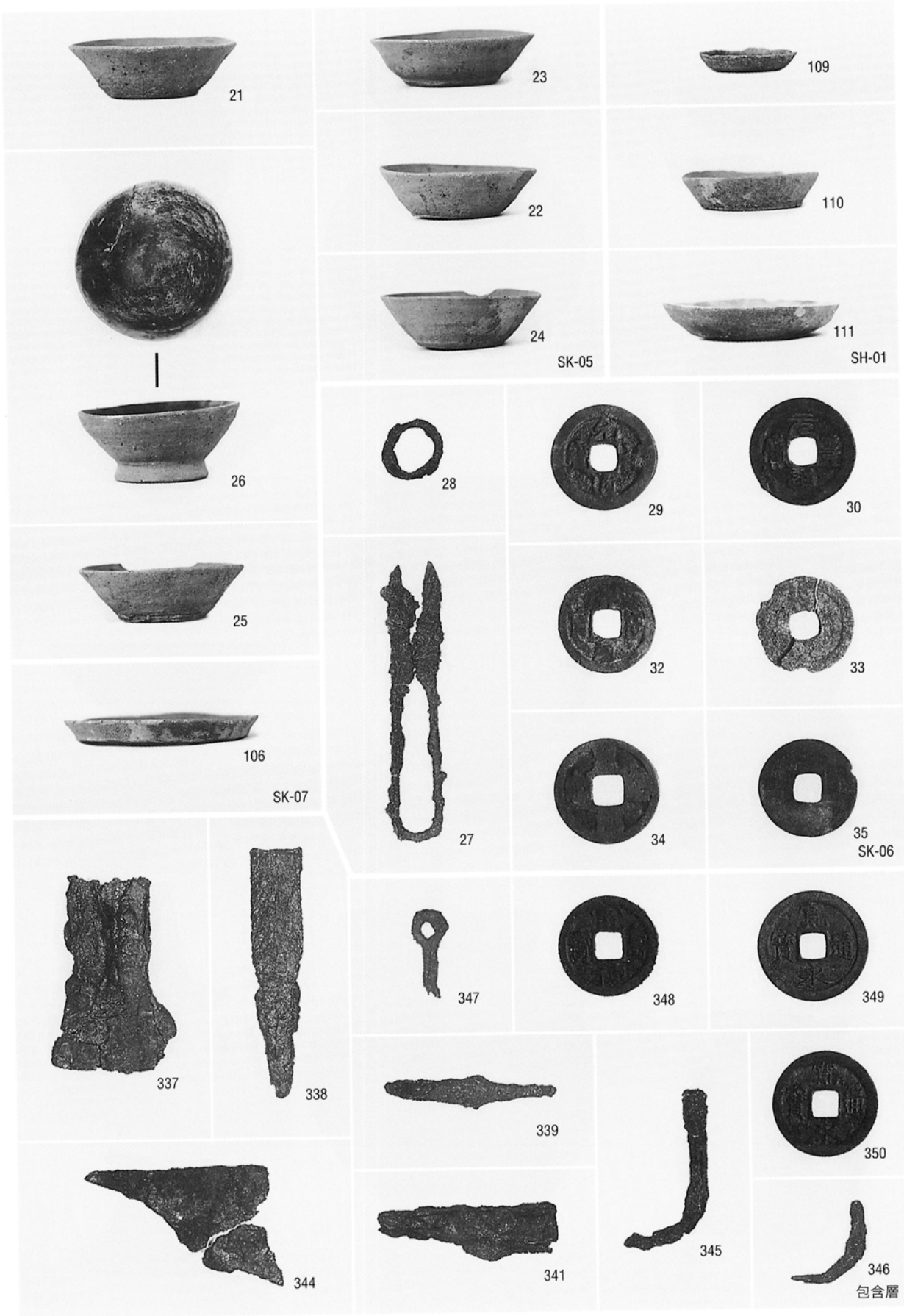


(2) 1号溝土層断面(北より)

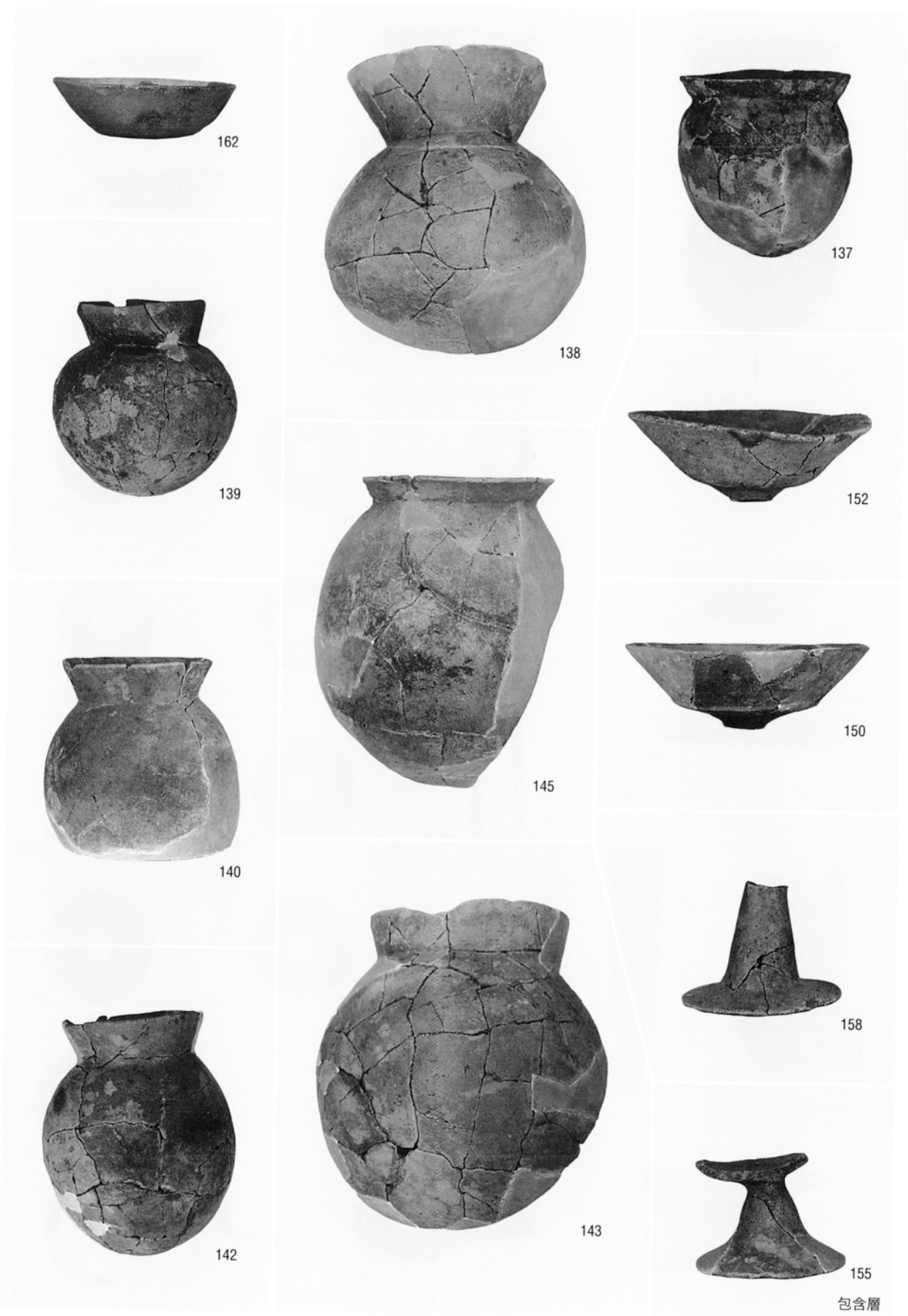
(3) Ⅶ区出土土器群(北より)



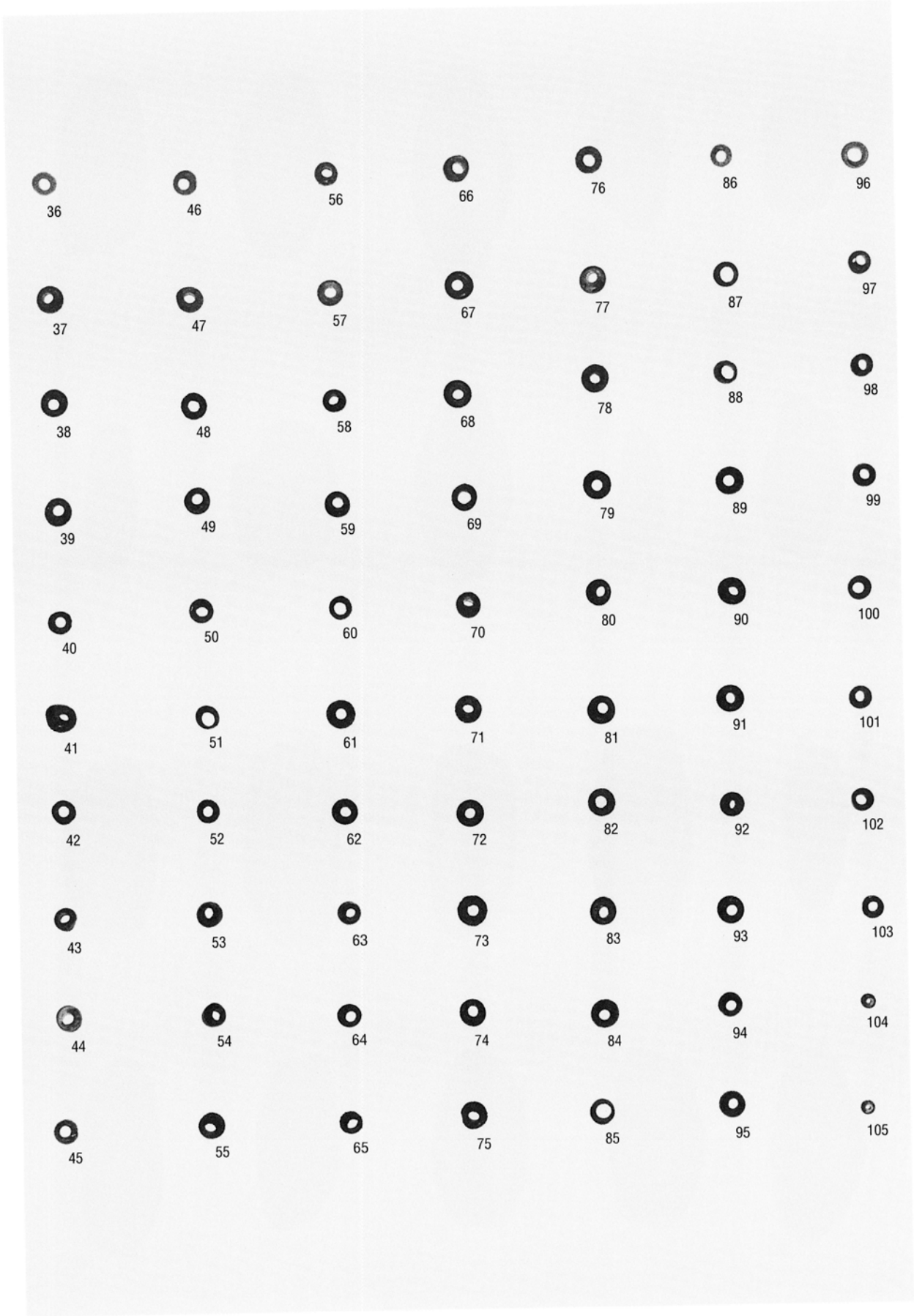
出土遺物1(縮尺不同)


21
23
109
22
110
24
SK-05
111
SH-01
26
28
29
30
25
32
33
106
SK-07
27
34
35
SK-06
337
338
347
348
349
339
350
344
341
345
346
包含層

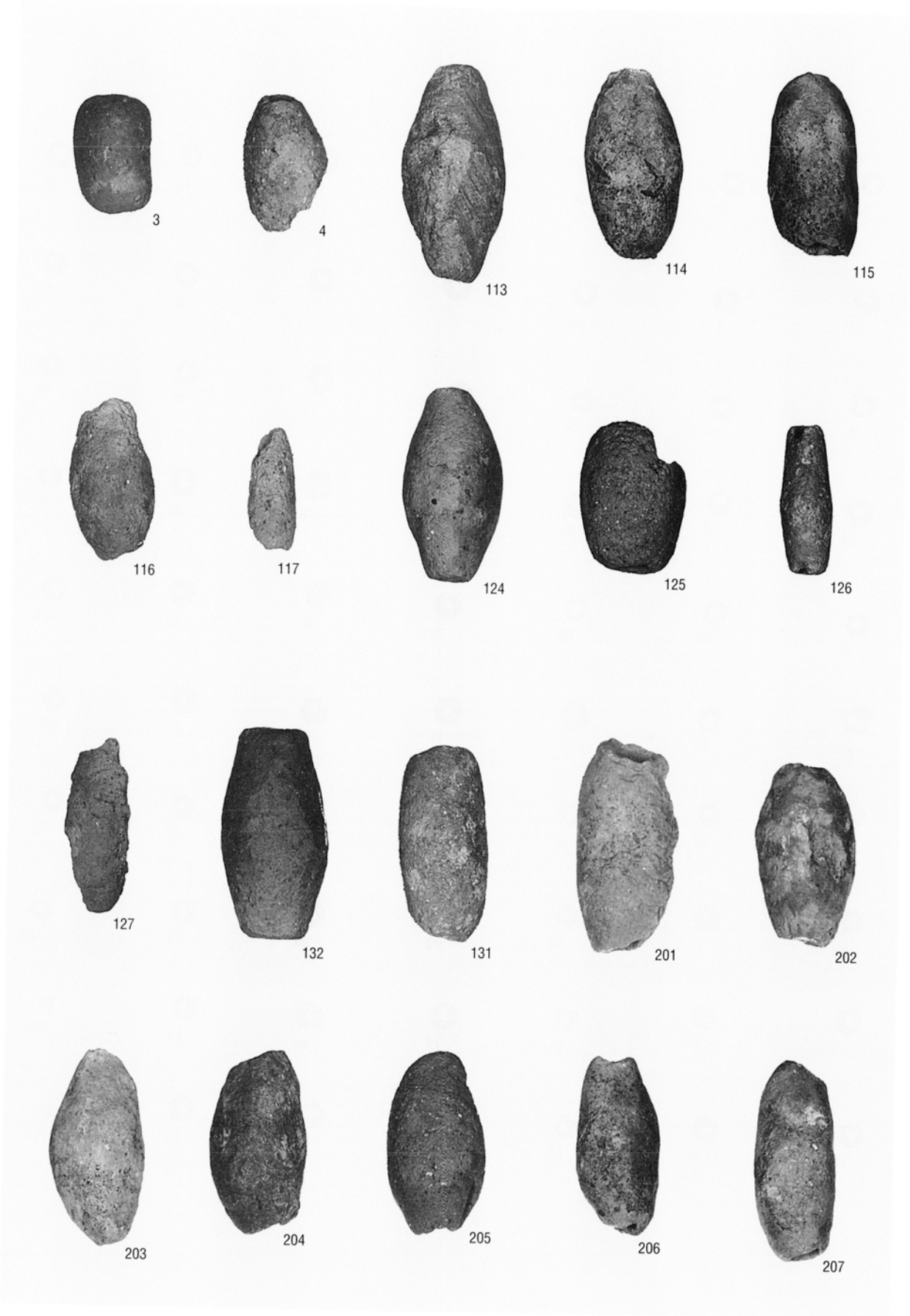
出土遺物2(縮尺不同)



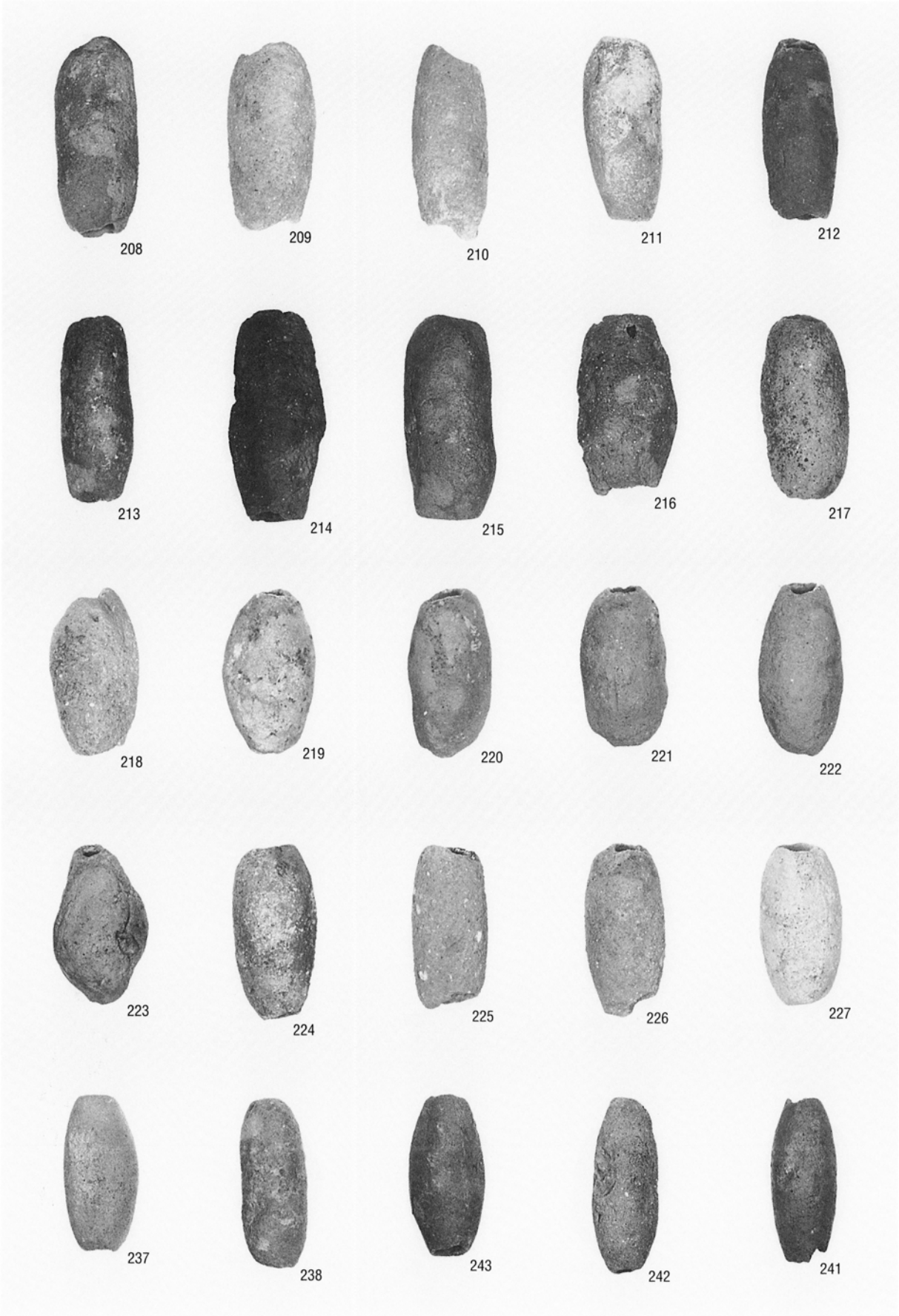
出土遺物3(縮尺不同)



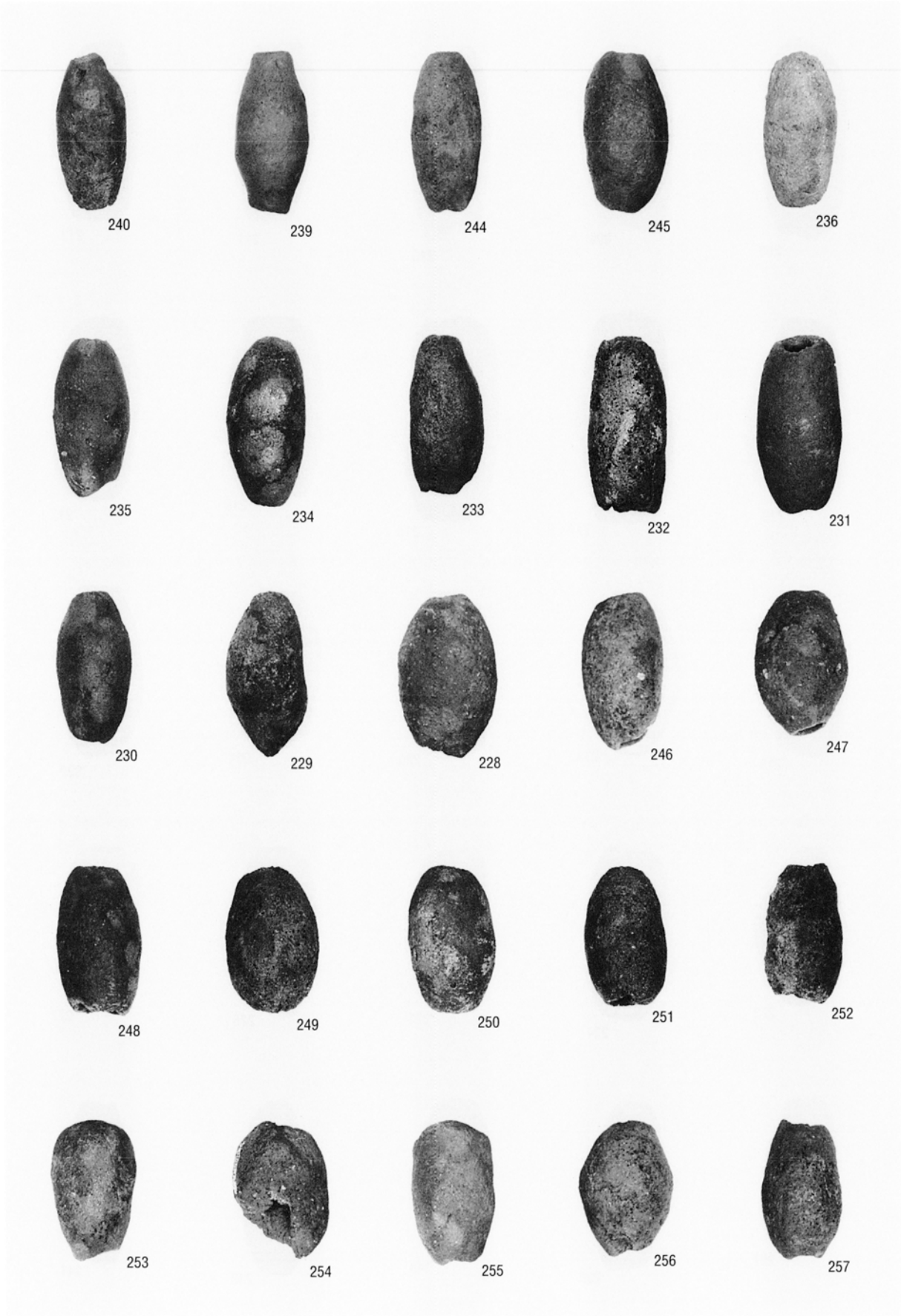
6号土壙出土ガラス玉(縮尺不同)


3
4
113
114
115
116
117
124
125
126
127
132
131
201
202
203
204
205
206
207

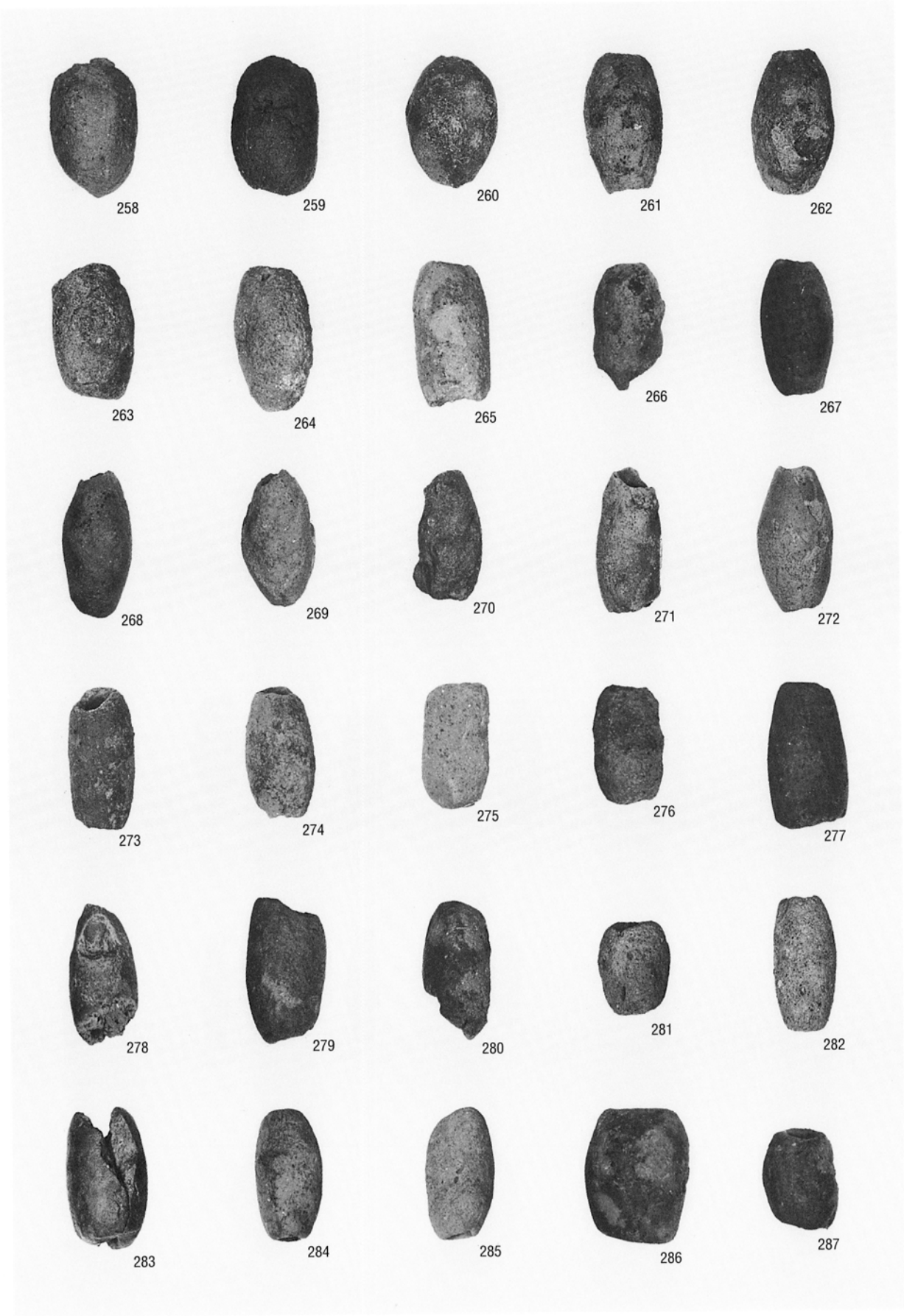
出土土錘1(縮尺不同)


208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
237
238
243
242
241

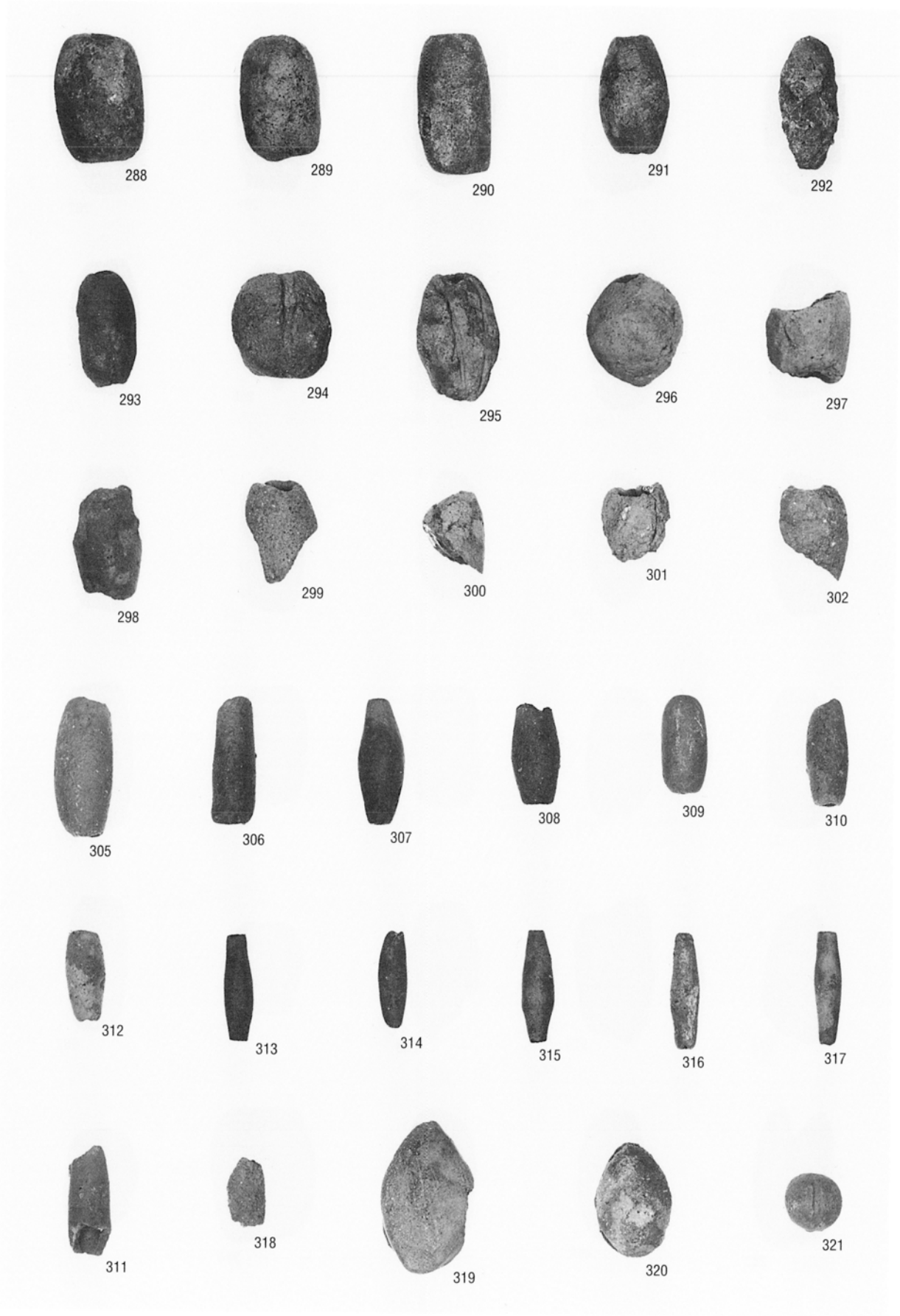
出土土錘2(縮尺不同)


240
239
244
245
236
235
234
233
232
231
230
229
228
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257

出土土錘3(縮尺不同)


258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287

出土土錘4(縮尺不同)


288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
305
306
307
308
309
310
312
313
314
315
316
317
311
318
319
320
321

出土土錘5(縮尺不同)

今宿遺跡 2

―― 第 3 次調査の概要 ――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第738集

2003 年 3 月 31 日発行

発行　福岡市教育委員会

印刷　㈱九州カスタム印刷